

# アジアの人々の協働から学ぶ

XXVIII



第28回国際ワークキャンプ報告書(インドネシア)

A REPORT OF INTERNATIONAL WORK CAMP (INDONESIA)

2014

桃山学院大学



















## 目 次

語句説明	1
感謝 清水 真一	3
第28回ワークキャンプを終えて 三宅 亨	4
僕たちは世界を変えることができない。でも…。 松平 功	6
第28回国際ワークキャンプ（インドネシア）の引率を終えて 松本 雄一	8
スケジュール	11
IWC28 Member introduction	16
テーマ	17
調理実習	18
募金活動	19
合宿	20
入村式	21
アスラマについて（第2、4、5アスラマ）	22
プリンビンサリ村	24
アスラマの子どもたち	25
バニユボ村	27
衛生指導	28
日本語プロジェクト	29
小学校訪問	30
中学校訪問	31
高校訪問	32
看護学校訪問	33
交流会	34
日本食	36
教会	37
ワーク内容	38
運動会	39
離村式	40
大学訪問	41
エヴァリユエーション	42
アガペー・フェスティバル	44

文化探訪	45
参加学生のレポート	
「気づきと学びから得たもの」	学生隊長 古城 克哉 46
「一歩を踏み出す勇気を」	学生副隊長 深川 智哉 48
「気づき、学びそして感謝。」	学生副隊長 小塚 未央 52
「インドネシアで得たもの」	新 歌奈子 55
「たくさんの出会い、気づき、学び」	黒田 柊平 58
「出会いや経験、すべてに感謝。」	下地 皓太 61
「素敵な体験、経験をありがとう」	杉山 怜美 64
「ワークキャンプを体験して」	西村 寛生 67
「暑い熱い夏」	貴田 薫 70
「光と影」	黒岩 三沙樹 73
「ワークキャンプを通して感じた出来事」	福島 弘大 76
「ワークキャンプを終えて」	中川 翔太 79
「忘れられない体験」	丸茂 太暉 82
「インドネシアで変わったもの」	村上 大地 84
「インドネシアで学び、感じ、考えたこと」	森 健 87
	Nonelry rossya ndriani 90
	Colsellia Alpha Victoria Tentua 91
	Sem Fredrix Lesnussa 92
	Forman Suprandata 93
第28回国際ワークキャンプ預り金精算書	95
第29回国際ワークキャンプ参加者募集要項	96
編集後記	97



## 語句説明

### 【あ】

IWC	国際ワークキャンプInternational Work Campの略語 私たちは28回目なので「IWC 28th」。
アスラマ (Asrama)	インドネシア語で「寮」、「寄宿舎」という意味で、ここでは、バリ・プロテスタント・キリスト教会（GKPB）が運営するウィディア・アシ財団によって設立された児童養護施設のことを指す。バリ島に7か所あり、私たちは第2、4、5アスラマを訪問した。
イブ (Ibu)	インドネシア語で「母」の意。年長または社会的地位の高い女性に対する尊称。私たちはホームステイ先のお母さんや施設の女性に対して「イブ」と呼んでいた。
エヴァリュエーション	英語で「評価」という意味。毎年現地でのワークキャンプの活動を振り返って、アスラマの子どもたちやスタッフ、そして村の人々のために、改善点をバリ・プロテスタント・キリスト教会（GKPB）の関係者に提案する場が設けられている。詳しくは42頁参照。

### 【か】

交流会	子ども達との親睦、交流を目的に開催された。詳しくは34頁参照。
コピ (Kopi)	インドネシア語でコーヒーを指す。コピ・ルアクというコーヒーが有名で、イタチの糞から採られる未消化のコーヒー豆からできている。産出量が少なく、とても高価である。

### 【た】

ティダ・アパアパ (Tidak apa-apa)	インドネシア語で「何とかなるさ」「気にするな」の意。最初は文化の違いに戸惑うこともあったが、この精神はとても勉強になった。
-----------------------------	---

### 【は】

バティック	ろうけつ染め布地の特産品のことでインドネシアの民族衣装のひとつ。ユネスコの世界文化遺産にも登録されている。お土産として人気が高い。
パパ (Bapak)	インドネシア語で「父」の意。年長または社会的地位の高い男性に対する尊称でもある。
パニユポ村	バリ島の北西部に位置する村で、アスラマで暮らす一部の子どもの出身村である。詳細は27頁参照。
Hari ini	賛美歌のひとつで、英語では「This is the day」、日本語では「この日は主が造られた」として歌われている。わたしたちは交流会や運動会などでこの歌をインドネシア語と日本語で歌った。また、インドネシア語で「今日」という意味。

バロン	インドネシアのバリ島に伝わる獅子の姿の聖獣。バリでは良い魂と悪い魂がいつも同時に存在していると信じられていて、良い魂を表すバロンと悪い魂を表す魔女ランダが、バリ独特の楽器ガメランの演奏によって終わり無き戦いを始め、どちらの勝利もないまま終わるというストーリーのバロンダンスをキャンプ最終日の文化探訪の際に見学した。
ピサングレン	揚げたバナナのこと。インドネシアではおやつ感覚でよく食卓に並んでいる。ホームステイ先で食べたメニューも多い。
プリンビンサリ村	バリ島西部ジュンブラナ県ムラヤ郡に位置する、私たちの活動拠点となった第2アスラマがある村。バリ島に住む大多数の人はヒンドゥー教を信仰しているが、このプリンビンサリ村はキリスト教徒によって開墾された歴史がある。ちなみに、インドネシア国民の約9割はイスラム教徒である。

## 【ま】

マンディ	「お風呂」「水浴び」という意味。インドネシアではトイレと水浴び場一緒になったユニットバスタイプ浴室が一般的で、アスラマでは朝と夕方に水浴びをする。また、お湯は出ないので朝のマンディはとても辛かった。
ミオ (Mio)	日本の企業ヤマハ発動機株式会社が東南アジア向けに販売しているバイクの名前。現地でこのバイクを見かけないことがないくらい有名である。IWCメンバーの中に同じ名前のスタッフが居るので、よくからかわれていた。笑

## 【ら】

ルピア (Rupiah)	インドネシアの通貨単位。(1円=約110円)
-----------------	------------------------

## 【わ】

ワーク	今年のワークは、第5アスラマ・ムラヤにある川の護岸工事を行った。詳細は38頁参照。
ワルン	お菓子や食材、日用品などを扱う商店のこと。敷地内には休憩スペースがあるお店が多い。わたしたちは自由時間によくワルンに行ってお菓子を買って、そのスペースで談笑していた。ちなみにIWCメンバーの中で一番人気だったのは「MAGNAM」というアイスクリーム。ワークを終えてからのMAGNAMは絶品！



## 感謝



国際ワークキャンプ実行委員長 清水 真一

2014年4月にキリスト教センター長に就任し、また、第28回IWC実行委員長のお役目を引き受けることと相成りました。このようなかたちでIWCにかかわるのはほんとうに久しぶりのことで、実質的にまったくの新人としてその職務に就いたという印象しかない、といった方が正しいかのではないかと考えたほどです。第28回IWCの「協働」の業を成し遂げるにあたり、多くの関係諸氏、関係方面に多大のご支援、ご協力をいただいたことにこころより感謝いたします。

今回も、IWC実施に先立って事前の準備が着々と進められ、7月1日には、同月13日までの滞在予定でバリ側の総責任者であるスィクラマ氏が、交わり、事前の情報交換のために来日されました。折しも7月1日は、ペトラ・キリスト教大学（本学海外長期留学派遣校：インドネシア・スラバヤ）の関係者一行をお迎えし歓迎礼拝がとりおこなわれる日で、スィクラマ氏来日初日と重なりました。氏も礼拝に同席され、チャペルはインドネシア一色の感。本学とインドネシアとの交流が着実に根を下ろしていることを実感させられたのでした。

第28回IWCのワーク隊は、三宅亨教授（経営学部）を団長に、松平功チャプレン、松本雄一キャリアアセター課員で引率団が構成され、15名の学生が参加することとなりました。事前研修は、第1回の5月8日から出発直前の合宿までを含めて、都合二十数回に及ぶ充実した内容の研修が準備され、実施されたのですが、これには、引率団はもとよりその他の多くの方々に多大のご協力をいただいたのであります。インドネシア、バリについては深見純生教授（国際教養学部）、小池誠教授（国際教養学部）の両教授からそれぞれお話をいただき、インドネシア語については由比邦子兼任講師（インドネシア語担当）に多大の時間を割いていただきました。また、健康管理については、今井敏子学生支援課（保健室）員にご指導を仰ぎましたし、歌唱指導等のお手伝いについても前回の第27回IWC参加の学生諸君にたいへんお世話になりました。御礼申し上げます。

バリ現地でのワークの詳細については本報告書の本篇に譲ることにして、ワーク隊を受け入れ、これを支えて下さったプリンピンサリ村の人々、キリスト教関係者の方々、そして、ムラヤの生徒たちに、なかならずアスラマの子どもたちに感謝しなければなりません。また、ワーク隊を見守ってくださったバリ現地の日本領事館、バリ・プロテスタント・キリスト教会等の関係機関・組織にも感謝申し上げます。より直接的なかたちでお世話になったスィクラマ氏および現地スタッフの方々、現地の石井美和氏（看護師）にも深謝しなければなりません。

ワークではそれ相応の厳しさに直面するということがあるかもしれません。しかし、ワークは、文字通りの「協働」の業をとおして想像をはるかに超えたかけがえのない学びの機会を私たちに与えてくれます。「ボランティア」とおして参加学生がそれぞれに所期の目的を果すことができたことを願わずにはおられません。このような学びの場、機会を提供して下さったバリ島のすべての方々、また、参加学生が貴重な学びを得られるようこのプログラムを陰に陽に支え、また援助して下さった大学ならびに教育後援会に対しこの紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 第28回ワークキャンプを終えて



団長 三宅 亨

インドネシア・バリ島での8月18日から18日間にわたる第28回国際ワークキャンプ（IWC28）は大過なく初期の目的を達成し、9月4日朝、全員無事に関西国際空港に帰着した。まず、この点を報告し、わたしたちを支えてくださった学内外および現地の多くの関係者の皆様に、この誌上を借りて、御礼を申し上げます。

今回のキャンプは、バリ州都デンパサールから直線距離で120キロほど西北にあるムラヤのウィディア・アシ財団第5児童養護施設（通称「第5アスラマ」）での屋外作業であった。わたしにとっては9回目のワークキャンプ（団長としては3回目）であったが、わたしが参加するようになった第19回（2005年）から昨年までは、7キロほど東北にあるプリンビンサリ村の第2アスラマを中心とする作業を行ってきた。今回は、今まで通り学生たちはプリンビンサリ村でホームステイをしながら、毎日ムラヤとの間をトラックで移動して作業を行った。

振り返ってみると、このワークキャンプの第1回目（1987年）の課題は、この第5アスラマでの建物建築の基礎工事であった。当時の記録をみると、何もない荒れた土地で学生たちは子どもたちのための新しい建物の基礎工事として、炎天下で乾ききった堅い土をツルハシとシャベルで深く掘り起こす過酷な作業に朝早くから夕方まで従事する毎日であった。休憩時間になると、疲れを癒すためにみんな横になって「少しの時間でも惜しんで眠った」という。暑さのあまり、病気で倒れる学生もいた。ここでの施設の整備作業はその後何年も続き、ようやく一定の成果を挙げた後にプリンビンサリ村の第2アスラマの整備に移っていったという歴史がある。

あれから30年近い歳月が流れ、今ムラヤのアスラマは数棟の建物が整備され、中学生を中心とする65人の子どもが暮らしている。現在の様子からは当時の姿をうかがうのは難しいほど変わっているが、今回ムラヤでの学生の作業姿を見ていると、初期の学生たちの苦勞した姿が偲ばれる。このワークキャンプを始められた故・藤間繁義先生の笑顔が浮かんでくる。

今回の主要な課題は、アスラマの前を流れる川の護岸工事（長さ50メートル）の補助作業であった。この川は乾季には干上がってしまうが、雨季（10月～3月）には大量の水が流れ、徐々に土手の土を削っていき、放置しておく、やがては施設の建物自体の基盤にも影響を与えかねない。そこで、乾季のうちに頑丈な堤防を作る必要がある。ジャワ島から来たという数人の職人が石とコンクリートで土台を築き、黙々と堤防となる壁を積み上げていく。学生たちの役割は、この工事に必要な石や砂、ブロック、セメントなどをリレー方式で運搬することである。簡単で単純な作業のように思われるが、40数度の暑さの中での労働は厳しい。セメントの袋は40キロの重さがある。しかも、石にはなぜか棘があり、普通の軍手では扱えない。体力のない女子学生にはかなり辛い作業であった。

幸いなことに、午後は学校から帰ってきた中学生が作業に加わってくれたので、予想外に作業は進んだ。聞いてみると、この子どもたちは、日本からわざわざやってきて、自分たちの生活環境改善のために働いてくれる学生たちに感謝し、自分も一緒に作業したい、との気持ちが強いという。護岸工事が完



成するのを楽しみにしている。朝7時から午後1時までの授業で疲れているに違いないのに、現地の習慣である昼寝もしないで嬉々として働いてくれる。「甘やかすことではなく、将来自立できる子どもを養成する」ことである、というアスラマの方針は、こんなところにも生きている。

わたしは、数年前までは学生と一緒に作業を行ってきたが、やはり年齢による体力の衰えには逆らえない。今のわたしの役目は、団長として事故のないように現場を監督することと現地のスタッフとの打ち合わせである。もうすっかり慣れてしまったが、様々な理由で現地での予定はしばしば変更になる。想定外のことが起こる。“Tidak apa-apa”（気にしない、気にしない）。スタッフと打ち合わせながら日程の変更を書き込むわたしの手元のノートは赤や青のボールペンでたちまち一杯になる。こんな時、一年おきにわたしと交替で団長を務めてくれる松平功チャブレンと現地の事情に詳しく8年目のワークキャンプを迎えて経験豊かな看護師の石井美和さんは力強い相談相手であり、今年もしばしば適切な助言を頂き、団長としては有難い存在であった。石井さんには、いつまでもインドネシア語の上達しないわたしの通訳を務めて頂いたり、現地の習慣や情報を教えて頂いたりして、わたし自身の異文化理解を深めるうえでも大いに参考になった。

現地に就いてからわたしの最終決断で、当初の予定になかった行事（国立ムラヤ看護学校での日本語プログラムや子どもたちの運動会など）を組み込んだときも、学生たちは嫌な顔をすどころか喜んで活躍してくれた。時には（あるいは、いつも？）厳しいわたしの要求や指示に応じてくれた15人の本学学生と3人のインドネシア学生には、改めて「お疲れさま」と声をかけたい。

グリーンビンサリでの最後の日の午後、学生たちはホストファミリーと一緒に残り少ない時間を楽しんでいたが、わたしはムラヤの護岸工事の現場を訪れた。予定していた工事は終わり、職人さんたちが最後の仕上げをしていたのを確認し、同行していた職員の松本雄一さんに写真を撮るように依頼し、早く学生たちにも伝えたいという気持ちに駆られて現場を後にした。

この夜の離村式では、子どもたちは揃いの赤いTシャツを着ていた。その背中には“Together we can change the lives of children in Bali”という文字が鮮やかに浮かび上がっていた。そう、この子どもたちのために、まだまだやらなければならないことがたくさんあると、わたしは来年以降のワークキャンプの構想を頭の中で練っていた。

もうすっかり顔なじみになった小学生たちは、ときどき冗談交じりにわたしのことを英語で「お爺ちゃん（Grandfather）」と呼ぶ。別れ際に、小学生の頃から顔見知りの女子中学生がわたしのそばにやって来て、「来年も来てくれる？」と、黒い大きな瞳を輝かせながら尋ねる。「もちろん、必ず来るよ」と答えると、「よかった！」と笑顔がはじける。体力の続く限り、この子どもたちの笑顔を見るためにわたしはバりに帰ってくる。学生たちの作ったカレー料理や離村式の夕食に出された子豚の丸焼き（babi guling）を美味しそうに食べる子どもたちの顔を忘れることは出来ない。

「アジアの人々の協働から学ぶ」このワークキャンプで参加学生は何を学んだのだろうか。それは、学生たちが書いた、この報告書の中から読み取って頂きたい。

現地での日程の終わりにウィディア・アシ財団本部で開催された式典・「アガベ」の席上、バリ・プロテスタント・キリスト教会（GKPB）の司祭は、『聖書』の中から「あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる」（「ヨハネによる福音書」第15章8節）という言葉を用い、傍らの果実の種を一粒手に取って、学生たちに語りかけた。「この種を播くことによって、多くの果実が結ばれる。あなたがたは既に子どもたちのために多くの果実を産み出しました」と称賛と励ましの言葉をかけられた。

このワークキャンプに参加した学生たちがこれから先どのような果実を結ばせてくれるのか。一老教師として楽しみにしている。同時に、この後29回、30回、…と多くの新しい学生たちが積極的にこのワークキャンプに参加してくれることを期待している。

## 僕たちは世界を変えることができない。でも…。



大学チャプレン 松平 功

今回で国際ワークキャンプ（インドネシア）（以下IWC）の引率は5回目になりました。スケジュール表をこれまでの年と照らし合わせて見ると同じようなプログラムばかりで、毎年同じことをしているように思われるかもしれませんが、同じような名称のプログラムでも内容が全く違います。それは、その年の学生によって様々な色付けや工夫が施されるからです。そのような理由から、今年のプログラムの内容も前進に前進を重ねるようにして、他の年のIWCとは一味も二味も違うものとなりました。この進歩の裏には、IWC28の学生たち全員が全てのプログラムに全身全霊で打ち込んで行ったという努力があるのです。引率側が学生たちに「ティダ・アパアパ」（インドネシア語：気楽に行こうという意味）でこなしていくように助言するほど、IWC28は本気度の高いチームでした。

また、このチームは非常に純粋な目を持ってインドネシア社会や人々を洞察することのできる能力と温かい心を持っていました。このことは、毎年訪問するバニュボという貧困村を訪れた時に際立っていました。悲惨な現状を見て学生たちが驚くか、泣くか、或いは見下げるかと観察していたのですが、そのような反応は皆無だったのです。その村の悲惨な現状を目の当たりにした彼らは、どのようにすれば貧困の問題を解決することができるのかを真剣に討論し始めたのです。学生たちのこのような反応は、引率者を感心させるとともに、その胸を熱くさせました。

さて、肝心のワークですが、今回の作業場所がいつも行っていたプリンピンサリ村の児童養護施設内ではなく、そこから約10キロ離れたムラヤという村にある中高生を対象にした児童養護施設でしたので、毎朝の移動とお昼の休憩などでかなりの不便を強いられることになりました。また、作業内容が児童養護施設の横を流れる川の護岸工事ということで、基礎に使う岩や砂、セメントやブロックなどの運搬が中心で、バリのうだるような暑さの中での重労働となりました。しかし、そのような困難な環境の中であっても学生たちは一言も愚痴を言うことなく、むしろその逆境を楽しむようにして乗り切ってくれました。学生たちの頑張りには頭の下がる思いがします。

IWC28のバリでの奮闘を見つめながら、以前に読んだ『僕たちは世界を変えることができない』という、葉田甲太さんの著作を思い起こしました。それは映画にもなったノンフィクション作品で、大学生たちが力を合わせてカンボジアに学校を造るというボランティアでの成功を綴ったお話しです。大学生が海外で学校を建てるということは、大変なことだったと思いますが、世界中の貧困を考えると非常にちっぽけな出来事ではしかありません。その意味から『僕たちは世界を変えることができない』という題名になっています。しかし、その裏では大学生という、世間一般でイメージされているであろう無力な存在であっても、何かを形に残すことができるというメッセージが込められているのです。（この本の副題は：“But we built the school!”）

当然のことですが、『僕たちは世界を変えることができない』と同じように、IWC28が必死で努力し



でも世界の貧困を全て助けることは不可能です。しかし、小さな力であったとしても、その功績が消え去ることはありません。そして、IWC28以降も様々な形を保ちながら、継続されていくことでしょう。IWC28の学生たちの努力の結晶が数十年後、彼らの単なる思い出になっていったとしても、彼らの奮闘努力した結果を通して後輩たちに受け継がれていき、壮大なボランティア事業として脈々と続いていくのです。そして、その働きが完結したその時に、IWC28を含めそれまでの働きの一部を担った全ての学生たちは、世界を変えたことになるでしょう。

たった18日間のプログラムでしたが、濃厚な時間を学生たちは体験してきました。長い人生の中での一瞬のような体験が、必ず学生たちのこれからの人生に大きな影響を与えていくと感じています。そして、IWC28の一人一人がインドネシアでの経験を土台として、これからも沢山のことを考え色々なことを学んで、各々の人生の経験を積み重ねながら、世界に大きく羽ばたくことのできる器に成長してもらえればと願っています。IWC28の皆さん、本当にお疲れ様でした！

## 第28回国際ワークキャンプ（インドネシア）の引率を終えて



学生部 キャリアセンター事務課 松本 雄一

### 1. はじめに

はじめに、今回第28回国際ワークキャンプ（インドネシア）の引率者として同行させて頂いたことに対して大変感謝いたしております。また、今回のプログラム実施に携わられた全ての関係者の方々へ感謝いたします。わたし自身海外渡航経験が少なく、今回の引率にあたり不安もありましたが、大きな事故などもなく無事にプログラムを終了することができたのは皆さんのご尽力のおかげだと思っております。18日間、参加学生15名と過ごしてわたしが感じたことをまとめさせていただきます。

### 2. 出発するまで

今回の引率の依頼を頂いた際、心境としては「不安」と「楽しみ」半々でした。海外経験も少なく、低レベルの英語しか扱えないという語学力のわたしで大丈夫なのかと感じていました。加えて、業務の都合上事前研修にもあまり参加することが出来ず、インドネシア語も簡単な挨拶を覚えることしか出来ませんでした。ただ、以前教務課で勤務していた際、本プログラムの単位認定業務に携わっていたため、このような留学プログラムがあるということは知っていました。そのため、「いつかは学生と一緒に留学やボランティアに行ってみたい。」という思いもありました。都合のつく日には出来る限り事前研修に顔を出し、少しずつ参加学生とコミュニケーションを取り、関係が構築されていくうちに、「この子たちとなら実りあるプログラムになるだろう。」と感じるようになり、不安よりも楽しみの方が徐々に大きくなっていきました。学生たちがインドネシアの子供たちのためにと、様々な準備をしている姿を見ていると、だんだん出発の日が待ち遠しくなっていました。

### 3. プリンピンサリ村でのワーク

本プログラムはバリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設等の建設、設備整備、行事運営などに取り組むという内容のものです。今年は施設脇を流れている川の護岸工事を行いました。とても暑く、重い砂や石材を列になって運ぶ作業は地味ではありましたがとても体力を消耗するものでした。施設の子どもたちや現地スタッフの方にも手伝ってもらい、日々少しずつ堤防が形になっていきました。完成した姿を見た時には、今までの疲れが消えるほど感慨深く、学生たちと共に達成感を感じることが出来ました。





#### 4. アスラマの子どもたち

この施設にいる子どもたちは、経済的な理由などで親と暮らすことができないという事情を抱えています。しかしそういう背景を忘れてしまうくらい、子どもたちはとても明るく元気で、人懐っこい子ばかりでした。学生たちともすぐに仲良くなり、一緒に遊んでいました。ただ、時折見せるどこか寂しく心細そうな表情を見ると、「何か少しでもこの子たちのためになることがしたい」と感じました。子どもたちは食事の前に全員で声高らかに歌を歌うのですが、それがわたしには「僕たち、わたしたちはここで頑張っているよ!」とも聞こえたような気がしました。

学生たちもワーク終わりで少なからず疲れもあったでしょうが、子どもたちの面倒をよく見てあげていました。基本的な英語や、インドネシア語の単語のみで子どもたちとどンドン打ち解けていく姿を見ると、関係を構築していく上で言語の違いはそこまで高い壁でないと改めて感じました。入村4日目には施設の子もたちとの交流会を実施し、日本で準備・練習したダンスや歌を披露し大いに盛り上がりました。また、11日目午後には子どもたちとの運動会も実施しました。綱引きや徒競走などを行い、暑い中ではありましたが子どもたちに喜んでもらうことができました。様々なプログラムを準備し、子どもたちと一緒に楽しんでいる学生たちの姿を見ていると、とても頼もしく立派に感じました。



#### 5. バニユボ村への訪問

5日目には、バニユボ村という集落を訪問しました。今回滞在した施設では、毎年数名この村の子どもたちを施設へ受け入れています。この村で生活している家庭は貧しい家庭が多く、経済的に子どもを育てていく余裕がないため、施設へ預けているという事情があります。出発前にこの村のことについて

は三宅団長から聞いていましたが、実際目の当たりにすると予想していた以上に過酷な状況でした。日本の大学生がぞろぞろと押し寄せ、怪訝な表情をされるのではないかと予想していましたが、住民の方はみんなわたしたちを温かく迎え入れてくださいました。ここで暮らしている子どもたちもとても明るく、次から次へとわたしたちの元へ集まり、学生たちと写真撮影したりしていました。ただ、石も多く転がっている路上を裸足で走り回っている姿を見て、「わたしたちにできることは何かないか」と感じました。学生たちも同じように考えていたようで、帰りのバス内でどのような方策があるか話し合う姿や、言葉には出さず考えを巡らしている様子が見受けられました。「普段自分たちがいかに恵まれた環境で生活しているのか」「世界には手をさしのべるべき人たちが多くいるということ」について考える良い機会になったと思います。



## 6. 参加メンバーへ

18日間という長期のプログラムでしたが、みんなよく頑張ったと思います。事前研修や合宿で準備してきた事をしっかりと実行している姿は、そばで見ている大変心を動かされました。わたし自身、もつと様々なサポートをしたかったのですが、なかなか思い通りに出来ず歯がゆく感じていました。強いて挙げるのであれば、みんなとの年齢がそれほど遠くなかったので近い感覚で話を聞いてあげられたかなと思っています。第28回国際ワークキャンプのプログラムは終了しましたが、今回の経験をどのようにみんなの人生に反映していくかによって真価が問われると思います。「ただ行ってきた」だけで終わってしまわないように、これから今回の経験をどう変換するか各自考えていってほしいと思います。

## 7. 今回の引率を終えて

今回の引率はわたしにとってもとても印象に残る経験になりました。この先、桃山学院大学の職員として働いていく中で忘れることはないと思います。参加させて頂けて本当に良かったと思っています。今回の経験を経て自分自身が考えたこと、学んだことをこれから学生のために還元していこうと思います。

最後になりましたが、温かく送り出して頂いたキャリアセンターの皆さん、プログラム中色々とお世話になった三宅団長、松平チャブレン、石井美和さん、スィクラマさん、フォルマンさん、また、日本でサポートして頂いたチャベル事務室の朝倉さん、小泉さん、小寺さん、その他お世話になった皆様に感謝いたします。これからもこのプログラムが続き、より良い物になるようお手伝いしていければと思います。



## 2014年度 第28回国際ワークキャンプ・インドネシア日程表

月日	曜日	時 間	日 程	備 考
8/18	月	8時30分 8時30分 9時00分 11時00分 16時45分 17時05分 18時00分 19時00分 22時00分	関空4F中央コンコースに集合（服装ユニホーム） 点呼 搭乗手続き（関西国際空港） GA883便にて出国 （所要時間6:45 時差-1時間） デンパサール空港到着 入国手続き ホテルチェックイン・部屋割り 夕食、インドネシア学生と合同オリエンテーション 就寝	荷物を持って集合  パスポート、旅行保険証等を忘れないように  入国手続き後バスで移動 部屋割り、グループ分け ユニフォーム授与式等  プリサロンホテル スミニャック
8/19	火	7時 7時15分 8時 10時 12時30分 13時30分 16時00分 18時00分 19時30分	朝の集い 朝食 日本・インドネシア学生 ホテルを出発（Tシャツ） 引率スタッフは日本領事館、バリ日本人会訪問等 プリンビンサリ到着、昼食 ミーティング ホームステイ先へ 夕食 帰宅、就寝	ホテルチェックアウト（石井氏、団長は学生引率） 表敬、年会費納入、買物、両替等（チャブレン、松本氏）  アスラマ内見学ツアー、スタッフ紹介 アスラマの子どもが各自案内 この日のミーティングはありません ホームステイ先家族と交流 お土産を渡したり…  プリンビンサリ
8/20	水	7時 7時15分 8時 9時 12時 12時30分 13時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤへ出発（ワークの服装で） ワーク開会式 プリンビンサリへ移動 昼食 ミーティング 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	到着したら入村式のお手伝いをしましょう ワーク開始  プリンビンサリ  プリンビンサリ  プリンビンサリ

8/21	木	7時 7時15分 8時  12時30分  15時 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 出発：ムラヤ公立高校訪問（服装ユニホーム） 昼食・休憩（ムラヤにて） ワーク プリンビンサリへ移動 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	日本語プロジェクト 2年・3年の計4クラス スタッフは、パニョボ村教会牧師訪問、下見（団長、松本氏）  プリンビンサリ       プリンビンサリ
8/22	金	7時 7時15分 8時 8時30分 12時 12時30分 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤへ移動 ワーク 昼食・休憩 子どもたちの出身村訪問（服装自由） プリンビンサリへ移動 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	要マスク 17時30分着予定          プリンビンサリ
8/23	土	7時 7時15分 8時 8時30分  12時 12時30分 13時 18時 19時 21時30分	朝の集い 朝食 ムラヤへ移動 ワーク  プリンビンサリへ移動 昼食・休憩 ミーティング 夕食 交流会 学生と子どもたち 帰宅、就寝	日本食班係りはショッピングへ（担当：松本氏）  プリンビンサリ 交流会準備 プリンビンサリ     プリンビンサリ
8/24	日	7時 7時15分 8時30分  12時30分 14時  18時 19時 20時	朝の集い 朝食 プリンビンサリ教会訪問（服装ユニフォーム） 昼食・昼休み 日本食の準備  日本食パーティー（服装ユニフォーム） ミーティング 帰宅、就寝	献金あり（500円ぐらい）    <u>ホームステイ先家族とアスラマの子どもたちを招いて</u>       プリンビンサリ

8/25	月	7時 7時15分 8時 8時30分  12時30分 14時30分  16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤへ移動 ワーク  昼食 ワーク  プリンビンサリへ移動 夕食 小・中学校訪問のためにミーティング 帰宅、就寝	日本食班係りはショッピングへ（担当：松本氏） ムラヤ 16時頃からスタッフはホームステイ先訪問  プリンビンサリ  プリンビンサリ
8/26	火	7時 7時15分  8時00分 12時 12時30分 15時 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食  小・中学校訪問・交流（服装Tシャツ） 小学校チームはムラヤへ移動 昼食・昼休み ワーク プリンビンサリへ移動 夕食 フリータイム 帰宅、就寝	小学校はプリンビンサリ、中学校はムラヤへ移動 2グループに分かれて   プリンビンサリ  プリンビンサリ
8/27	水	7時 7時15分 8時 8時30分 12時30分 14時30分 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤへ移動 ワーク 昼食 ワーク プリンビンサリへ移動 夕食 エヴァリュエーション・ミーティングⅠ 帰宅、就寝	ムラヤ   プリンビンサリ  プリンビンサリ
8/28	木	7時 7時15分 8時 8時30分 12時30分 14時30分 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 プリンビンサリにてワーク ワーク 昼食 エヴァリュエーション・ミーティングⅡ プリンビンサリへ移動 夕食 エヴァリュエーション・ミーティングⅢ 帰宅、就寝	プリンビンサリ   プリンビンサリ  プリンビンサリ



8/29	金	7時 7時15分 8時  12時30分 14時30分 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 看護学校訪問出発 日本語授業 昼食 エヴァリュエーション・ミーティングⅣ プリンピンサリへ移動 夕食 フリー 帰宅、就寝	ムラヤ  プリンピンサリ       プリンピンサリ
8/30	土	7時 7時15分 8時30分 12時30分 14時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 運動会準備 昼食・昼休み 運動会準備 夕食 エヴァリュエーション・ミーティングⅤ 帰宅、就寝	プリンピンサリ       プリンピンサリ
8/31	日	7時 7時15分 9時 12時30分 15時 18時  20時	朝の集い 朝食 フリータイム 昼食、昼休み フリータイム 離村式（民族衣装またはバティック） 会食はバビダリンです。 就寝	荷造り ホストファミリーと教会に行きましょう  ホームステイ先に滞在可 可能であればインドネシア語で謝辞 ミーティングはありません プリンピンサリ
9/1	月	7時 7時15分 9時30分 13時  15時30分 18時 19時  22時	朝の集い 朝食 プリンピンサリ出発（服装Tシャツ） 第4 アスラマ・ウンタルウンタル到着、 昼食 ホテルへ 夕食 エヴァリュエーション・ミーティング 就寝	ウンタルウンタルにて交流会     最後のミーティングあるいは発表練習になります プリサロンホテル スミニャック

9/2	火	7時 7時15分 8時 10時 10時30分 12時30分 14時 15時  19時まで自由行動 20時 22時	朝の集い 朝食 ディアナプラ大学訪問出発（服装ユニフォーム） バリ・プロテスタント教会本部へ移動 エヴァリュエーション（服装ユニフォーム） アガペー・フェスティバル 感謝の昼食会 ヌサドゥアの五大宗教施設へ移動 マタハリショッピングモールへ出発  19時まで自由行動 ホテルへ 就寝	バリプロテスタント教会本部  (アガペー：バリ風のキリスト教儀式)  ここでインドネシア学生とのお別れ会をお勧めします ショッピングモールの外に出てはいけません 夕食は各自で食べること ホテルでは自由行動です
9/3	水	7時 7時15分 8時 9時30分 12時 17時 21時 22時30分	朝の集い 朝食 文化探訪（服装自由）ロビー集合 パロンダンス見学 ウブドにて自由行動 マタハリモールにて自由行動 出発（服装自由） 空港へ出発：搭乗手続き	ホテルをチェックアウト ヒンドゥー文化 見学後、近隣のお店でお買い物 昼食各自自由 夕食各自自由
9/4	木	24時35分  8時50分 9時25分 10時00分	GA882便にて出国 (所要時間 7:00、時差 + 1 時間)  関西国際空港 入国手続き 感謝の祈り・解散	機内泊

(17泊18日)

注：ワークの内容は第五アスラマの護岸工事等を予定

## IWC28 Member introduction

- A班 お笑い界の風雲児。特技は寝ること  
子ども大好き。しっかり者のお姉さん  
見た目はクール、でも心は野獣  
たけるじゃねーよたけしだよ！！  
わたしの笑顔でイチコロよ。日本人キラー
- 福島 弘大/リーダー  
小塚 未央  
西村 寛生  
森 健  
Nonelry rossya ndriani (ノフェリン)
- B班 俺の顔NO.1じゃなくてOnly1  
心が一番最年少。みんな大好きお兄さん  
必殺技はセクシーボイス。IWCのアイドル
- 下地 皓太/リーダー  
深川 智哉  
黒岩 三沙樹
- C班 現地の人！？ちげーよポテトヘッドだよ  
我らの隊長。英語のことならお任せを  
お肌びちびち。ツインガール  
周りを狂わすキラースマイル  
男たち、私の瞳にメロメロよ
- 村上 大地/リーダー  
古城 克哉  
杉山 怜美  
中川 翔太  
Colsellia Alpha Victoria Tentua (リア)
- D班 眼鏡を外せばNice guy  
美形姉さん？中身は兄さん？  
俺の笑いはワールドクラス  
ちょっと不思議な、愛され天然キャラ  
インドネシアのワイルドセムちゃん
- 丸茂 太暉/リーダー  
新 歌奈子  
黒田 柁平  
貴田 薫  
Sem Fredrix Lesnussa (セム)
- 引率教員&スタッフ
- いつまでたっても元気です。  
男前！実はかなりの毒舌。我らのパパ  
痩せると人生が変わる。いつも頼れる兄貴肌  
みんなの心の拠り所インドネシアの母  
笑顔が素敵。包容力は抜群です。  
みんな大好き。一番お茶目で超ガンタン
- 三宅 亨 (三宅先生)  
松平 功 (チャブレン)  
松本 雄一 (松本さん)  
石井 美和 (美和さん)  
Nengah Swikrama (スイクラマさん)  
Forman Supradinata (フォルマンさん)



## テーマ

今回で28回目を迎えるIWC（International Work Camp）。

IWCは、「アジアの人々の協働から学ぶ」というテーマが主体である。

毎回IWCでは、目標、テーマとなる言葉をTシャツに掲げボランティア活動を行っている。

本年度のIWC28のテーマは、「Persahabatan」日本語の意味は、「絆」であり、サブタイトルは、「kesetiakawanan tidak berbatas negara」。日本語で、～友情に国境なし～という意味である。

皆がインドネシアの人々と関係を深め合えるようにしたいという思いからこのテーマに決まった。IWC28は、この合言葉を胸に日本・インドネシアの学生、引率教職員が一つとなれるようボランティア活動に励んだ。



IWC28のテーマを掲げたTシャツ。

## 調理実習

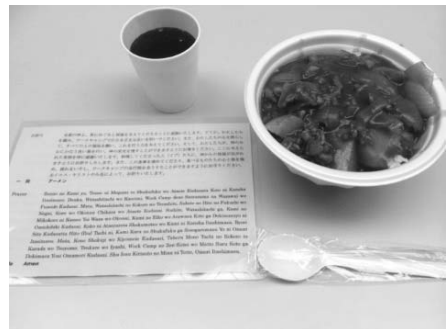
材料の買い出しは事前研修後に5人で近くのスーパーに買いに行った。

### 【材料】

カレーの粉  
ジャガイモ 10個  
玉ねぎ 10個  
人参 4本  
豚肉 1200g

### 【感想】

材料の切り方から曖昧なわたしたちでしたが、上手く作れることが出来た。野菜を炒める順序も、ジャガイモ→人参→玉ねぎと火の通りにくい物から炒めたので具が硬くなるという心配もなかった。ご飯を炊くのが1番心配だったが、しっかり時間を計り1人の生徒がずっと付きっきりで硬さなどを確認していたのでとてもふっくらと美味しく作ることが出来た。



## 募金活動

目標金額5万円

- 活動目的 アスラマの設備改善
- 活動期間 7/7～8/6
- 活動場所 桃山学院大学チャペル前通り
- 活動時間 昼休み（12：30～13：20）
- 活動人数 15人

わたしたちは7月の初めからテスト期間の間の二週間で募金活動を行った。3人～4人のグループを4グループ作りローテーションしながら活動していた。活動予定でないメンバーが来てくれて手伝うなど気合十分だった。

最終的に期限までに目標金額まで到達しなかったので活動を延長し、なんとか目標金額に到達した。毎回必ず誰かが募金してくれる。そのおかげで目標金額も達成することが出来た。

最初は募金活動が苦に感じていたが、金額に関係なく募金してくれた人たちがいたから最後まで活動することが出来た。たくさんのご協力ありがとうございました。

日付	金額
7/7	¥2,993
7/8	¥3,227
7/14	¥7,147
7/15	¥3,736
7/17	¥4,580
7/18	¥4,378
7/21	¥29,494
8/6	¥10,295

合計金額 ¥66,000



## 合宿

- 場所 桃山学院大学 合宿棟
- 日時 八月五日、六日

### 一日目

実際インドネシアで発表、披露することをシミュレーションした。

日本語班…小中高、看護学校で日本語の授業をするために各班に分かれ、本番のような模擬授業をした。模擬授業をしたことにより、どのような流れであるのか、時間配分や改善点を見つけることが出来た。

衛生班…インドネシアで歯磨き指導をするために、インドネシア語で書かれた歯磨き手順カードを作った。また歯磨きの重要性を伝えるために紙芝居を作った。

交流班…インドネシアで披露する歌とダンスの練習をした。この時にはすでに覚えていたが、何度も練習をした。より完成度を高めるために自分たちの歌やダンスしている姿をビデオカメラで録画をし、細かい修正等をした。

一通りのシミュレーションを何度もこなすことにより、イメージを抱くことが出来た。

夜は全員で食事に行き、楽しく食事することが出来た。全員の距離感を縮めることが出来、より仲が深まった。

### 二日目

岸和田にある児童養護施設に行った。行く前に職員の方のお話で児童養護施設がどのようなものであるかを教えていただくきっかけであった。実際行ってみるにより、各々が様々なことを感じれ、考えることが出来た。





## 入村式（8月20日）

プリンビンサリに来て三日目の慌ただし朝のことである。

本日は、いよいよワークが開始される。ワークをするためにはまず、入村式に出席しなければならない。去年は第2アスラマのプリンビンサリ村で行なわれたが、今年のワーク場所は、第5アスラマのムラヤで行った。

ムラヤには歩いて行くには少し距離があるので、トラックの荷台に乗って向かった。トラックの荷台は、自然の風に吹かれながら走行し、とても気持ち良かったことを覚えている。

ムラヤに到着すると入村式はすぐ行なわれるのかと思いきや、偉い方が来るまで、水とお菓子が入った箱を頂きその場で待機していた。

入村式が始まったのは結局予定より一時間以上のズレが生じたが、わたしたちは入村式を開始することができた。

はじめは、隊長のインドネシア語での挨拶で始まった。そのあとに続き偉い人たちの話を聞いて入村式は無事終わったのである。

入村式の終わりには代表である隊長と先生がワークの成功を願って石を置いた。ここからわたしたちのワーク活動が始まった。



## アスラマについて

アスラマとは児童養護施設のことをいい（詳しくは用語解説1頁参照）、バリ島にある養護施設のうち、ウィディヤ・アシ財団は7つの施設を運営している。施設で暮らす子どもたちは、学費や生活費等の援助を受けることができ、その費用は先進国のNGOなどからの寄付によって支えられている。アスラマで暮らす子どもたちが抱えている家庭背景は様々で、両親と死別している、あるいは両親が重い疾病に罹り扶養が困難となり入所してくるケース、親の育児放棄などで入所するケースなどが挙げられるが、大多数は貧困である。

### 第2アスラマ

プリンピンサリに位置する第2アスラマは1975年に設立され、IWCプログラムが始まった1987年から継続して、本校のワークキャンプの受け入れ先となってくれている。施設で暮らす子どもたちは総勢85名（男子47名・女子38名）おり、16名の職員が親に代わって監護、教育を行っている。子どもたちの8割は小学生である。

第2アスラマでは、自給自足を目指し様々な取り組みが行われている。施設には家畜小屋があり、食用にニワトリや豚が飼育されているのだが、豚の糞尿は畑の肥料として再利用されているほか、施設内の発酵槽を利用してメタンガスを生成し、炊事場の火力としても使用されている。また、水の浄化装置も完備していて、市販されている水よりも上質だという。その水は販売も行われていて、貴重な収入源となっている。さらに、敷地内には畑が点在し、たくさんの果物や野菜が栽培されている。私たちはキャンプ11日目に農業活動としてキャッサバ植えと茄子の収穫をお手伝いした。

わたしたちの活動拠点となった施設であり、日本語授業や交流会のミーティングなどは、すべてここで行った。子どもたちと過ごした時間は、訪問した3つのアスラマの中で最も多く、とても思い出が深い場所となった。

### 第4アスラマ

第4アスラマはウンタルウンタルにあり、かつて産院であったが、財団が買い取り、1981年に4番目の施設として運営が開始された。ここで暮らす子どもたちは全員女子で、小学生から大学生まで幅広い年齢の子どもたちが寝食を共にしている。子どもたちの寝室は各部屋約6畳で、2段ベッドが2つと、共同使用のダンスが1つ置かれた簡素な造りで、おおよそ1部屋4人で暮らしている。

ここでは、職業訓練の一環として縫製加工が盛んに行われている。裁縫やアクセサリを製作するための服飾室があり、ミシンや生地など備品が充実していた。製作した衣類やアクセサリは、施設で販売も行われており、ここでミサンガやプレスレットを購入したメンバーもいた。

ここを訪れたのはキャンプ15日目で、到着してすぐに交流会が行われ、子どもたちと親睦を深めた。子どもたちはKiroroの「未来へ」を日本語で合唱してくれて、歌の完成度の高さに一同、驚きと感動を覚えた。

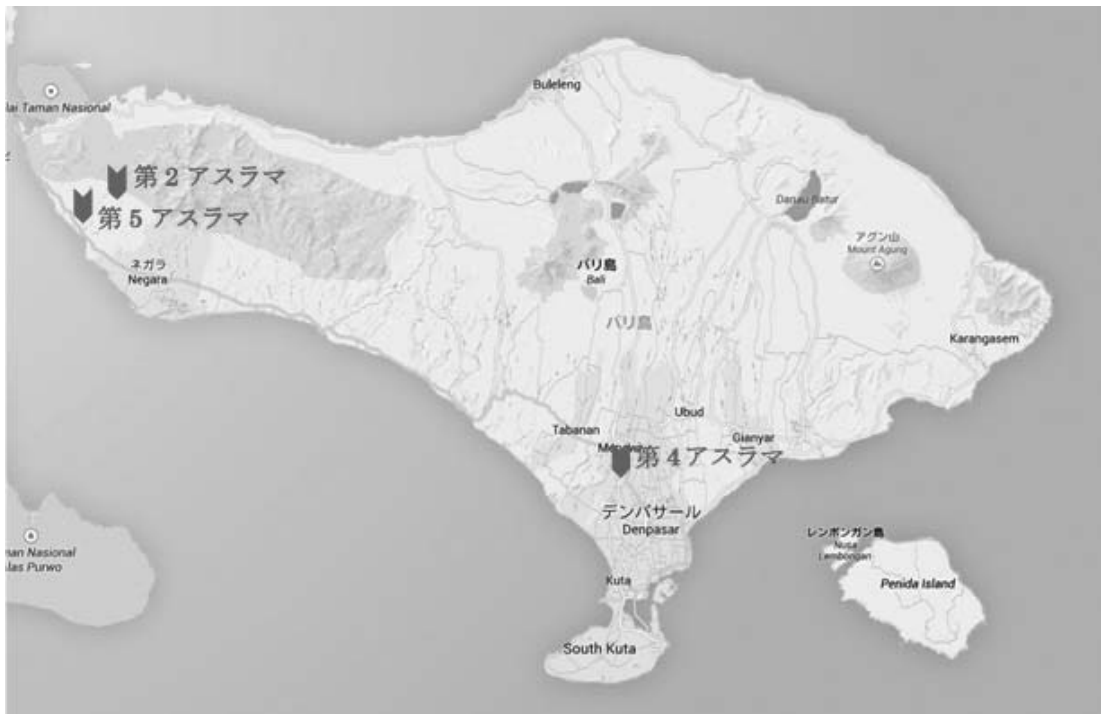
余談だが、キャンプ16日目に先生からスケジュールの変更を告げられ、最終日に再度第4アスラマを訪れることとなった。アスラマの子どもたちは、まさか再びわたしたちが来るとは思っていなかったようで、とても喜んでくれた。短い時間ではあったが最後の交流を楽しんだ。

### 第5アスラマ

プリンピンサリの隣町、ムラヤに第5アスラマはある。78名（男子42名・女子36名）の子どもたちが

生活をしていて、プリンピンサリが小学生中心であるのに対し、ここで暮らす子どもたちの多くは中高生である。第4 アスラマと同様に服飾室があり、アスラマの職員が熱心に裁縫を子どもたちに教えている姿を見ることができた。他にパソコン室や図書室もあり、施設は充実している。

わたしたち28期のワークは、第5アスラマの裏に流れる川の護岸工事だった。元々あったコンクリートの塀が崩れてしまったため、改修を行わなくてはいけなくなったのだそうだ。わたしたちが現地入りした8月は乾季なので川は干上がっていたが、雨季には川が濁流と化し、とても危険だと職員の方が仰っていた。子どもたちが安心して生活を送れるようにと、皆で一丸となって作業に取り組んだ。



## ブリンビンサリ村

ブリンビンサリ村はわたしたちが2週間滞在していた村である。村はデンパサールに比べて人口も建物も少なく、初めて行ったときは森の中という印象を受けたが、自然が綺麗で空気は美味しくとても素敵な村だ。ブリンビンサリ村には、わたしたちが毎日通っていた第2アスラマがある。各ホームステイ先はそのアスラマから近い家で3～4分のところもあれば、遠い家で約20分かかるところもある。一家に一匹以上犬を飼われており、ほとんどが番犬の役割を果たしている。朝は静かな犬だが、夜になれば豹変し、遠くから吠えながら走り寄ってきて、わたしたちが歩いているすぐ後ろをついてくるため、一部の男子を含め女子全員が怖がっていた。村にはワルン（お菓子や食べ物を売っているお店）があり、アスラマから近いワルンの方にみんながよく行っていた。しかし遠い方のワルンの方が品揃えは良い。村の中心部の十字路のところには教会があり、その向かいにはステージのような場所がある。カラテをしているところだ。その横には公園があり、遊んでいる子どもたちもいれば、バレーボールをしている現地の中高生もいた。村にはヤシの木がたくさんあり、その木のほとんどに足をかけて上るための切込みがある。ヤシの実硬くて危ないため、ヤシの実を取るときに下にいる人は気を付けなければならない。子どもたちが取ってくれたのだが、硬いヤシの実を必死に割ってくれている姿はとても遅く思えた。現地地でいただくヤシの実は格別に美味しかった。毎日アスラマに行く途中やホームステイ先に帰る途中に村の人に出会うが、みんな家族のように優しく声をかけてくれた。中には日本語で挨拶してくれる方もおり、とても嬉しかった。ブリンビンサリ村はとても素敵な場所だ。わたしたちを本当の家族のように迎い入れてくださったホストファミリーの方々、アスラマの皆さん、関わって下さったすべてのの方々、本当にお世話になりました。ありがとうございました。





## アスラマの子どもたち

アスラマ（インドネシア語で児童養護施設の意味）で暮らす子どもたちの背景には両親と死別または両親が離婚したために止むを得ずアスラマで生活を送っている子どももいれば、両親は健在であるが、経済的理由から一緒に暮らすことができない子どももいる。半数以上の子どもたちが後者の理由からアスラマで暮らしている。わたしたちが最も長く滞在したプリンビンサリ村にある第2アスラマでは今現在幼児3人、小学生56人、小さい子どもの面倒を見るための中高生30人合計89人の子どもたちとスタッフが共に生活を送る。

子どもたちの朝は早い。起床してすぐに朝マンディ（お風呂、といっても水）をして各自がそれぞれに用意をし始める。時間になれば朝のお祈りをし、朝食を食べて学校へ行く。小学校は第2アスラマのすぐ近くにあるが、中高は遠いため毎朝車で送ってもらったり、バイクで登校する子どももいる。お昼になると授業を終えた子どもからアスラマに帰ってくる。昼食後は宿題・勉強をしたり、外で遊んだり、昼寝をしたりと各自の自由時間だ。1日2回あるマンディの後に夕食を食べる。朝・昼・晩と子どもたちは当番制で自分たちが使ったお皿やコップを片づけ、洗濯や掃除等も自分たちで行う。つまりアスラマでは自分たちでできることは自分たちでし、将来自立をした際に困らないような教育をしている。夜の勉強時間には、自分で分からないことがあれば上級生に聞き教えてもらうようになっている。しかし上級生は分からないことがあると学校の先生に聞くしか方法はない。そして夜はみんな早めに寝る。というのが1日の流れである。

子どもたちは常に笑顔いっぱいだ。そしてたくさんの優しさがあることを知った。もちろん喧嘩もする。悔しさも覚える。涙も見た。多くの感情を共に覚え成長していく姿がそこにはあった。子どもたちは家族と共に暮らすことができない理由も自分なりに解釈し毎日を精一杯生きている。そんな子どもたちの笑顔には何か大きな力があるように思えた。わたしたち自身も精一杯生きなければならぬと教えてもらったように思う。



◇アスラマの子ども達の1日◇

- 4 : 30 起床
- 5 : 00 朝の祈り
- 5 : 30 朝食、掃除
- 6 : 30 登校
- 7 : 00 授業開始
- 12 : 00 下校
- 12 : 30 昼食
- 13 : 00 昼寝
- 15 : 00 起床、自由時間
- 17 : 00 マンデイ
- 18 : 00 夕食
- 19 : 00 勉強、宿題
- 21 : 00 就寝



## バニユポ村

バニユポ村は、バリ島の北西部に位置している。その地域は雨が少なく、深刻な水不足が川を干上らせていた。人々は普通の野菜が育たない環境の中で牛や鶏、豚を飼育し、生計を立てるために少量の水で育つブドウの栽培をしている。しかし、収入の7割を地主に取り上げられるため、人々の生活は貧しい。村の大部分がブドウ畑であったが、水不足により満足できる大きさや形のブドウが育ちにくい場所が多々あった。

暑い日差しが照りつける中、わたしたちは砂埃の舞うブドウ畑の下を歩いて、人々の住む家を訪問した。そこには土壌に散乱するゴミ、壁のない住居、屋根のないトイレ、ドラム缶に貯められた水、枝に吊るされた衣服や料理器具、少量の食料など、わたしたちの想像をはるかに超えた生活の過酷さ、貧しい光景が広がっていた。子どもたちには虫歯が多く、わたしたちが名前を聞いても答えようとしなかった。この生活の貧しさが原因で、親は子どもたちを学校へ行かせることが出来ない。そのため、子どもたちは勉強や衛生面などの教育を受けることが出来ず、将来きちんとした仕事に就くことができないのである。バニユポ村ではこの貧困の繰り返しが続けられている。実際バニユポ村出身の何人かの子どもたちが児童養護施設で生活している。

訪問後の反省会では、貧困状態を改善するための教育の必要性を強く実感し、わたしたちに出来ることは、「Think globally act locally（地球規模で考えて地域で活動する）」という言葉通り、まずはこのワークキャンプに全力で取り組むことだと学ぶことが出来た。



## 衛生指導

今回の衛生指導は歯磨きのみ集中した。歯磨きは、自分の歯を長い間使うために必要であると考えた。いまだにアスラマでは歯磨きの習慣がないので、定着させるための手始めとして紙芝居指導を小学校で行った。紙芝居に合わせて周りの日本学生が役を演じることで子どもたちの興味を引き付けることが出来た。紙芝居をしながら役を演じるという案は現地に行ってから決まったことだったが、良い案だったので取り入れた結果、成功へと繋がった。紙芝居後は、事前に日本で作っていた指導カードを使いながらの直接指導を行った。指導カードはイラスト付きでポイント説明はインドネシア語を採用した。本来の予定では、歯磨き指導と手洗い指導をアスラマ・小学校・中学校で行う予定だったが、準備不足と予定が合わないことで予定よりも活動内容は減った。

子どもたちの興味を引き付けることで少しでも子どもたちの頭の片隅に指導内容が残っていれば今回は成功だと考える。今回だけで定着させることは難しいとわかっている。数日間の指導でわたしたちができることは次へのバトンを繋ぐことだ。衛生指導は、これからも続けるべき活動であるので今回の活動を生かして次に繋げてほしいと考える。





## 日本語プロジェクト

あいうえお表、日本語で名札づくり、かるた、フルーツバスケット、告白ゲームを行いました。

ちょっとでも多くの日本語を覚えてもらいたかったので、あいうえお表は暗記に効果的な青色の文字で作成しました。ひらがなの下にローマ字を書いて読み方が分かるようにもしました。名札はシール状になっているものを使用し、後で行うフルーツバスケットとのチーム色を付けた状態で使用しました。そのためフルーツバスケットのチーム分けをスムーズに行うことができました。かるたは紙のままだとすぐ破れたりするのでラミネート加工を施しました。角の部分だけがをしないように、角を丸く切ることもしました。告白ゲームは日本語で相手に告白をして、それに対する返事も日本語で行ってもらいました。

小学校、中学校、高校、看護学校と日本語の理解度はそれぞれ違っていました。黒板を使う授業よりも、楽しく勉強するという心を掛けて授業を行いました。



## 小学校訪問

アスラマの子どもたちが多くいたので、特に緊張することもなくスムーズに行うことが出来ました。衛生指導の歯磨きの仕方を教えてから、あいうえお表、フルーツバスケット、かるた、ダンスを行いました。

最初に衛生指導の歯磨き指導を一人一人に行いました。あいうえお表は大きな声で続けて発声してくれました。フルーツバスケットではフルーツでなくカラーバスケットにし男の子、女の子といった条件を増やしたりしました。かるたはクラスを2グループに分けて行いました。1番多くかるたを取った子どもには全員から拍手を送りました。フルーツバスケットもかるたゲームも元気いっぱい怪我をしないか心配になるほどでした。ダンスは交流会でも踊ったドラえもん、当たり前体操、フォーチュンクッキーをしました。交流会の時とはメンバーが少し変わっていましたが、何も問題はありませんでした。パソコン、スクリーン、スピーカーが教室にあったので音響も映像も使え、ベストな状態で行うことが出来ました。



## 中学校訪問

8月26日、ムラヤ中学校を訪問した。1964年に教会によって建てられた学校だ。各学年1クラスずつで、その3つの教室は隣り合わせになっている。進学率は100パーセントである。男性教員が4人、女性教員が9人である。

日本語の授業は週に1回80分行われており、わたしたちが行ったとき2、3年は結構日本語を習っていたが、1年生はまだ「あいうえお表」を最後まで習っていないかった。しかしゆっくり丁寧に教えたところ、呑み込みが早く「あいうえお表」のみならず、名札作り、自己紹介もスムーズに終わることが出来た。どの学年も一番盛り上がったのはフルーツバスケットで、みんな汗をかきながら本気で楽しんでくれた。慣れてきたらBoys、Girlsと少し変えてお題を出すとまた盛り上がりしてくれた。Hari Iniの日本語バージョンも知っており、わたしたちがHari Iniを歌うことを提案すると、いきなり日本語で歌ってくれて驚いた。その他にも様々な日本語の歌を知っていて、とても嬉しかった。最後に写真撮影をするのは、どこの学校に行っても定番になっており、カメラを向けるとノリノリで写真に応じてくれた。

中学校には、いつもワークをしているときに手伝ってくれる第5アスラムの学生や、毎日会う第2アスラムの学生もいたため、みんな授業には協力的で、無事に成功させることが出来た。

ムラヤ中学校は部屋に限りがあるため、図書館や保健室の場所が一緒になっているところが問題である。今後それが改善され、生徒がより学びを深められる環境になっていくことを願っている。



## 高校訪問

8月21日（4日目）

<ムラヤ公立高校>

わたしたちが訪問したムラヤ高校は、1クラス30人くらいで4つの班にわかれてそれぞれ日本語の授業を行った。

<感想>

高校生はとても日本語が上手で、名札作り、あいうえお表、自己紹介はわたしたちの予想を超えた出来で進んでいった。今回はゲームの時間をのばし時間調整をした。ゲームはフルーツバスケット、かるた、告白ゲームを行いどれも盛り上がったが、特に盛り上がったのはフルーツバスケットだった。わたしたちはインドネシアに来て初めての日本語の授業なのでとても緊張していたが、生徒たちがとても熱心に参加し楽しんでくれたり、休憩時間や授業終了後に写真を撮ろうと言ってくれたりして、とても楽しく良い授業をすることが出来た。わたしたちが授業をしたことをきっかけに日本に興味を持ってくれると嬉しい。



## 看護学校訪問

8月29日（13日目）

わたしたちが訪れた看護学校は今年で創立3年目となる。看護学校と聞き、まず初めに感じたことは学費のことについてである。日本では看護学校と聞くと専門学校のことを思い浮かべ学費が高いというイメージがあるが、今回訪れた学校や、同じようにデンパサールにある学校でもインドネシアの看護学校はそれほど学費がかからないという話を聞いた。わたし自身この話を聞いて学校側は学生の思いをくみ取り、通う生徒に対して少しでも負担を減らそうとしているように感じた。また、現段階でこの学校には実習できる施設が整ってなく、違う場所に移動しての実習という形になっていることについて、学校長から将来的には実習できる環境を作ろうと考えているという話を聞き、現在、学生数は98人で看護学校ということもあり、女子生徒が多い。男子生徒の数は38人いており約3分の1程度である。教員数は50人とわたしが思っていた以上に勤務している人が多く、先生の数が多いことから一人一人に対してきちんと教育がいきわたっているように感じた。

看護学校での主なプログラムは、日本語の授業を通じて交流を深めるということが目的であった。この学校では、元々日本語の授業を行っていることもあり、わたしたちが思っていた以上にスムーズに授業を進めることが出来た。みんなが授業に対して真面目に取り組む姿勢を見せてくれたため、非常にうれしく感じた。

日本語の授業のゲーム時に看護学校の先生が加わってくれたこともあり、盛り上がり非常に先生方もフレンドリーで授業を進めていくうえで大変ありがたく感じた。

このように交流する機会は普段はないのでこのプログラムでしか行えないといってもよいほど貴重な機会であり、本当にこういった体験ができたことにうれしく感じる。





## 交流会

### <事前練習・合宿>

交流会の練習は五月中旬に始めた。練習し始めるのが遅かったのと、個人パートの練習がうまくいっていなかった時もあり不安でいっぱいだった。事前研修が終わった後、歌、ダンスの練習をしていたため全体練習は問題なくすることが出来た。日数が経つにつれ、個人のダンス練習もほぼ完成に近づき、良くなっていった。急遽、教会で歌う曲が変わり、みんなで歌詞を覚えた。しかし、全員が歌詞を覚えたのは、本番の直前だった。歌のテンポや声の大きさ。ダンスでは二人一組のペアであるものだったので、合わせることを意識して練習をした。

合宿では、初めて全体のプログラムを通した。全体のクオリティーを上げるためにビデオ撮影し、時間を計って練習をした。撮影してみると、動きがバラバラで、ダラダラしているのがはっきりわかった。これではダメだと話し合い、動きを大きく見せることをしようと決めた。またジェスチャーゲームは、子どもたちが何人なのか、椅子はあるのか分からない状態だったため、ゲームの流れだけを確認し、何をジェスチャーしてもらうかななどを説明した。

アスラマでの交流会の準備の時間を、ほぼ丸一日もらったので、インドネシア学生に個人パートと全体のダンス、そして日本語の歌詞をローマ字に直した紙を渡した。ダンスは午前中に覚えてくれたので、大変ありがたかった。歌は歌詞を見て歌うことにしてもらった。

午後から子どもたちに見えないところで、最後の全体練習をした。場所も良くなかったので、練習の雰囲気も悪く、あと数時間で本番だというのに不安を残したまま、本番を迎えた。



### <学生によるタイムスケジュール>

1. HARI-INI (2分) 歌
2. マルマルモリモリ (4分) ダンス
3. ドラえもん (4分) ダンス
4. フォーチュンクッキー (5分) ダンス
5. カントリーロード (5分) 歌
6. 讚美歌 (2分) 歌
7. あたり前体操 (3分) ダンス
8. ジェスチャーゲーム (15~20分)
9. 世界に一つだけの花 (4分) 歌
10. 閉会の挨拶
11. SAYONARA (3分) 歌

### <感想・反省>

先に子どもたちによる、バリ舞踊やダンスをしてもらった。子どもたちと一緒に踊り、またダンスを披露してもらった。子どもたちの出し物はクオリティーが高く、見ていて飽きなかった。次に学生の発表だった。事前研修の時に、スイクラマさんからプロジェクターがあると聞いていたので準備段階に問題はなく、スムーズに発表に移すことが出来た。

最初に歌を歌った後、子どもたちも巻き込んでマルマルモリモリのダンスを踊った。多くの学生が子どもたちと一緒に踊ってくれたので、みんなで楽しくすることができた。次のドラえもんでは、全身タイツを中心となる人が着て踊ってくれた。多くの子どもたちが笑ってくれた。フォーチュンクッキーではミスもなく、キレキレで踊っていたので、みんなが見とれていたように感じた。カントリーロードと讚美歌は、子どもたちが知らなかったもので、少し盛り上がらなかったように感じた。歌はできれば子どもたちも知っている、インドネシアの歌を選曲すればよかったと思う。しかし次のあたりまえ体操では、現地でも大人気で子どもたちも大笑いだった。一緒に歌ってくれる子やダンスをしてくれる子も出たほどであった。その盛り上がりの後だったこともあり、次のジェスチャーゲームは想像以上に盛り上がった。しかし、練習では、説明や要領しか言っておらず、実際やってみると説明が足らなくて、スイクラマさんに手伝ってもらった。また時間がかかりすぎて、世界に一つだけの花を歌うことが出来なかったことが反省すべき点である。

そしてSAYONARAを歌う前に、子どもたちのバリダンスを日本人学生も混ぜてもらい、踊った。最後のSAYONARAを歌う時にワヤンの提案で、学生でペアになり子どもたちが通れるようにトンネルを作り、歌いながら通ってもらった。ただ歌うだけだとシンプルすぎるから、この案を出していただき、終わり方も良かった。

全体を通して、子どもたちが喜んでくれたのでよかった。あたりまえ体操やドラえもん、フォーチュンクッキーは小学校訪問、ウンタルウンタル、運動会でも発表し、みんなが盛り上がってくれ、何度やっても笑ってくれた。大部分は成功で終えることができた。

## 日本食

アスラマのスタッフ、ホームステイ先の家族、子どもたちに日頃の感謝の気持ちとしてわたしたち生徒15人とインドネシア学生3人でカレーを作った。カレーで使う材料は前日に黒田と深川さんとフォルマンとイブのコマンさんの4人で行った。

### 《材料》

豚肉 20kg  
ジャガイモ 50個  
玉ねぎ 50個  
人参 30本

### 《感想》

反省としては最後の煮る過程の時にすることがなくなった生徒が外で子どもたちと遊んでいた。

良かった点としては一人一人の手際がすごく良く、自分の仕事が終われば他の班の手伝いをしたり、自分は何をしたら良いのかみんなが考えていた。また、ホームステイ先の人を上手く誘導することが出来たので食べるまでに時間がかからなかった。1番の良かった点は美味しく皆で作れたことである。具が大きくなって火が通っているのか心配であったが、無事に美味しく作れた。



## 教会

プリンビンサリ村はバリ島では珍しいキリスト教徒の村で、伝統的バリ様式で古い歴史を持つプロテスタント系の教会がある。このプニエル（Pniel）教会で毎週日曜日、村の人々が集まって礼拝をする。建物自体に扉や窓がないため風通りが良く、天井も非常に高い。敷地の中には芝生や池があり、とても広い空間のように思えた。この場所で村の人々は楽器等の練習もする。

わたしたちも礼拝に参加し日本の讃美歌をピアノ伴奏と共に歌った。それぞれにしっかりと歌詞を覚え直前まで練習をしたおかげか村の人々からの反応は良かった。ただ日本語だったために一緒に歌えなかったことは少し残念に思う。パパやイブが讃美歌を歌いたい、歌詞がほしいと言ってくれたことは驚くと同時に嬉しかった。わたしのイブは帰った後も讃美歌を口ずさんでくれ、ピアノ伴奏を褒めてくれた。約3時間の礼拝はとても長いように感じたがキリスト教の礼拝に参加しあ場で自分たちができることを最大限出来たことはわたしたちの良い経験になるだろう。

礼拝が終わり帰るときもわたしたち一人一人と握手してくれたこと、感謝を述べてくれたことに村の人々の優しさを感じた。村のシンボルとも言えるこの教会は村中の人々とコミュニケーションをとることができる場でもあると言える。



## ワーク内容

今年のワークは、第5アスラマ・ムラヤにある川の護岸が一部崩壊してしまっていたので現地の職人さんとともに護岸の修復工事を行った。わたしたち学生は、護岸の壁に使う大きな石とセメントに使う砂を運ぶお手伝いをした。石を運ぶのも砂を運ぶのもリレー方式で行った。もともとワーク班は4班に分かれていたが、運ぶ距離が長く効率良く作業を行うためにほとんどのワークが全員で行うことになった。砂運びは、小さなバケツを使い砂を半分くらい入れてバケツリレーをして砂を運んだ。石運びは、大きな石を現地の人にハンマーで砕いてもらいそれをリレー方式で運んだのだが、それでも壁に使う石なのでほとんどが大きな石で女子学生にとっては少しつらいワークとなった。日中は暑くワークは30分くらいが限界で休憩をこまめにとり、体調管理をしっかりと行った。護岸工事のワークは全部で5日間行い、必要な材料をすべて運び終えることができた。そして、無事に護岸は完成することが出来た。また第2アスラマ・プリンビンサリでキャッサバ芋を植える作業とナスの収穫も行った。収穫したナスはその日の子どもたちの夕食に出た。

無事にワークを完了することが出来た。今年で28回目を迎えるIWCだが毎年の小さな積み重ねによって環境が整ってきている。わたしたちもそれに参加し、お手伝いが出来たことを光栄に思う。これからも小さな積み重ねの継続と子どもたちにより良い環境が提供されることを願う。





## 運動会

1. 歌「Hari ini」
2. インドネシアのダンス
3. あたりまえ体操
4. お祈り
5. 徒競走
6. 2人3脚・3人4脚
7. 麻布跳び
8. ボール運び
9. しっぽ取り
10. 綱引き
11. サッカー

以上の競技を28期生全員で企画し、2時間半という短い時間で実行しました。

プリンピンサリ・ムラヤ・28期生約250人くらいで、ハプニングがありながらも、上手く進めることができ楽しく、かつ盛り上がった運動会となりました(^\_^)〜



## 離村式

8月31日

この日がアスラマで食べる最後の夕食であり、ホストファミリーと食べる最後の夕食となりました。学生は各ホームステイ先で用意されていた民族衣装を着ている学生もいましたが、中には残念ながら用意されておらずユニホームで参加している学生もいました。式は、ホストファミリーと一緒に座り最後の夜を過ごしました。

初めに、子どもたちの演奏が始まり、伝統的な踊りバリダンスを披露してくれました。次に、スイクラマさんなどからありがたいお話を聞きました。そして、わたしたちからホストファミリーに各々が感謝のスピーチをし、記念撮影をし、最後に手紙を渡しました。日本の学生の中には涙を流す学生もいたが、ホストファミリーは最後まで笑顔が絶えませんでした。その後、最後の晩餐を楽しみました。式の料理は豪華なものでした。メインは豚の丸焼きを切り分けたものでした。特に皮をカリカリに焼いていたものはご飯が進む一品でした。ほかには、焼きそばや野菜炒めデザートなどこれまで食べた中でも1、2を争う豪華さでした。

ご飯を食べ終えた後、それぞれが色々な最後の別れをしていました。子どもたちと最後の夜を遊ぶことで過ごす学生、お話をして過ごす学生、ホストファミリーとこれまでを懐かしんでいる学生と様々な夜を過ごしました。この日の夜は、学生、子どもたち、ホストファミリー、イブたちにとって記憶に残る一夜になったと思いました。



## 大学訪問

わたしたちはインドネシアの学生が通っているディアナプラ大学を訪問させてもらった。事前にディアナプラ大学について話を聞き当日に質問させてもらう形であった。

### ～ディアナプラ大学概要～

- 1987年に観光業の専門学校として設立された。
- 観光産業を強みにしているバリでは必要な大学である。
- 国際交流に力を入れていてアメリカやブラジルへの交換留学、さらに桃山学院とも交換留学が行われるようになった。
- 奨学金や学費免除など金銭面において学生に勉強しやすい環境を整えている。

### ～大学卒業の最低目標～

英語に力を入れているディアナプラ大学では海外から留学生が多数留学してくる、バリ島も観光産業栄えているので英語は働く上でかなり必要になってくる。この大学ではTOIECで400点以上の英語力をつけることが卒業までの最低目標である。



## エヴァリュエーション

### <概要>

- 日時 2014年9月3日
- 場所 ウィディア・アシ財団本部（デンパサール）
- 参加者 バリ・プロテスタント教会の代表者  
ウィディア・アシ財団職員・アスラマ関係者  
教職員・日本の学生・インドネシアの学生
- 形式 隊長のあいさつ  
日本の学生から代表者2名、インドネシアの学生から代表者1名が提案  
スイクラマ氏より回答

### <インドネシア学生からの提案>

- アスラマの犬について  
食事中に寄って来る、またゴミ箱をあさっているのが衛生に悪い。
- プリンビンサリのゴミについて  
落ちていたゴミが多いので月に1回ゴミ掃除をしてほしい。
- 男子の子ども部屋について  
部屋が散らかっていて汚い。けんかをしないように注意して見てほしい。

### <回答>

- プリンビンサリで飼っているのは1匹だけでほかの犬は近隣の飼い犬なので如何することも出来ない。
- ゴミに関してけがをするという問題がある。毎年7月から9月に受け入れを行っていて新しく入ってきた子どもたちはよくけがをする。小さな子どもたちにけがが多いため、子どもたちに衛生指導を徹底する。
- 男子の子ども部屋についても改善できるようにイブに指導する。

### <日本の学生からの提案①>

アスラマで提供されている現在のサービス水準の維持とサービス向上のためにはアスラマのスタッフの研修が必要と考え5つの例を提案した。

- 手洗い、うがいについて  
体調管理のためにも食事の際や遊んだ後に手洗い・うがいを習慣づけてほしい。
- 布巾と手をふくタオルについて  
重ね干しをしていて雑菌が繁殖するので定期的に交換してほしい。
- 掃除について  
ほうきで掃いた後、外に掃き出すだけでは裸足の子どもがけがをしてしまうので、掃除のときは塵取りを使い、ゴミ箱に捨てるようにする。また、コンセント部分にほこりがたまっているので定期的に掃除をする。月に1度程度大掃除の日つくってはどうか。
- 施設の点検について

楽器や食器棚など定期的な点検をすることを勧める。

• けがの治療について

健康的に生活が送れるように日ごろから治療の大切さを子どもたちに教えることを提案する。

<回答>

- 布巾は1回だけ使うようにする。7月から9月に新しく入ってきた子どもたちに基礎教育を行い、けがをしないように徹底する。施設管理を行う人はいない。手洗い・うがいはスタッフが指導していく。そしてスタッフのトレーニングの要請をする。

<日本の学生からの提案②>

アスラマの子どもたちの教育水準を上げることを必要と考え、3つのことを提案した。

- 職業支援
- 図書館の本の追加
- 自習スペースの確保

<回答>

- 高校を卒業してアスラマを出るまでに一定のライフスキルを身に付けてもらうためのプログラムがある。しかし、プリンピンサリの小中学生には教えない。ムラヤやウンタルウンタルでは指導している。
- 本に関してはアメリカと約束事をすでにしてある。各アスラマに500冊の本を寄付してくれる予定で、現在200冊届いている。残り300冊はこれから届く。
- 自習スペースの確保に関して、新しく建物を建てることはできないので、1部屋あたりの人数を減らして広く部屋を使えるように検討する。

## アガペー・フェスティバル

9月2日（16日目）

アガペーとは、キリスト教の神の教えの一つである「愛」についてである。わたしたちが思っている恋人や配偶者を「愛する」こととはまた違う意味を持ち、すべての人々を分け隔てなく「愛する」という無条件の愛のことをいう。

このアガペー・フェスティバルは、果物を盛り付けたグボガンという塔のようなものを、様々な色の花で彩られた十字架の形をしたテーブルの真ん中に置き、わたしたちはそのテーブルを囲むように座り行われた。

参加するまではどのようなことをするのか分からなかったが、儀式を進めていって、果物や紅茶を交換し合うということをして、日本では体験することの出来ない貴重なことをすることができた。





## 文化探訪

9月2日

五大宗教施設という所に行った。インドネシアには様々な宗教があり、対立をせず平和を願うことから建てられた。建物の規模は大きく迫力があり、綺麗であった。

### バロンダンス

バロンダンスとはバリの伝統芸能である。バロンとはバリ島に伝わる獅子の聖獣である。バリでは良い魂と邪の魂が存在していると考えられており、良い魂の象徴であるバロンと邪の魂の象徴のランダ（魔女）との争いを表している。伝統的な伴奏である、ガムランを聞きながらバリ舞踊を見ることができる。

### ウブド

バリ島中部にあるリゾート地である。インドネシアの民族衣装や民芸品が販売されており、購入する際、店員さんと値段交渉をする。日本には珍しい物品が多くあり、多くの観光客で賑わっている。ここで各々自由に時間を使いお土産等を購入した。



## 参加学生のレポート

### 気づきと学びから得たもの

学生隊長 国際教養学部 3回生 古城 克哉  
(かつつん)



#### <はじめに>

わたしたちにかかわってくださった先生方はじめ関係者の皆様、無事に国際ワークキャンプ（以下IWC）を成功させ、終えることが出来ました。心より感謝いたします。

わたしはこのプログラムを入学案内に入っていたパンフレットで知った。ボランティアに興味を持っていたわたしは参加しようと思い準備を始めた。まずは、インドネシア語の履修である。国際教養学部の第二言語の選択でインドネシア語を選択した。選んだ理由はこのプログラムもあったが将来のために少数言語を学んでおこうというのが本当のところだ。言語を勉強しているうちによりインドネシアに興味を持ち、参加の意思を強めた。実際は、このプログラムはインドネシア語を履修していなくても参加できるのだが二年間のインドネシア語学習は大いに役に立った。

#### <事前研修>

5月から始まった事前研修。月曜日の5限と木曜日の5限にインドネシア語の研修やインドネシア文化・IWCについて研修を行った。7月に入ってから日本語班の日本語の教材作りや教案作り、交流班のダンスと歌の練習指導など各班に分かれて班ごとに準備を進めていった。作業も少しずつ増えていき大変な部分もあったが、誰一人休むことなく準備することが出来たので順調に作業

を進めることが出来た。事前準備がしっかりと出来たのは現地であまり良かった要因の一つだろう。事前準備の大切さを感じた。また準備と同時進行で募金活動も昼休みに行った。集まったお金は現地のスタッフに寄付しアスラマのために使ってもらった。夏休みに入って合宿を行った。ダンスと歌の最終確認と、日本語の授業の練習をした。今年からの試みであるが日本の児童養護施設を訪問する機会を与えていただいた。わたしたちは合宿中に岸和田学園を訪問させてもらい、インドネシアに行ったときに比較することが出来た。

#### <インドネシアの学生>

インドネシアの学生とは1日目にホテルで合流した。ホテルのロビーで自己紹介をしたときはぎこちなかったが、一緒に食事をしたときにすぐに打ち解けることが出来た。言葉が多少分からなかったとしても伝えようとする・言おうとしていることは意外にわかるものである。インドネシアの学生には大変な苦勞を掛けたと思う。日本語の授業について理解してもらわなければならなかったし、交流会のダンスや歌を1日で覚えてもらわなければならなかったからである。しかし、インドネシアの学生は一生懸命に理解しようとしてくれたし、とても協力的だった。ダンスも歌も何回も練習してとても上手だった。日本語が上手でいつも元気なノフェリン、物静かだけどしっかり者のリア、お調子者のセム、この3人と一緒にこのプログラムが出来て本当に良かった。またIWCを無事に終えることが出来たのは3人のおかげだ。本当にありがとう。早く再会したい。

#### <ホストファミリー>

ホストファミリーのイブとパパはとても優しい人たちだった。イブもパパもインドネシア語しか分からず、コミュニケーションをとるのは苦勞した。わたしは、挨拶だけはきちんとしようと思って「行ってきます」と「ただいま」は必ず言うよ

うにした。イブもパパも本当の息子のようによ世話をしてくれた。本当にうれしかった。2人のおかげで楽しく2週間を過ごすことができた。

#### <出身村訪問>

バニユポ村を訪問した。プリンビンサリのアスラマにいる子どもの何人かはこの村の出身である。この村を訪問したのは「貧困」について学ぶためである。IWCのプログラムで大きな印象を与えた1つである。ワインのブドウを畑で栽培をして生計を立てているが、実際はその収穫したうちの7割は地主にとられるため自分たちの取り分は少ない。水道もなく、週に2度だけ上流の川から水が引かれ、それをドラム缶などにためて使用している。住んでいる家は、ブドウ畑の中に建てられているが、レンガを買ってきて自分たちで作っている。またバニユポ村の中にも格差があるということで聞く話すべてが驚くことばかりであった。

#### <ワーク>

今年のワークは、ムラヤにある川の護岸工事だった。作業しているときは、乾季で雨が降ることはなく川は干上がっているが、雨季になると川に大量の水が流れるため、護岸の改修工事は急務だということだった。本格的な作業は現地の職人さんに任せ、わたしたちは壁を作るために必要な石と砂を運んだ。砂と石が置いてある場所と作業する場所が遠かったので、メンバー全員でワークをすることにした。砂は小さなバケツに入れてリレー方式で運んだ。石はもともと大きかったので現地の人に砕いてもらいそれをわたしたちがリレー方式で運んだ。最初現地の人とうまく連携が取ることが出来ず、わたしたちの運ぶスピードが速かったのでワークがうまく進まなかった。その後は、このことに注意して不足している分を確認しながら作業を行った。それにより、より効率よく作業を進めることが出来た。暑い中での作業でこまめに休憩をとって体調管理を行ったが、それでも疲労はたまっていた。子どもたちもワークに参加してくれて作業が進んだ。作業を始めて8日

目には材料をすべて運び終わり、護岸も完成した。想像していたものより頑丈そうで立派な護岸が完成した。これで雨季でも心配ないと思う。

#### <アスラマ>

インドネシアに到着して2日目いよいよプリンビンサリ村に向かった。プリンビンサリ村の第二アスラマに到着すると子どもたちがガムラン楽器を演奏してわたしたちをあたたく歓迎してくれ、子どもたちがバリダンスも披露してくれた。わたしは気づけば嬉しくて一人涙を流していた。先にも述べたように日本と違って親からのいじめによって引き取られているのではなく、子どもたちの家庭の経済的理由、つまり貧困によって親元を離れなければならない子どもが多くいる。そして子どもたちに教育を受けてもらって貧困から脱してもらおうのが施設側の思いである。時間があればアスラマで子どもたちと遊んでいた。男の子も女の子も外で遊ぶのが大好きでサッカーをよくしていた。みんなとても元気だった。子どもたちはすぐにわたしたちの名前を覚えてくれて会ったら名前を呼んでくれる。とても嬉しかった。アスラマの子どもたちはいつも笑顔でこちらがいつも元気をもらっていた。疲れていることを忘れることが出来た。別れの時はとてもつらかった。お互い涙を流して悲しんだ。2週間という短い期間でも友情は生まれたということだ。まさにわたしたちのテーマ「Persahabatan kesetiakawanan tidak berbatas Negara (絆 友情に国境なし)」である。子どもたちにも感謝するし、必ずこの場所に戻ってきて子どもたちと再会したい。

#### <隊長として>

現地に行ってから悩むことが多かった。隊長としてチームをまとめることばかり考え、メンバーのことをしっかり考えられていなかったのかもしれない。反省するべき点は多くある。そして、メンバーには本当に迷惑をかけ、副隊長の負担を増やしてしまい申し訳ない。わたしにとって学ぶことが多かった隊長経験であった。隊長としてチームをまとめる難しさを身に染みて感じた。いかに

メンバーをやる気にさせ引っ張っていくか、これはわたしの今後の課題であるが、みんなのおかげで素晴らしいIWCにすることが出来た。ありがとう。

#### <最後に>

わたしは現地で「気づき・学び・感謝」を意識して生活していた。これはインドネシアの日本領事館の人からの言葉である。便利な中で生活しているとなかなか気づかないことがある。当たり前と感じてしまっていたことが当たり前ではないということに気づかせてくれた。それを感じることの出来た18日間だったように思える。家族に感謝する。教育が貧困から脱する手段だというのが、その通りだと思う。アスラマの子どもたちは一生懸命学んでいる最中である。時間はかかるがこれが一番重要だと思う。わたしは将来教育の仕事をしたいと思っているが、こうやって役に立てると思うとやりがいを感じるし嬉しく思う。頑張ろうと思える。わたしはこの18日で素晴らしい経験をすることが出来た。「協働」から得るものは大きかった。これからの将来にも役立つ経験だ。みんなとIWCに参加出来て本当に良かった。

最後に、支えてくださった先生方・キリスト教センターの事務の方々・実行委員の方々・快く募金してくださった皆さん本当にありがとうございました。

## Terima kasih

Katsuya Furushiro

Pertama saya ingin berterimakasih kepada Bapak Swikrama, staf di Blimbingsari dan Melaya, dan semua orang yang berhubungan dengan kami. Terima kasih atas kesempatan yang diberikan kepada kami. Saya senang bertemu dengan Anda sekalian. Saya pikir bahwa saya bisa mengalami banyak hal di Indonesia. Sebagai contoh, saya bisa mengerti

tentang kemiskinan, kemudian saya bisa mengetahui pendidikan penting sekali untuk anak-anak supaya melepaskan diri dari kemiskinan. Pengajaran Jepang di SMA dan sekolah perawat kesehatan berhasil. Kami bisa bikin nasi kare yang enak sekali. Semua orang di Belimbingsari sangat gembira. Kami juga senang sekali. Pekerjaan kami di Melaya sangat keras dan kami capek tapi kami senang karena dinding sebelah kiri yang sungai di Melaya rampung. Anak-anak di Belimbingsari panggil nama saya waktu mereka bertemu dengan kami. Saya bisa berbicara bahasa Indonesia dan mengerti itu sedikit, Tapi sayang karena saya tidak bisa mengerti semua hal yang mereka bicarakan. Saya sedih sekali waktu kami berpamitan dengan anak-anak. Saya pikir bahwa saya pasti akan kembali ke Belimbingsari dan saya mau bertemu lagi.

Akhirnya, terima kasih Ibu dan Bapak selama kira-kira dua minggu. Terima kasih atas bantuan Anda. Anda sekalian sangat baik hati. Saya pasti akan bertemu Anda lagi.

## 一步を踏み出す勇気を

学生副隊長 法学部 2回生 深川 智哉  
(ともやん)



「インドネシアで力を発揮してみないか」わたしがインドネシアワークキャンプ（以下、IWC）というプログラムがあることを知ったのは、チャプレンのこの言葉だった。入学当初から海外研修やボランティア活動には興味があり、昨年には学

内プログラムである中国フィールドワークや東北のボランティアに参加した経験があったので、今年も何かしらのプログラムに参加したいと考えていた。インドネシアは東南アジア屈指の人口を誇り、様々な宗教文化が共存する異国情緒溢れる国である。世界の情勢に目を向けてみると、中国が何をするにも幅を利かせ、チャイナリスクが叫ばれる中、経済発展著しいインドネシアは、タイやマレーシアと並びチャイナプラスワンの機運が高まっている。そのような国に実際に赴きこの目で現状を見ることが出来るうえに、国際ボランティアが出来ることに魅力を感じ、参加を決意したのである。

今回のワークキャンプでの体験を語るためには、IWCがどういったプログラムなのかをご説明しなくてはならない。そこでまず、IWCのプログラムについて簡略に記したいと思う。今年で第28回目となったIWCは“アジアの人々の協働から学ぶ”プログラムである。その副題のとおり、インドネシアの方々と日本の学生が国の垣根を越えて、同じ目的に向かって協力し合い、その経験から気づきを得ることが、プログラムの第一義的な目的である。具体的な活動としては、バリ・プロテスタント・キリスト教会（GKPB）の傘下にあるウィディア・アシ財団が運営する養護施設（アスラマ）の建設や改修の支援を行ったり、施設の子どもたちや現地学生、施設関係者の方々との交流などを行う。また、プログラムの後半には養護施設の更なる向上のために、ウィディア・アシ本部でエヴァリュエーションも実施される。施設で過ごして気づいたこと、改善すべきことを、運営サイドに提言するのである。さらに、IWCの特色のひとつに、学生の権限の大きさが挙げられる。大枠は既に教職員の方々によって決定されているが、派遣先である児童養護施設の子どもたちとの交流会や地元の小・中・高・看護学校で行う日本語授業の内容などの決定権は学生にある。学生が主体となり、プログラムに臨むことができるという点で、IWCは非常にやりがいのある国際ワークキャンプなのである。

続いて、出発前までの出来事と心境を時系列に

述べたいと思う。選考をクリアした28期生はわたしを含めて総勢15名、18日間の日程で行われる現地でのワークキャンプを成功させるため、約4か月にわたり事前研修やグループワークに取り組んだのだが、これがなかなか骨を折った。特にグループワークは、現地で行うプログラムの内容を決める極めて重要な作業であり、これに多くの時間を費やした。メンバーを日本語班、日本食班、交流班、記録班、しおり・物品班、衛生班の6つの班に分け、各々必要物品の準備やプログラム策定作業に取り掛かったのだが、班によって進行状況にバラつきが生じ、グループ割振り時に予め決めたスケジュールを徹底させるために臨時ミーティングを行う一幕もあった。その際、厳しい言葉も飛び交ったが、そのミーティングが功を奏し、すべての班が遅滞なく準備を終えることができたうえ、各メンバーがIWCに懸ける思いの強さを再認識することもでき、いま振り返ると、大変有意義なミーティングであったと感じている。その後、予行演習を兼ねた1泊2日の合宿を行い、現地での動きを最終確認して、事前研修およびグループワークを終えることとなった。準備したものがうまくいくのか多少の不安はあったものの、待ちに待っていたワークキャンプがいよいよ始まるのかという思いで心が躍っていたことを今でも鮮明に覚えている。

日本を発ち、空港に着くとそこはまさに異国であった。バリ、とくにデンパサール周辺はインドネシア有数の観光地であり、活気に満ち溢れていた。しかし一方で、時の流れは悠々としていて、とても心地よく感じられた。その日はホテルに直行し、現地のインドネシア学生と対面を果たし、会話を弾ませ、初日を過ごした。ちなみに観光気分で居られたのはこの日と最終日だけである。2日目に、我々のキャンプ拠点地となるプリンピンスリに移動してから、エヴァリュエーションを終えるまでは、目まぐるしく押し寄せるタイトな日程に圧倒された。とはいうものの、日々が新しい出会いや気づきの連続で、そのような経験が出来る喜びを噛みしめながら過ごせたことも、また事実である。

プリンピンサリに滞在した13日間、我々は近隣住民のお宅にホームステイさせていただいたのだが、地域の方々は本当に暖かく、安心してプログラムに臨むことができた。わたしがお世話になったホームステイ先のモルティ・リリイ夫妻もとても親切で、ワークで帰りが遅くなっても、コーヒーを淹れて待っていてくださり、帰宅後は夫妻がわたしのためにインドネシア語講座を開いてくれた。日本の文化の話で盛り上がり、夫妻のご家族を紹介して下さったりと、とても充実したホームステイ先での生活となった。

ここからは、現地での具体的な活動内容について述べていく。我々の主となる活動は前述したとおり、アスラマの建設、改修の支援である。今期はプリンピンサリにほど近い、ムラヤに位置する第5アスラマ裏の護岸工事のサポートを任された。わたしたちは、セメント生成に使用する砂と、塀の形成に使用する岩を、メンバーが等間隔で一列に並び、リレー形式で運んだ。日差しが容赦なく照り付けるなか、現地の職人の方々が円滑に作業を進められるように、全員が一丸となって作業に取り組み、このワークが我々メンバー間の団結力を強固なものにしてくれた。また、とても印象的だったのが、わたしたちが作業をしている間に、学校を終え帰宅してきた子どもたちが、我々に交じって作業の手伝いをしてくれたことだ。普段、学校を終えた子どもたちは、夕食までは自由時間である。外で遊んだり、読書をしたり、自由に過ごせるにも関わらず、重労働である土木作業を手伝ってくれるのである。作業中は子どもたちも我々も終始笑顔で、その間は辛さを忘れながら作業をすることができた。残念ながら竣工目前で帰国することとなり、完成した姿を見ることはできなかったが、微力ながら施設の向上に寄与できたことは胸を張ってよいのではないだろうか。

アスラマで暮らす子どもたちが抱えている家庭背景は様々である。両親と死別している、若しくは両親が重い疾病にかかり扶養な困難となり入所してくるケース、親の育児放棄などで入所するケースなどが挙げられるが、大多数は貧困である。事前学習でそういった子どもたちの環境について

は学んでいたのですが、どのように接すればよいのか頭を悩ませ、一向に答えが出ないまま対面を果たしたのだが、子どもたちと会い、その悩みはたちまち立ち消えた。誰一人として、笑顔のない子がいないのである。我々がアスラマに行くと、大声でわたしの名前を呼び、無垢な笑顔で飛びついてきてくれる。自らの境遇を憂うことなく、日々を懸命に生きる姿に胸を打たれた。と同時に、“複雑な問題を抱えている子どもたち”とレッテルを張り、接し方が難しそうだと決めつけていた自分の浅さに気づかされた。子どもたちに寄り添うはずが、逆に子どもたちから多くの事を学ぶこととなった。子どもたちとの交流の時間が限られていたということもあり、どれだけ寄り添うことができたかは推測の域を出ないが、我々が訪問したことで、子どもたちに何らかの良いきっかけを与えることができていたとしたら、それほど嬉しいことはない。子どもたちの幸せを切に願うばかりである。

次に4つの学校で行った日本語プロジェクトについて述べていこう。日本語プロジェクトとはいえ、日本語の授業をみっちり行うようなプログラムではなく、かるたやフルーツバスケットなどといった日本のゲームを通じて日本に興味を持っていただく、いわば文化交流の色合いが濃いものである。このプロジェクトは、出発前から特に時間をかけて準備してきた内容である。五十音表やかるたなど必要な物品が多く、班の壁を越え全員で取り組んだプロジェクトであるだけに、失敗は許されないと意気込んで本番に臨んだ。現地ではまず、インドネシアの学生とミーティングを重ね、内容の共有と翻訳の作業に取りかかった。幸い、インドネシアにも類似したゲームがあったようで、円滑に事が運んだように思う。迎えた本番では、4つのグループそれぞれに通訳を兼ねたインドネシア学生が1人加わるようメンバー構成をして授業を行ったのだが、どの班も大きなミスはなく成功裏に終えることができた。日本語班班長を筆頭に、皆が一致団結した賜物である。

日本語プロジェクトと同様に、多くの時間を割いて練習に練習を重ねたのが交流会プロジェクト



である。事前のグループワークでは班長の素晴らしいリーダーシップのお蔭で、プログラムは早期に完成したが、歌やダンスの会得には多くの時間を費やした。出発直前まで、完成度に不安を残したままの出発となったため、どうなることかとやきもきしたが、当日は、子どもたちが我々のダンスを見様見真似で踊ってくれたり、一緒に歌を歌ってくれたり、笑顔の絶えない最高の交流会となった。

我々に課せられたもう一つの重要な仕事がエヴァリュエーションである。滞在中に得た気づきを、提言という形でアウトプットすることができるエヴァリュエーションは、いわば現地での活動の集大成ともいえる。我々は、日々の活動の中で、アンテナを張り巡らせながら周囲に目を配り、アスラマを更に素晴らしい施設にするためにはどうすればよいのかをソフト・ハード両面から考えミーティングを重ねた結果、衛生面の強化と、子どもたちの教育環境の改善について提言をすることで意見がまとまった。提言の結果、アスラマ職員への衛生指導は今まで以上に徹底すると約束してくださり、子どもたちの教育環境の向上の一環として提言した職業訓練のインターンシップも実施していく方向で前向きに検討していただけるとの回答があり、全てではないが我々の提案が通る結果となった。一学生が他国の施設の運営に関わることができたことは、貴重な経験であり、大きな財産となった。

過密でありながらも充実した現地での活動は、我々にたくさんのことを教えてくれた。準備なくして成功はないということ、一人では何もできないこと…。そして、何より衝突することの大切さを。現地入りして1週間で、メンバー同士に生じていた不協和音がピークに達しようとしていたとき、お互いの思いをぶつけ合おうと緊急ミーティングを開く機会があった。皆がストレートに思いをぶつけることができたおかげで、15人の絆は強く結ばれることとなったのだが、そこから得られた学びはとても大きなものがある。チームが目標に向かって行動する中で、予定が狂ったり、メンバー同士が衝突し合ったりすることは避けられな

い。考え方や感じ方が異なる人が集まってチームが形成されているのだから当然である。だがそれを恐れて、思いを胸に留めてしまっただけでは前に進むことは出来ないし、いいものも生まれない。相手の声に傾聴しながら真摯に対話をすれば必ず道は開けると信じて思いをぶつけ合うからこそ、事態を開示することができるのである。IWCはまさに、人と協働することの大切さを教えてくれた。

末筆ながら、我々15名を引率してくださった三宅団長、松平チャブレン、職員の松本氏、ウィディア・アシ財団ディレクターのシクラマ氏、財団職員のフォルマン氏、石井氏に心から感謝の意を表します。また、事前研修から我々を支えてくれたキリスト教センターの朝倉氏、黒田先生、その他教職員の方々そして、共にメンバーとして汗を流してくれた現地学生のセム、ノフェリン、リア、ホストファミリーのモルティ・リリィ夫妻、第2・4・5アスラマの職員の方々、子どもたち、関わってくださったすべての現地の方々に重ねて御礼申し上げます。

最後に、メンバーのみんな。

お前たちと出逢えたことを神に感謝します。

お前たちと過ごした約4か月間はわたしの宝物です。

お前たちと過ごせたことを誇りに思います。

## Saya suka Blimbingsari

Tomoya Fukagawa

Saya telah belajar banyak hal di kamp ini. Dan saya banyak mendapatkan pengalaman di IWC28. Per-tama, saya bisa tahu bagaimana kehidupan anak-anak di Asrama. Anak-anak berada dalam kontak dengan saya dengan senyum. Anak-anak berada dalam kontak dengan saya dengan senyum. Aku anak terkejut mencintai sepak bola begitu banyak.

Saya merasa sangat bahagia ketika saya melihat anak-anak di asrama. Mereka telah memberi banyak kasih sayang.

Kita kerja dengan anak-anak. Bagus sekali! Saya capai selama kerja. Tapi, saya senang bekerja. Saya mau kerja bersama semua anggota dan anak-anak.

Blimbingsari merupakan desa yang sangat indah. Saya merasa sangat bahagia karena orang-orang di Blimbingsari sangat ramah. Ibu dan Bapak yang baik sekali telah menerima saya yang sedikit bisa berbahasa Indonesia. Pisang goreng yang Ibu masak setiap pagi enak sekali.

Mahasiswa Indonesia baik sekali. Saya hanya sedikit bisa berbahasa Indonesia, tetapi saya pikir mereka menarik.

Apa kabar, Widi, Dewi, Novi, Ayu, Maya, dan Saba? Saya baik-baik!!! Saya menyampaikan rasa terima kasih sebesar-besarnya atas segala kebaikan dan bantuan anda sekalian terhadap saya selama berada di Indonesia. Saya merasa sangat berbahagia karena saya bertemu dengan anda sekalian. Saya takkan lupa anda.

Saya mengerti barang yang berharga adalah pertemuan dengan orang-orang. Saya selalu mengingat IWC 28.

Terima kasih, anak-anak dan staf-staf di Blimbingsari. Sampai jumpa lagi!!!

## 気づき、学びそして感謝。

学生副隊長 経済学部 2回生 小塚 未央  
(みお)



8/18～9/4のわずか18日間の期間でしたが毎日学びがありとても濃い時間を過ごすことができました。インドネシアという地で日本では決して出来ない体験が出来たことを誇りに思い、それを経験にして将来に繋げていきたいと思います。

### <きっかけ>

1回生の時に国際ワークキャンプ（以下IWC）の存在を知りました。以前からボランティアに興味があり日本でも少し活動をしていましたが、国外でのボランティアということで個人ではなかなか経験できることではないと思い参加したいと強く感じたのがきっかけです。時間割の都合上1回生では応募できなかったですが2回生になり時間割もIWC用に組んで参加できることになりました。

### <ワーク>

ムラヤでのワークは日本学生とインドネシア学生のチームメンバー同士がお互いに様子を見ながら進めることができ、大怪我をすることなく労働を終えました。日本での生活の違いから貧血や軽い熱中症、腹痛などはあったけれど誰も病気になることもなく無事に終えることができたことに感謝いたします。現地の子どもたちと一緒に活動することもあって、言葉の壁よりもその場を楽しみながら働くことができました。ワーク中は互いの言語を教え合ったり将来の話をしたりとコミュニケーションをとることができワークと言いつつも和気藹々と作業ができました。ただ、わたしたち

は日本からアスラマの子どもたちが少しでも安全に快適に過ごせるお手伝い（ボランティア）をするために来たのに、「ワークはつらい」「時間を調節してほしい」など言ってしまう、ここに来たのはただの“自己満足”のためかと考えさせられました。そんなこともあったけれど、これも1つの気づきだと感じみんなで話しあって改めて頑張ろうと気持ちを固めることができました。資材の都合から壁の完成までお手伝いすることは出来きませんでした。完成したとの報告がきけてほっとしました。

### <子どもたち>

アスラマには経済的理由から親元で暮らすことが困難な子どもたちが多く暮らしています。片親だけでは子どもを育てることが難しいためアスラマで生活をする子どももいますがほとんどが経済的理由からです。それでもプリンビンサリ村のアスラマの子どもたちはみんな元気で、お皿や服も自分で洗い、掃除もし、毎日早起きして学校に行き、勉強できることに感謝をする…そんな日々をしっかりと噛み締めながら生きる子どもたちをみてわたしの胸の内が暖かくなると同時に自分がどれだけ恵まれていて無意味に生きているのかを感じさせられました。わたしが日本での生活に慣れてしまっているからこそ親元で暮らすことができないのはつらい、温かいお湯でシャワーを使えないのは不自由だと思うけれど、アスラマの子どもたちはそれが普通で勝手にわたしたちがあの子たちをかわいそうな目で見ていたのかなと思いました。実際に現地に行き、生きた空間で生活できたからこそ学べたものだと思います。アスラマで暮らす子どもたち数人の出身地であるバニュポ村にも訪問しましたが、子どもは日本でもアスラマでもバニュポ村でも屈託のない笑顔があるのだと感じました。その笑顔を作り出している源はそれぞれであると思うけれど、その子どもたちの将来がより明るくなるようにわたしにできることがあるはずだと、どんな小さなことでも行動したいと強く思いました。初めて第二アスラマに来た時のガムラン楽器やバリダンスのおもてなしには本当に

驚きました。まだ小さい子なのに、しっかり音を奏でることができ前に立って自分の踊りを披露できる。ここまでできるようになるには日々の練習をしっかりとやっているのだなと感じました。わたしたちがアスラマに行くと子どもはすぐに駆け寄ってきて「Mio! Mio!」と呼んで抱きついてくれました。インドネシアではYAMAHAから出している“mio”というバイクが有名でよく子どもたちにもアスラマの職員にもからかわれました。しかし日が立つうちに合言葉のようになっていきみんなが気軽に話かけてくれるようになりました。いつもわたしたちの側で笑顔を見せてくれた子どもたちには本当に感謝しています。どんなに疲れていてもあの笑顔があったからまた頑張ろうと気を引き締めることができました。子どもたちとの出会いそして一緒に過ごした日々はわたしの宝物です。大きな力を与えてくれる子どもたちを尊敬し、子どもたちがわたしに向けてくれた笑顔のような力で今度はわたしが子どもたちに何か与えることができるようにわたし自身もっと成長したいと強く思いました。成長して、また会いにいきたいと思います。ありがとう！

### <教会とホームステイ>

教会訪問は週に1回日曜日に村中の人々が集まりお祈りをしますが、思っていたよりも長時間のものでした。日本で教会に行きお祈りをするという習慣がないからこそ感じたものだと思うけれど貴重な体験ができたと思います。村の人々は聖書を持ってきていましたがページを開けることなく歌う人もいて慣れているのがよくわかりました。日本の学生が用意していった歌の賛美歌ピアノ伴奏は目立った失敗はすることはなかったですが村の人の音楽を聴いて、もう少しアレンジした方がよかったのかなと少し後悔しましたが、インドネシアと日本の曲調の違いにも気づくことができました。みんなの賛美歌の歌声はよく通っていてパパもイブも好きだと言ってきて、たいしたことをしたわけでもないのにわたしのピアノ伴奏も褒めてくれ本当の親のように喜んでくれました。パパとイブはインドネシアでのわたしの家族だと胸

を張って言うことができる存在です。インドネシア語をもっと勉強したのちまた会いにいきたいです。

#### <日本語授業>

小・中学校、高校、看護学校で日本語の授業もしました。インドネシア学生の協力がなければなし得なかったものだと思います。通訳は頭も使うし精神的にも本当に大変だったと思うけれど、それでも笑って日本語の授業を一緒にすすめてくれたインドネシア学生には本当に感謝しています。生徒たちも日本語という言葉の壁を感じながらもそれ以上に学びたい、興味があるのが伝わってきてわたしたちも全力でぶつかっていきました。また、言語が違うだけでも難しいのに人に物事を教えるのは本当に大変なことだと改めて感じました。授業というよりは日本語を使っただけの遊びをメインにしましたが、ルールを教えそれを理解してもらうこともまた難しいように感じました。しかし実際にやってみるとみんな楽しそうにできて安心しました。年齢に合わせて内容も変え、状況で臨機応変に対応ができたこと、これもまたIWC28チームみんなで勝ち取った成功だと思っています。小学校の校長先生からは今までの中で一番よかったと言われ、生徒の反応も良かったので次の看護学校の授業への自信となりました。看護学校での授業も無事終えることができました。それに加え、その学校のことも知ることができ、子どもたちの進路にはどんな道があるのかを教えてくださいました。

#### <日本食パーティ、交流会>

日本食パーティや交流会でも日本で用意し、考えていたことをできたと思います。自分の欠如にも気づき、改めて考える機会ができたこと本当に感謝しています。日本食パーティではみんなで作ったカレーが凄く美味しくできてホストファミリーも子どもたちも“おいしい！”と言ってくれて、先生方からも好評でお代わりまでしてくれる人もいました。大人数の食べ物を作るのは時間も手間も凄くかかることを実感し、毎日アスラマでご飯

を作るイブは本当に凄いと尊敬しました。交流会で披露する歌やダンスはもう身体が覚えていていつでも完璧なものをお見せできる状態でインドネシアまで持っていったのは全員が頑張っていたからだと思います。子どもたちも披露し自分たちも楽しめたことは本当に良かったと思います。時間が押してしまったことは反省点ではあるけれど、みんなで作ってきたものは成功したと思います。交流会があつてから子どもたちとの距離がより近づいたように感じました。

#### <運動会>

急遽することになったプリンピンサリとムラヤの小・中学生、高校生との運動会は本当に大変でした。日本から何も用意していなかったけれど日本人学生で意見を出し合せて、スィクラマさんとも相談を重ね無事に運動会を開催することができました。日本だと時間区切りでやるけれど、インドネシアのものはまた違って、ギャップはたくさんあり苦労しましたが最後にみんなが笑って楽しかったと言ってくれたので温かい気持ちになりました。用意する時間が少ない中でインドネシア学生、日本人学生共にみんなが協力してくれたこと本当に感謝しています。またアスラマの職員の人にも個別に物品等用意して下さってより楽しい運動会を作ることができました。日本人学生vsアスラマの子どもの綱引きは改めてIWC28のチームワークの良さを知ることができ子どもたちと共に楽しむことができました。チーム分けはしていたけれど勝ち負けに関係なく競技を楽しみ、最後は全員でのフットボールをしこの運動会を成功することができました。

#### <まとめ>

インドネシアでの経験はわたしの誇りです。お世話になったスィクラマさんフォルマンさん美和さんプリンピンサリ村のパパとイブ、インドネシア学生やアスラマの子どもたち、インドネシアで出会った人との別れはつらいけれど、改めて自分を知ることができ今すべきこと、やりたいことがあるのだと再確認することが出来ました。このプ

プログラムを作って下さった桃山学院大学、先生方やキリスト教センターの職員の方々、募金して下さった方々、IWC27の方々、現地でお世話になったウイディア・アシ財団、アスラマのスタッフさん、プリンピンサリ村のホームステイ先の方々、共に活動して下さったスィクラマさんフォルマンさん石井美和さんなどIWCにかかわって下さった人全てに感謝し、快くインドネシアに送り出してくれた親に本当に感謝しています。インドネシアでの体験、経験はわたしの将来への大きな糧となり一生の宝物です。気づき、学びそして感謝。ありがとうございました。

## Terima kasih

Mio kozuka

Saya bangga bisa mengikuti IWC28. Saya belajar banyak hal setiap hari tetapi kita hanya bisa menghabiskan waktu 18 hari saja.

Saya merasakan hal yang penting dari apa yang saya alami. Terima kasih untuk semua orang yang telah mengikuti IWC28.

Terima kasih kepada Bapak dan Ibu saya di Blimbingsari. Mereka berbicara kepada saya setiap hari, khawatir dengan keadaan fisik saya dan memberikan kebaikannya kepada saya. Saya senang bisa menerima itu semua. Saya mendapatkan waktu yang baik dengan mereka.

Terima kasih kepada anak-anak di Asrama. Mereka menggandeng saya setiap waktu, memanggil saya "Mio! Mio!", menolong kita, mengajarkan saya bahasa Indonesia dan memberikan senyuman mereka kepada saya. Senyuman mereka memiliki kekuatan yang besar. Saya sangat menghargai mereka dan berpikir bahwa saya ingin menjadi seperti

mereka. Senyuman mereka memberikan semangat ketika saya sedang merasa sangat lelah. Hari-hari yang saya lewati dengan mereka adalah harta saya yang sangat berharga selamanya.

Terima kasih kepada mahasiswa Indonesia. Terima kasih kepada Novelyn. Kami berbicara banyak hal, menghabiskan waktu bersama-sama. Ia dapat mengerti bahasa Inggris saya tetapi saya tidak dapat berbicara bahasa Inggris dengan baik. Ia sangat pintar dan baik sekali. Novelyn seperti satu-satunya saudara saya.

Saya ingin bertemu mereka kembali. Saya berharap International Work Camp dapat berlanjut selamanya.

Terima kasih untuk segalanya!!!!

## インドネシアで得たもの

経営学部 3回生 新 歌奈子 (かなちゃん)



### <きっかけと出発前の心情>

わたしがこのインドネシアワークキャンプに参加した目的は、発展途上国の現状を自分の目で見て、実際に生活し、様々なことを実感したかったからです。事前研修で何回か行っておられる先生方に話を聞いてみたところ、向こうはトイレトペーパーを使う習慣がないことや、お風呂にバスタブはなくお湯が出ないことを知り、今までの日本での生活が当たり前だったわたしたちがいきなり違う環境で生活し、適応できるだろうかと不安でした。不安な要素はそれだけでなく、言葉が違うという不安もありました。インドネシア語は勉

強していましたが、聞きなれないインドネシア語をすぐに覚えるのは簡単ではありませんでした。世界共通語の英語も普段から話さなれていないため、うまく伝わるかとても不安で、インドネシアへ行く前は正直、楽しみよりも不安の方が大きかったです。

#### <到着して…>

不安と緊張を抱えインドネシアへ旅立ちました。が、デンパサール空港へ着いた時には、とうとう始まるのか、もう後戻りはできないから思いっきり楽しもうと自然と前向きな気持ちに変わっていました。ホテルへ向かうバスの中で、車よりもバイクの方が多くことに気が付き、車と車との車間距離がとても近かったり、バイクがバスの横10センチくらいの至近距離にいたり日本とインドネシアの交通に対する意識が違うことがわかり、とても面白かったです。きっと違うところは交通状況だけではないだろうなと思い、この日本と全く違う土地で18日間過ごすことにより、びっくりするようなことにたくさん出会えることを思うと、とてもわくわくしていました。驚く一方で、インドネシアで乗られている車はホンダやスズキ、バイクはヤマハがとても多く発見され、コンビニもサークルKがありインドネシアに対して親近感が湧くとともに、日本人を誇りに思いました。

#### <インドネシア学生>

ホテルにてこれから18日間を共にするインドネシア学生と対面し、第一印象はとても愛想が良く、ずっと笑顔で話してくれる子たちだと思い好感を持ってました。インドネシアの学生は英語は堪能で日本語も覚えていてくれて、見習うところが多く、わたしももっと英語やインドネシア語を覚えて、彼らやアスラマの子どもたちといろんな話がしたいと思いました。日本語の授業の説明をした時の理解も早く、交流会のダンスもすぐ覚えてくれて、最初から最後まで感心する点がたくさんありました。

#### <プリンピンザリ村>

初めてプリンピンザリ村へ行ったときは、デンパサールとは違い静かであまり建物がなかったけど、木や花が多く自然がとても綺麗だと感じました。初めてアスラマへ行くと子どもたちが道を作って待っていてくれて、子どもたち一人一人を見ながら通ると、目が合った子全員が笑ってくれて、ここで過ごせる14日間がとても楽しみになったことを覚えています。子どもたちは記憶力が良く、様々なことに興味関心を持つため、出会って3日くらいで、ほぼ全員の名前を記憶していた子もいたのではないかと思います。交流会や運動会、毎日の食後の数分間等、子どもたちと関わる機会は多々ありましたが、いつとなく「カナコ!」と叫んでもらえるのは嬉しく、愛おしいものでした。楽しい時間はあっという間に過ぎ、ようやく仲良くなれて子どもたちの性格も理解してきたと思った時には村を離れる時が迫っており、子どもたちと別れることを考えると自然と涙が出てしまうほど辛かったです。最後の日にずっと一緒にいてくれたある1人の女の子に手紙を書くと、その子も手紙を書いてくれました。小学1年生であるため文章を書くのも難しい年齢であるにも関わらず、わたしのことをとても気遣ってくれている文章に感動し、子どもたちからは最初から最後までたくさんのことを教わりました。その手紙は家で、そして子どもたちとの思い出は心に大切にいつまでも保管していくつもりです…。

#### <ホストファミリーとの生活>

ホームステイ先へ行きホストファミリーと初めて対面したとき、ホストファミリーはあまり英語が得意ではないことがわかり、うまくコミュニケーションがとれるか初めは少し不安でした。しかしそれをはじめだけで、言葉が通じなくてもジェスチャーで通じ合え、次第に距離も縮まり、気が付けば英語やインドネシア語を使いながらコミュニケーションがとれていました。ホームステイ先での生活は、トイレはペーパーを流すと詰まる恐れがあるため流してはいけないけど、想像していたものとは違い洋式の水洗トイレだったのですく



に慣れました。そしてインドネシアは暑いので、マンディーも苦ではありませんでした。バスタブやシャワーはなかったので、桶で水を汲んでシャンプー等を洗い流すのは、初めは難しかったけど次第に慣れていき、想像していたよりすぐに向こうの生活に適應することが出来ました。ネネはいつでもわたしたちを気遣い優しく接してくれる良いお母さんのような存在で、二人の娘さんは恥ずかしがり屋でしたが、徐々に心を開いてくれるのがわかり、それからは本当の妹のように接していました。イブはとてもおしゃれでわたしに化粧を教えてくれたり、服をくれたりと年は違いますが友達のように仲良くなれ、パパは普段無口だけれど、スマートフォンを使い一生懸命わたしと会話をしようとしてくれるのがとても嬉しく、こんな素敵な家族と巡り会い14日間を共に過ごせたことは、わたしの自慢であり一生の宝物となりました。

#### <ワーク>

インドネシアに到着して3日目からワークは始まり、1日中のワークも含め計6日ワークをしました。護岸工事でしたがわたしたちは、壁を作る技術はないため、ひたすら砂と岩を運びました。ワークをしているとお昼で学校が終わった子どもたちが毎回30人くらいは手伝ってくれて、彼らから元気をもらいとてもスムーズに作業ができました。インドネシア語を教えてもらったり、英語でいろんな話をしたりしながら作業していたので、頭にも入りやすく、良い勉強の時間でもありました。壁の完成度は頻繁には見ていませんでしたが、最後見たときにきれいに壁ができており、達成感と同時に、子どもたちにはわたしたちと一緒にこの壁を作ったことをいつまでも覚えてほしいと思いました。

#### <交流会と運動会>

交流会と運動会をして一番心に残っていることは、仲間の大切さでした。交流会の最後にアドリブで学生が手でトンネルを作って子どもたちを見送ったことが一番印象的でした。はじめは誰もが

それをするを聞かされていなかったのにも関わらず、みんながアイコンタクト等で分かり合った瞬間は、最後の最後まで子どもたちに楽しんでもらいたいという気持ちをみんな持っていたと思います。運動会の最後の綱引きも、ここで勝って子どもたちに仲間の素晴らしさを知ってもらいたいとみんなが思っていたと思います。わたしは今まで団体行動が苦手で、絆とか団結とかの意味をあまり深く理解していませんでした。現地でも一人で行動し、話し合いに遅れて行くこともあり、迷惑をたくさんかけたと思います。しかしみんなはそんなわたしを受け入れ、厳しく注意してくれることもありました。その時に気付いたのは、わたしが遅れたときの話を代わりに聞いて伝えてくれたり、こんなわたしを優しく見守ってくれたから、今のわたしがあるということです。わたしはこのIWC28期の仲間とだからこそ、今まで恥ずかしくてできなかった団結し合ったり、相手のために行動したりということができたのだと思います。仲間の大切さを改めて実感させてくれたみんな、本当にありがとうございます。

#### <バニユボ村>

インドネシアへ行き最も印象に残っているのは、子どもたちの出身村を訪問したことです。明日食料がなくなるかもしれない、明日生きられるかわからないという状況にも関わらず、村の人々は絶えず笑顔で、突然訪れたわたしたちを受け入れてくださいました。村の人々が毎日を一生懸命、大切に生きておられる姿を見て、わたし自身の生活を振り返り情けなくなりました。わたしたちが日々当たり前だと思っていることは、当たり前ではないことに気づかされ、毎日おいしいご飯が食べられ、快適に過ごせる家があり、学校にも通えるこの今の環境に感謝しながら日々を過ごそうと思いました。そして彼らの笑顔を守るために、わたしにできること、また先進国の日本としてできることは何か、今後学びを深めていきたいと思いました。さらに教育の大切さも痛感しました。子どもは教育を受けるためのお金がないので、大人になり働ける仕事も限られ、結局は貧困という

負のスパイラルから抜け出すことができません。貧困を脱出させるためには、根本の教育が必要であることを再確認しました。それを救うためにアスラマの方たちは、毎年貧困の村を訪れて子どもたちを引き取っておられますが、1つのアスラマで引き取れる子どもの数には限りがあります。アスラマの数を増やし、より多くの子どもたちが教育を受けられる環境を作る必要があると感じました。他人事ではなく、わたし自身そのような仕事に就き子どもたちを近くで支援したいと思っています。

#### <まとめ>

現地を訪れて分かったことは、人々の温かさです。毎日アスラマを訪れた時、毎日ホームステイ先に帰った時、いつとなく笑顔で迎えてくれました。わたしがぎこちないインドネシア語や英語で話しても、変な顔一つせず理解しようとしてくれました。そして現地の方々は、様々なことに興味をもたれ、わたしたちの名前や教えた日本語等を覚えるのがとても速く驚きました。そんな方々と18日間一緒に過ごし、いつも笑顔でいること、相手を受け入れること、いろいろなことに興味を持つこと、思ったことを素直に口にするなど大切なことを再確認でき、わたしはそんな基本的なことが心から素直にできていなかったことを反省しました。今回のワークキャンプは自分を見つめなおし、新たな発見がたくさんでき、本当に良い体験ができたことを今改めて実感しています。IWC28期みんな、引率教職員の方々、ホストファミリー、アスラマみんな、わたしたちに携わってくださったすべての方々、本当にありがとうございました。

## たくさんの出会い、気づき、学び

社会学部 2回生 黒田 柁平 (クロちゃん)



わたしは今2回生ですが、今までの大学生活は学校に講義を受けに行き、帰ってバイトに行くという毎日でした。こんな毎日を4回生まで続けるのは損をすると思い何か没頭できるものを探していました。そして、このIWCがあることを知り、参加することを決意しました。そして、IWCに参加して自分の弱点である人見知りなところと自分の思っていることをしっかり周りの人に伝えるということを治したいと思っていました。参加した理由はこんなに単純なことですが、事前研修からIWCが終わるまでの間、たくさんの出会い、気づき、学ぶことが出来ました。

#### 《事前研修》

わたしは人見知りが激しく人と喋るのがとても苦手です。また、全く知らない文化、言語の中で自分は何が出来るのかという不安でいっぱいでした。最初は誰とも喋ることはなく、ただただ引率教職員の話の話を聞いているだけでした。このままではいけないと思い、最初の事前研修の時に引率教職員の方が言っていたことを思い出しました。『面接のときに皆が自分の成長のためにこのIWCに参加を決意した人がほとんどだ。それも大切なことだが自分はインドネシアに行き何が出来るのかをもっと考えてほしい。』このことを思い出したわたしは、人見知りを治す、自分の意見をしっかりと伝えるということを治すのは勿論、1番は向こうで自分は何が出来るのかということを考えながら事前研修に取り組みました。

### 《プリンピンサリ・ホームステイ先》

わたしはホームステイ先で暮らすのはとても不安でした。インドネシア語も講義で習ったものの曖昧で、英語も全く出来ない状況だったのでホームステイ先の人と会話がとれるか心配でした。そんな気持ちのままホームステイ先の人を紹介してもらいました。見たときにホームステイ先の方の笑顔で不安は一気になりました。その時の笑顔は一生忘れないです。それから毎朝食べ物を出してくれ、帰ると必ず出迎えてくれました。英語もインドネシア語も話せないで単語を何とか並び替えたり、ジェスチャーで必死に今日の出来事や明日の日程など伝えようとすると嫌な顔せずに聞いてくれました。そのおかげでなに不自由なく14日間生活を送ることができました。時間があるときは家族でリビングに集まり一緒に話をしました。ワークで疲れていてもその疲れを忘れるくらい楽しい時間を過ごしました。ホームステイ先の家族はみんな常に笑顔で笑いの絶えない家庭でした。わたしは将来こういう家庭を持ちたいと思いました。また、プリンピンサリを訪れるときは必ず挨拶に行きたいと思います。14日間本当にお世話になりました。

プリンピンサリの村の人たちは皆あたたかい人でした。毎朝アスラマまで歩くとき見知らぬ人をたくさん見ますが、皆笑顔で挨拶してくれます。そのおかげで毎朝幸せな気持ちで1日をスタートすることが出来ます。この文化は真似しようとしても文化の違いがあるのでなかなか出来ないと思います。でも、この気づきを日本に持って帰り、いろんな人に伝え、いつかは日本もこういう文化になってくれたらいいなと思います。一人一人が意識したら決して難しいことではないと思います。ただ、このことを感じたのはわたしたち15人だけです。わたしたちがいかに人に伝えられるかが大事だと思いました。

### 《ワーク作業》

今回のわたしたちのワークの作業の内容は、雨季により川の水が増量し、危ないということでその川の護岸工事でした。わたしたち学生の仕事は

至ってシンプルで砂と石を運ぶ作業でした。男子にとってはそこまで重労働ではないが、女子にとっては大変な作業でした。ワークが始まり3日くらい経つと怪我人も出てきだし、暑さの影響もあり体調を崩す人も出てきました。その状況の中で誰も弱音を吐くことはなく、役に立ちたいという気持ちが皆現れていました。わたしたちの作業がすごい力になったかは分かりませんが、協力出来たことにとっても誇りにおもいます。

また、ムラヤの子どもたちは学校から帰ってくるとすぐに手伝いに来てくれます。自分たちのアスラマを早く完成させたい、わたしたちも協力したいという気持ちがすごく伝わってきました。作業中もムラヤの子どもたちは常に笑顔で、嫌な顔1つもせずに手伝ってくれました。そのおかげで予定していた日より大幅に早く終わることが出来ました。日本の学生・インドネシアの学生・ムラヤの子どもたち・スタッフと一緒にしたワーク作業は忘れることはないと思います。

### 《バニユボ村》

バニユボ村を訪れ、まず1番に思ったことはとても厳しい生活状況だなと正直思いました。生活水は週に2回3時間だけしか給水できなく、ドラム缶に水を溜めて生活している。水の確保が難しいので、あまり水を必要としないワイン用のブドウ栽培でかろうじて暮らしているが、収入の3分の2を地主が取り上げるので、農民は少ししかもらえない。この生活状況の中で10人以上の人で暮らしていると聞いて驚きを隠せませんでした。キッチンもとても料理出来るとは思えないほど散らばっており、調理器具も揃っていなかった。この光景を見て可哀そうだとは思わなかったけど心が痛かった。このバニユボ村を訪れ、目で見て、耳で聞き、肌で感じたことを自分の中に置いておくのではなく、今の自分には何が出来るのかを考えるのが大事なことだと思います。たとえ小さなことでも良いから続けることで意味があります。日本に帰り、食べ物を残さない、ゴミを捨てない、物を大切にする、これが今のわたしに出来る事だと考えました。また、日本に帰りわたしが肌で感

じたことを周りの人に伝えることもわたしたちの役目なのではないかと思いました。

#### 《出し物について》

わたしたちは事前研修の時からアスラマで披露するダンスや歌、小中高生に日本語を教える授業、ホームステイ先の人やアスラマの子どもたちに食べてもらうカレー作りの計画を立ててきました。

ダンスや歌を披露する交流会は当日まで不安が残っていましたが、実際舞台上で披露してみると子どもたちは大喜びしてくれました。また、披露するだけでなく、一緒に踊ることで一緒に楽しむことが出来ました。交流班が成功したのも子どもたちが楽しめるようなダンスや歌を考えた班長のおかげだと思います。

学生に日本語を教える日本語班も班長が事前研修の時点で物品を用意してくれていたおかげでとてもスムーズに進むことが出来ました。パソコンが使えなかったり、物品が足りなかったりトラブルはありましたが、焦らず臨機応変に対応出来ました。小中高生も積極的に授業に参加してくれたのでスムーズに授業を進めることが出来ました。

カレー作りの日本食班はわたしが班長でしたが、あまり指示出すことが出来なかった。でも、他のメンバーは自分の役割をしっかりこなし、自分の作業が終わると他のメンバーの手伝いをしたり、自分から行動をしてくれたのすごく助かりました。美味しくカレーを作ることができ、ホームステイ先の人や子どもたちも喜んで食べてくれました。皆笑顔で何度も美味しいと言うてくれたので作ってよかったと心から思いました。

このように今回の出し物すべて怖いくらいスムーズに進むことが出来ました。こうしてスムーズに進むことが出来たのは班長が上手くまとめてくれたのもあるが、15人一人一人が自分の役割、今自分は何をしなければならぬのかを常に考えていたからだと思います。この15人のメンバーの良い所はそこにあるということをインドネシアに来て気づく事が出来ました。

#### 《最後に》

わたしはこのIWCに参加してたくさんものを得ることが出来ましたが、1番はこの先日本に帰り英語を勉強したいと気づけたことです。エヴァリュエーションの時に自分の英語の出来なさに恥ずかしさを感じました。また、隊長と副隊長と英語の話をしていてとても刺激を受けました。自分がやりたいことを見つけることが出来たことにより、この先充実した大学生活をおくれると思います。IWCに参加したことは人生の中でも忘れることのない思い出になり、これから経験出来ない貴重な時間になりました。

#### 《インドネシア語報告書》

Shuhei Kuroda

Terima kasih untuk staf Asurama, keluarga di homestay, Mr Forman, Mr Swikrama, Mrs Ishii, dan pemimpin fakultas, yang telah membantu membuat program IWC ini.18 hari tanpa kurang suatu apapun, 15 orang dari kami bisa tinggal dengan nyaman adalah hal yang kami semua rasakan. Terimakasih kepada Ibu di Asurama, yang telah memasak makanan yang lezat setiap hari.Keluarga di Homestay membuat kami betah dan kami dapat melewati hari-hari kami dengan senyum mereka. Dapat dirasakan pada saat mereka menyambut kami ketika kami pulang beraktifitas, dan setiap pagi sebelum kami berangkat. Mr Swikurama dan Mr Forman selalu membantu menerjemahkan bahasa dan juga membantu kami dalam bekerja. Terima kasih untuk seksie kesehatan Mrs Ishii yang selalu mengurus kami setiap hari dengan ceria. Guru Miyake yang memimpin fakultas, Chaplain, Matsumoto-san yang telah memberitahukan hal-hal yang saya tidak tahu sebelumnya.Dan terkadang memarahi saya. Saya mampu untuk bertindak dan mengerti tentang apa yang

semua orang pikirkan. Itu adalah hal No.1 yang saya syukuri, dan juga 15 mahasiswa Jepang serta Novelyn, Lia, Sem, kami menjadi 19 orang. Pernah bersama-sama sejak pra-pelatihan, mahasiswa Jepang saling membantu satu sama lain. Saya berpikir bahwa dengan adanya bantuan itu, IWC telah berhasil. Saya pikir anggota grup ini sudah menjadi teman, yang sangat diperlukan untuk pergi dan menghabiskan waktu bersama di perguruan tinggi sekarang.

Awalnya ada kecemasan untuk berbicara saat bertemu mahasiswa Indonesia. Tapi saya senang, dua diantara tiga mahasiswa Indonesia datang kepada saya dan berbicara dengan aktif.

Sem adalah yang paling muda dan dapat diandalkan.

Lia berbicara bahasa Inggris dengan baik, bijaksana dan populer dari semua.

Novelyn selalu tersenyum.

Untuk berkomunikasi dalam bahasa, walaupun tidak mudah namun sangat menyenangkan.

Ada banyak hal yang sangat berharga dan berarti selama 18 hari.

Terimakasih banyak.

## 出会いや経験、すべてに感謝。

経済学部 2回生 下地 皓太 (こうた)



わたしの過ごした18日間は、かけがえのない宝物となりました。多くの人と出会い、日本では出来ないことを経験させてもらいました。この

IWC28が成功できたのは携わっていただいた全ての人のおかげです。感謝しています。特に団長、チャプレン、松本さん、スィクラマさん、フォルマンには18日間共に行動していただき、感謝しています。またインドネシアの母である美和さんは僕たちの体調面を気にかけてくれました。そのおかげで大きな怪我なく、無事に帰国することが出来たのではないかと考えています。影の立役者、朝倉さん。僕たちの見えないところでサポートしていただきました。そして同じプログラムに参加したインドネシア学生、日本の学生たちと出会い、時間を共有できたことも成功した要因の1つだと感じています。その他大勢の人が関わってくれました。本当にありがとうございました。

わたしは大きく分けて4つのことについて感謝を述べたいと思います。

最初に、アスラマの子どもたち、施設の職員の方々に言いたいと思います。まず、毎日おいしいご飯を作って頂きありがとうございました。子どもたちの料理を作るだけでも多くの量なのに、IWCメンバーの分も作っていただき、しかも子どもたちとは違う内容のご飯を作るのはとても手間のかかる作業だったと思います。しかし、嫌な顔一つせず挨拶や会話をしてくれ、わたしたちはとても居心地良くアスラマにすることができました。日本食パーティーでカレーを作り振る舞ったとき、ホストファミリーの人たちに向け作りましたが、自分の中では、料理してくれている人たちのためにもという思いもありました。一度きりの夕食だけではありましたが、少しは恩返し出来たのではないかと考えています。また、急遽決まった運動会。僕たちだけでは出来なかったことや説明をしてもらったことで、最後まで楽しく大きな怪我もなく成功することが出来ました。わたしたちが来たことで、子どもたちの生活リズムが崩れてもおかしくありませんでした。しかしそうならず済んだのは、施設の職員の方が気を張り巡らせてくれていたおかげだと思います。ムラヤの職員の方にもワークで手伝っていただいたことで作業がスムーズに出来たのだと感じています。その他にも、わたしたちの見えないところで作業をや

ってくれていたと思います。感謝しています。

そして毎日笑顔を与えてくれた子どもたち。一緒に遊んでもらいありがとうございます。子どもたちと接することで、わたしたちが多くのことを学ばせてもらい、たくさんの笑顔で癒してくれました。最初は緊張していた子どもたちも、時間が経つごとに積極的に来てくれ、名前を呼んでくれることがとてもうれしかったです。入村式や交流会、イベントの出し物のクオリティーは高く、ムラヤ、ウンタルウンタルと住んでいる子たちの年齢が上がるごとにキレが増していたと思います。3つアスラマを訪問させていただき、共通して言えることは、子どもたちの笑顔が素敵だと、すぐに話しかけてくれるところです。日本だと年齢が高くなってくると、中高生は特に大人と距離をとりたがり、近づいてこない子がほとんどです。しかし、ムラヤ、ウンタルウンタルに訪れると距離など一切なく接してくれます。そこが大きな違いだと感じました。子どもたちは本当にかわいく、毎日楽しく過ごすことができたのは、子どもたちの笑顔のおかげです。わたしたちはプリンビンサリの子たちと接することが多かったです。見つけたら名前を呼んでくれるのがうれしく、覚えてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。ムラヤでのワーク作業では、学校から帰ってきた子どもたちがいつも手伝ってくれました。そのおかげで作業の効率も上がり、スムーズにすることが出来ました。言葉は通じなくとも、思いは伝わるということを学ばせて頂きました。楽しい時間をありがとうございました。

2つ目に現地の方々、バニユポ村の人々、そしてホームステイ先の家族に対する感謝です。アスラマに行き帰りの歩いている途中、すれ違う人や家の掃除をしているほとんどの人が毎朝挨拶をしてくれ、こちらから挨拶をしても笑顔で返してくれました。挨拶をしてくれるおかげで、気持ちのいい、一日のスタートを切ることが出来たと思っています。また小・中・高・看護学校と日本語授業をさせていただきましたが、そこでも、子どもたちが楽しそうに授業やゲームをやってくれていて、日本語授業班の班長をはじめ、わたしたちは

その笑顔が見ることができ、幸せでした。

バニユポ村に訪問した時、世界の経済格差の縮図を見たような気がしました。そんな貧困状態にもかかわらず、わたしたちが訪れても笑顔で挨拶をしてくれました。何をしにきたと言われてもおかしくない状況なのに、嫌の顔をせず接してくれたのは驚きでした。そして、ここでも、子どもたちの笑顔が見ることができました。緊張しながらも無邪気な笑顔で近づいてくれた時、純粹でまっすぐな子たちだと率直に思いました。わたしたちのできることはほんの小さなことかもしれませんが、背伸びするのではなく、出来ることからコツコツと積み重ねていくことが大切なんじゃないかと、バニユポ村を訪問した後、感じました。

約2週間わたしたちの寝所を用意してくれ、家族のように接してくれたホストファミリーには、大変お世話になりました。言葉も通じないのにわたしたちを受け入れてくれ、毎日笑顔でいてくれました。毎朝、朝食を作ってくれ、洗濯もしていただき、帰ると話しかけてくれる家族がいてくれたからこそ、安心して生活することができました。わたしと弘大がペアでホームステイ先に行ったとき、緊張していてあまり会話ができませんでした。それを感じてか、次の日ドライブに連れて行ってくれました。会話はほとんどありませんでしたが、その気遣いがうれしく、積極的に話してみようと思えました。日数が経つにつれ、会話も増え、家にある楽器を教えてくれたり、家族みんなで市場に行ったり、インドネシアの生活を肌で感じるすることができました。初めて体験したマンデイーは衝撃を受けたことを覚えています。迷惑をかけたと思います。わからないことがあっても優しく、笑顔で教えてくれました。最終日パパが泣いてくれ、わたしたちを力いっぱい抱きしめてくれました。その顔を忘れることはありません。たくさんの愛で接してくれた家族の皆さん。本当にありがとうございました。

3つ目に18日間行動を共にしたメンバーに伝えたいと思います。桃山の学生とは事前研修から同じ時間を共有してきました。最初のころはみんなに対する壁があり、会話をあまりしませんでした。



しかし、時間が経つにつれ、いつの間にか壁がなくなっていました。みんなとの距離が急激に近づいたのは、合宿をしてからだと思います。そしてバリに向けて出発し、ノフェリン、リア、セムと出会いました。出会った当初は、何を話せばいいかわからず、モヤモヤした気持ちがありました。しかし、いつの間にかそんな気持ちはなくなり、楽しく会話をしていました。そこからというもの日本人もインドネシア人も同じ人間で同じ仲間だと思いました。日を増すごとに仲が良くなっていったのを覚えています。ワークではみんなで石や砂を運び、熱い中作業しました。日本語授業、日本食パーティー、交流会、運動会と多くのプログラムをやらせていただきましたが、全部が成功したのはこのチームだったからだと思います。その中でも最も印象に残っているのは、交流会です。わたしは交流会の班長をやらせてもらったのですが、自分が不甲斐ないばかりに多くのメンバーに頼ってしまいました。音源も深川君に探してもらい迷惑をかけたと思っています。またインドネシア学生の3人は、時間がないうちダンスを覚えてもらい、大変だったと思います。でも完璧に覚えてくれて助かりました。アスラマでの最終確認のとき、うまくいかず、不安でいっぱいの中、本番を迎えました。最初は緊張していたわたしたちも子どもたちも徐々に盛り上がり、ジェスチャーゲームではみんなが楽しそうで、その姿を見ることができとてもうれしかったです。時間がかかってしまい、すべてはできませんでしたが、発表したものはすべて成功することができました。わたしの下手な英語をノフェリンが拾ってくれたおかげで説明もスムーズにいき、司会もうまくいきました。みんなが頑張ってくれたおかげで、盛り上がり、成功することができました。無事に終わった瞬間、交流会の班長をしてよかったと心の中で思っていました。みんなのおかげです。良いところ取りさせてもらいました。ありがとうございます。このプログラムを共に過ごしたことで、みんなと本当の仲間になることができました。隊長、副隊長をはじめ、メンバーと仲よくなれたのはわたしの財産です。

最後に、わたし自身の目標を見つけることができたことです。漠然としていた大学生活が、ワークキャンプに参加したことで変化したのではないかと感じています。具体的に言いますと英語を勉強し、留学することです。インドネシア学生や現地の人と会話する時、インドネシア語以外で会話できる手段は英語だからです。簡単な英語も聞き取れない自分が情けなく、悔しい気持ちでいっぱいでした。思っていることを伝えるには、言語の勉強が必要不可欠だと感じたからです。そこで留学に励み留学することが、わたし自身の一番の目標となりました。ワークキャンプに参加しなければ、自分の目標を持ってないまま過ごしていただろうと思います。多くのことを気づかせてくれたワークキャンプというプログラムに感謝しています。

たくさん人と出会い、普段できない経験をすることで、お金では買えることのできない濃い時間を過ごすことができました。そこで学び、見たこと聞いたことを来季の29期生に伝えることが次の僕たちの使命ではないかと思っています。またわたし自身の性格を見直し、新しい発見や目標を見つけることができました。しかしここに至るまで、わたしたちの見えないところで多くの人が働いてくれ、成功という結果につながったのではないかと感じています。心から感謝しています。ありがとうございました。

## Pengalaman yang Berharga

Kouta Shimoji

Saya berhutang budi kepada banyaku orange, terima kasih. Saya bertem banyak orang, dan melakukan hal yang tidak biasa saya lakukan sebelumnya.

Saat saya mendekat, anak-anak di Asurama langsung melihat, bahkan dari kejauhan mereka sudah memanggil nama saya. Itu adalah hal yang sangat membahagiakan. Senyum anak-

anak sangat mengesankan. Jika saya merasa lelah, ketika itu pula rasa lelah itu hilang hanya karena melihat senyuman mereka. Setiap makan, orange-orange staf Asurama membuat makanan yang enak. Saya sangat bersyukur. Terima kasi karena selalu memanggil saya dengan senyuman, kita akan menciptakan sebuah lingkungan yang mudah untuk dijalani.

Saya juga merasa berhutang budi kepada anggota keluarga di home stay. Hal itu sangat baik untuk saya karena saya dapat berhubungan dengan satu sama lain seperti yang ditunjukkan dalam sebuah keluarga yang sesungguhnya. Saya mampu untuk bertanya kepada mereka dan mereka menjelaskan kepada saya, bahkan mereka mengajarkan cara bermain alat musik, untuk menghabiskan waktu dalam kebersamaan yg hangat dan nyaman. Terima kasih kepada keluarga di Home Stay. Setiap pagi, orang-orang di sana juga memberi salam kepada saya, sehingga sayabisa mengawali hari saya dengan menyenangkan.

Dan, ketika mengunjungi desa Banyupoh, orang-orang disana yang hidup dalam kehidupan yang menyakitkan dan susah, tanpa berkata namun terlihat kesusahan di wajah mereka. Hal ini yang tetap ada dalem hati saya. Saya berpikir bagaimana jika saya berada di posisi seperti itu, dan bagaimana bias menjalani keadaan seperti itu. Kita mungkin saja dapat berada di posisi itu. Kadaan itu yang membuat saya berpikir begitu.

Mulai dari guru serta anggota kapten, wakil kapten, dan mahasiswa Jepang, kemudian dengan empat mahasiswa Indonesia, Lia, Novelyn, Sem, Saya mampu melewati 18 hari dengan mereka. Menurut saya jika semua ini hanya dilakukan oleh satu orang atau perorangan, maka program ini tidak akan berhasil. Saya tidak akan pernah melupakan 18 hari yang saya lewati selama menjadi anggota ini. Saya

berterima kasih kepada semua orang yang terlibat dalam program ini. Terima kasih semua.

## 素敵な体験、経験をありがとう

経済学部 2 回生 杉山 怜美 (れみ)



### はじめに

本当は 1 回生の時に行きたいと思っていました。でも、不安もあるし、人見知りをする事からなかなか行動に移すことが出来ないでいました。“行ってみたい”という気持ちだけはずっとあったため、2回生になる前の春休みに深川君と一緒にチャブレンに誘われた時に“行く”と決めました。チャブレンの誘いが後押しになりました。

### 事前研修

月曜日と木曜日と 5 限と放課後の事前研修は大変でした。予防接種などの健康についての話や、日本食調理実習などワークキャンプに役立つことばかりで良かったです。

ですが、インドネシア語授業の日は 3 限目に韓国語、4 限目に英語をうけてからのインドネシア語だったので頭の中は軽くパニックになりかけていました。また、物品準備が始まりだしてから研修中はダンス練習が中心になっていたので、授業の空き時間などに集会所によく通っていました。日本語授業のレジュメを研修後に作ったり、昼休みや授業の空き時間などにメンバー何人かが集まって喋りながら準備を進めていったりと、楽しく作業していました。(少しのんびり作業をしてしまい最後に慌てて作り上げたことは秘密ですが…。)

## 合宿

合宿中は交流会の通し練習、日本語授業の予行演習、岸和田学園訪問など最終準備を詰めることが出来ました。自分自身ダンスも歌も完璧とまではいかず、不安がありました。それよりも日本語授業の方が不安でいっぱいでした。現地の子どものたちの日本語の理解度が分からないし、インドネシア学生に授業内容を伝えられるかという不安でいっぱいでした。夜には全員でご飯を食べに行き、たくさん話しをしました。宿舎でも夜遅くまでトランプをしたり、お喋りをしました。この時に初めて全員が仲良くなったのではないのかなと思いました。岸和田学園訪問では、施設がどのような役割を果たしているのか、子どもたちはどのように日々過ごしているのかを少しの時間で知ることが出来ました。どの子も初めの方は恥ずかしがっていたのですが、気づくと無邪気で元気いっぱいです。ずっと笑顔でした。たくさん話を聞くことができ、インドネシアで活かせることばかりでした。

## 出発

わたしにとって海外は初めての経験でした。ウキウキしすぎて前日眠れなくて遅刻しないかと不安でいっぱいでした。空港についてはお母さんとの別れがさみしくずっと手を振っていました。6時間のフライトは長いようで短い時間でしたが、客室乗務員の方々と写真を撮ったり、話をしたり、映画を観たり、音楽を聴きながら寝たりと自由に過ごしました。

空港については、気持ちが高まりすぎてたくさん写真を撮ってしまい怒られました。空港からホテルまでの移動のバスでは街並みを見て、本当に海外に来たのだと思いました。この時までは観光客気分でしたが、ホテルについてはインドネシア学生と対面し、改めてワークキャンプに来たんだと実感しました。インドネシア学生のリアと同室になり、ワークキャンプが終わるまでリアと一緒に部屋ということで不安ばかりでした。インドネシア語がほとんど喋れなく、英語もそこそこしか喋れませんでした。ジャスチャーと

単語で伝えていたので、もっと勉強して来れば良かったなと後悔しました。

## プリンピンサリ

ホテルからバスで長時間の移動の間は、外を見ていたり寝ていたりしました。海はきれいで水平線がずっと遠くまで続いて世界は広いのだなあと思いました。途中、休憩で寄ったところで日本とインドネシアのトイレの違いを実感しました。

プリンピンサリに着くと子どもたちが迎えてくれました。バリダンスを見るのは初めてで、楽器の演奏の音が大きく迫力があると思いました。どの子どもたちも笑顔で迎えてくれてとても嬉しかったです。子どもたちに名前を聞くと答えてくれるのですが、早口であったり、長かったりでなかなか覚えることが出来ませんでした。何度も聞き直して悪いことをしたなと思いました。アスラマに来てすぐの子どもで喋れない子どももいましたが、英語の上手な子、日本語の上手な子と色々な子どもたちがいました。どの子どもたちも真剣にわたしの言っていることを理解しようとしてくれたり、インドネシア語でわたしが理解できないときには英語で説明してくれたり、一生懸命話してくれました。もっと勉強して話せるようにしてくればよかったなと何度も思いました。指さし本で会話をしていても、突然分からない単語を言われて焦るということが何度もありました。

ホームステイ先ではイブが「おとん」「おかん」と最初に言ってくれたのでずっと「おとん」「おかん」と呼んでいました。リアに通訳してもらいながらミーティングが終わってからワルンで喋ったりしていました。おかんは、毎朝お茶とピサングレンかお菓子を出してくれました。おかんの作ってくれるピサングレンは本当においしくて大好きになりました。息子さんの名前を聞くのを忘れていましたが、息子さんとは英語で会話出来たので仲良くなりバイクの後ろに乗せてもらって彼の牧場や、滝を見に連れて行ってくれました。彼はハンターをしていて銃を見せてくれたり、ヤシの実を打ち落としたりもしてくれました。

## 日本語授業

班長をしていたこともあり、授業をするまで不安でいっぱいでした。ですが、生徒たちは日本語を知っていたりと予想以上にスムーズに授業が行えました。中学校には行っていませんが、小学校、高校、看護学校とどれもうまくいったと思います。インドネシア学生には本当に感謝しました。そして日本人メンバーにはもっと感謝しました。みんなの協力があつたから成功したのだと思いました。

## ワーク&ムラヤ

ムラヤの子どもたちと一緒に現地の職人さんのお手伝いをしました。壁を積みあげていくのは職人さんがやってくださり、わたしたちは壁作りに必要な砂や、石、ブロックなどバケツリレーで運びました。午前中のワークでは子どもたちは学校に行っているので少し人数が足りないような気がしていたけれど、昼ご飯を食べてお昼寝や休憩をしていると子どもたちが帰ってくるので賑やかになり、午後のワークは大人数で楽しく子どもたちと会話しながら作業が出来ました。ワーク以外でムラヤに行くことがなく、資材の都合上、突然ワークが終わったと聞いた時は“もう会えないのかな”と思いきみしくなりました。

## 運動会

プリンピンサリとムラヤの子どもたちが集まって運動会をしました。子どもたちはみんな元気で暑い中どの競技も楽しんでくれました。予定していたすべての競技をすることは出来なかったのですが、インドネシアの人々の考え方や性格的なものをよく知れたと思いました。物事を考えすぎて、小さい事に囚われすぎるのはよくない、大きな心で対応している方が心に余裕ができ、何事も楽しめるのではないのかなと思えるようになりました。

日本人vs子どもたちで綱引きをした時は、掛け声を合わせ2勝1敗で勝つことが出来ました。綱引きってこんなに楽しい競技だったんだと改めて思いました。

高校生や中学生は競技よりもサッカーの方を楽しみにしていたみたいで、サッカーが始まるとみんな目の色が変わって、普段はおちゃらけていて面白い子でもサッカーをしている姿はとてもカッコよく見えました。

運動会はムラヤの子どもたちに会える最後の機会だったので運動会が終わってトラックを見送る時はすごくさみしくなりました。でもちゃんとお別れが出来て良かったです。

## 最後に

今回のIWC28を通して自分は何も知らないのだなと思いました。日本では当たり前のことでも日本以外の国に視点を変えるだけで知らないことがたくさん出てきました。インドネシアでは交通量の多さ、郊外に行くほど少なくなる信号機、道端に瓶詰されたガソリン、ごみ処理方法、服装(ほとんどの子どもたちがサンダル)、家の設計から網戸のない窓、マンディは水だけ、土足の基準があいまいなどたくさんあり、貴重な経験が出来ました。日本にいただけでは想像も体験も出来ないことばかりでした。

リアと同室になり一緒に過ごしている時間の中で英語の出来なさ、また英単語も忘れていたものが多くあるということ、インドネシア語よりも英語の方を出来るようにしておかなければならなかったと実感しました。リアにインドネシア語を教えてもらいながら英語で会話をしていました。リアはわたしたちの先生でありパートナーでした。リアには感謝の気持ちでいっぱいでした。

事前研修からずっとお世話になっているたくさんの方、先生方、スタッフの方々本当にありがとうございました。そして、いつもアドバイスをしてくれたりどんなことでも協力して、笑顔で送り出し迎えてくれた両親にはもっと感謝していました。

インドネシアにいつかもう一度行ってIWC28で出会った人々に会いに行きたいと思います。たくさんの方の感謝の気持ちを持ってました。ありがとうございました。

## Terima kasih

Remi Sugiyama

Saya ingin berterima kasih kepada semua orang yang terlibat ramah saya. Terlepas saya tanpa harus berbahasa Inggris, Bahasa Indonesia bahkan hanya berbicara frase dasar dan kata-kata sedikit, itu silahkan hubungi lembut dengan senyum selalu. Itu aku mendengarkan serius melihat mata. Saya pikir berkali-kali dan Na yang baik ketika Anda percakapan alami untuk belajar lebih. Aku bahkan seperti ini saya senang saya terbiasa dengan pendamping. Saya suka kebaikan semua orang. Di bawah... Itu benar-benar senang untuk disambut dengan sambutan yang besar dari awal.

Itu anak-anak benar-benar senang di helper panggilan selalu Remi, saya Remi di Asurama. Sulit benar-benar akan kembali ke Jepang terlalu menyenangkan yang Anda dapat memeluk banyak, Anda dengan anak-anak Anda dapat mengambil gambar atau percakapan.

Berikutnya English Indonesia juga sehingga Anda berbicara sedikit lebih ketika Anda bertemu orang. Dan mari kita bicara banyak.

Eve kami telah nasi lezat setiap hari. Terima kasih semua! Aku tidak mengganggu kondisi fisik berkat Eve kami. Itu perut penuh setiap hari bagaimana memasak lezat. Juga Silakan, makan sampai perut penuh.

Terima kasih untuk Oton & Okan. Itu bagus untuk saya keluar makanan setiap pagi. Itu adalah sumber vitalitas hari. Pisangoren sekarang cinta terima kasih. Kelembutan dari Oton, saya tidak akan pernah melupakan senyum Okan. Saya juga pergi untuk bermain. Jangan lupa

untuk itu.

Terima kasih banyak.

## ワークキャンプを体験して

経済学部 2回生 西村 寛生 (ヒロ)



### 子どもたち

インドネシアについて初めて会った子どもたちは、アスラマの子どもたちでした。みんなが、わたしたちIWCメンバーをあたたかく歓迎してくれました。子どもたちの数人が歓迎の踊りを披露してくれました。この踊りは、後々何度か見る機会がありましたが毎度毎度ほれほれする美しい踊りでした。子どもたちの反応は、最初から学生に対して積極的に接する子どももいれば、控えめな子どもは後ろで見ているだけという子どももいました。この辺りは日本の子どもと変わらないなと感じました。この時、わたしたちもどのように接していけばよいのか戸惑う学生もいてうまく接することが出来ない学生もいれば、既に子どもたちと仲良くなっている学生もいました。それから数日が経ち子どもたちとの距離も縮まり仲良くなったころ、一人の子どもが今まで言葉に出さなかった感情を伝えてくれました。それは、「家族に会えなくて寂しい」という感情でした。わたしは言葉が出ませんでした。うまく言葉で伝えることが出来なかったわたしは、ただ抱きしめるだけしか出来ませんでした。この時わたしは、自分の家族に感謝しました。いつもは面倒に感じる家族でしたがこの時は自分のおかれている環境がいかに恵まれているか、いかに幸せ者か痛感しました。そして、子どもたちが自分の家族と一緒に過ごす日

が訪れ、子どもたちが大人になり家庭を持った時に同じ道を歩まないようにわたしができることをこれからしていこうと決意しました。また、バニュポ村を訪問したときに会った子どもたちもまた笑顔の絶えない子どもたちでした。バニュポ村は、アスラマにいる子どもの出身村の一つでした。この村の環境は、アスラマよりも整備が整っていませんでした。それでも、子どもたちの笑顔はアスラマの子どもたちと同じく輝いていました。子どもたちの笑顔を見て周りの大人も笑顔がこぼれました。この笑顔がなくなったときこの村は悪い方向に向かうと思いました。笑顔は人を幸せな気持ちにしてくれると考えていました。さらにそれが無邪気な子どもの笑顔であればなおさら幸せな気持ちになると考えていました。これは希望の光だと考えました。大人たちはこの笑顔を絶やさないために努力することを惜しまず、大人の最大の楽しみになると考えました。子どもたちは、大人にとって希望の光であるのは家庭だけでなく国家としても希望の光だと思えます。子どもたちは、これからの国を担う担い手であり、国を動かしていく大きな力になる原動力であるから、アスラマのような施設において子どもたちを成長させることはこれからも続ける必要があり継続させることが重要であると考えました。これは、インドネシアだけに限ったことではなく世界共通の考えだと思いました。今回こうして考えさせられることで今まで以上に深くかかわることができたので良い経験となりました。この経験をこれからの生活の中で活かせるようにしたいです。

## ワーク

ワーク内容は、河岸の壁づくりでした。具体的に作業内容を述べると、壁の材料である石、砂運びでした。石、砂ともに運び方はバケツリレー方式を取り入れました。日本人学生とインドネシア学生だけでは成り立たないような作業でした。作業のほとんどをムラヤの子どもたちに手伝ってもらっていました。子どもたちがいない時の作業は、学生たちの健康に配慮しながら行っていたので作業スピードは落ち、作業量も減ってしま

た。また、今回はワーク班毎での作業が特例で、なかったのでワーク中に班行動はほとんどありませんでした。ワークは、簡単な作業内容でしたが、全員が体力のある人ばかりではありませんでした。そのため、作業中に休憩を取らなければならない人が増えました。特に、作業中の天候も1つの要因であると考えました。作業中は炎天下の中、影のないところで行っていたからです。ただ、わたしたちが作業をしていたのは作業工程の少しでしかないことは理解しておきたい。わたしたちが作業していない間も、職人の人たちは黙々と作業をこなしていました。そのおかげで、目標予定であった50メートルの護岸工事は終了しました。

作業を自分自身の手で実際に行ったことで実感したことは、たった50メートルの護岸工事の大変さでした。説明するだけならとても簡単に聞こえますが、体験することでこの作業にどれだけの人員が必要であり、体力が必要かと理解できました。また、職人さんの中にはまだ小学校に行っているような年齢の子どももいました。職人さんは出稼ぎであり、ほとんどの給与を家族に送っているので、本人たちの稼ぎ分は本当に少ないそうです。さらに、小学生のように見える子どもは、当たり前のように煙草を吸っていたので困惑しました。このあたりの光景を周りが異常だと思える日が来ることを望みました。また、子どもたちが家庭の事情で働かざるえない状況がなくなり、学校にいけないような未来を創造していくサポートの1つとして、自分たちの活動が少しでも役に立てばいいと考えました。

## 日本語授業

日本語授業は、ゲームが盛り上がったのでよかったです。ただし、あいうえお表に関しては高校以上だと必要性がないと考えました。そして、日本語を学ぶ方法は座学だけでなく体を動かして学ぶ方法もあると理解しました。体を動かして学ぶ方法は、子どもたちに人気があり、積極的に参加してくれました。子どもたちの参加態度は、とても積極的で好奇心旺盛でした。そのため、こちら

もやりやすい雰囲気でした。ただ、積極的に前に出る子どもや自分から言い出せない子どもなど日本と同じような様子だったので、このようなところは世界共通だと理解しました。偶然かもしれませんが、今回訪問したところでは日本語に力を入れているところが多く、嬉しかったです。ところが、日本語は難しい語学のように利用出来るようになるまで時間が掛かりそうです。今回の授業は始めに高校で行いました。高校生はあいうえお表が読めるので初めの自己紹介などはスムーズにできました。ゲームに関してはかるたもフルーツバスケットも楽しんでいました。フルーツバスケットの罰ゲームは対象となった高校生が何かしら歌を歌うなどしてつまづくことはありませんでした。ただ、元気がありすぎてこちらが体力的についていけない部分もあったので、時間配分をもう少し考えて授業をすすめたほうがよかったです。次に行ったところは、小・中学校で2つの班に分かれて授業をしました。わたしの班は中学校の班でした。中学校には、アスラマの子どもたちもいたのですぐに全員と打ち解けることが出来ました。中学校の担当は1年生でした。あいうえお表はまだ始めて3カ月ほどであまりできまかったので、時間をかけてあいうえお表をしました。そのあとは、高校と同じくフルーツバスケット・かるたをしました。それでも時間に余裕があったので、みんなで歌を歌いました。日本語の歌詞をローマ字で書くことで中学生も理解することが出来ました。歌を何回も歌って、中学生とIWCメンバーが一つになれました。それぞれの状況に合わせた時間の使い方を柔軟に対応することが求められる授業でした。最後は、現地についてから決まった看護学校でした。看護学校では、あまりあいうえお表が進んでいなかったの少し苦労するところもありましたが、3度目ということもありうまく対処してスムーズに授業を終えることができました。ここでは、かるたはあまり反応が良くありませんでした。フルーツバスケットは女子だけだったので少し落ち着いたフルーツバスケットになると思っていたのですが、そうでもありませんでした。小・中・高・看護学校とひらがなで自分の

名前を書き終えて自分の名前を見たときに、みんな嬉しそうにしていたのがとても印象的でした。

#### まとめ

今回体験したインドネシアでの経験は、今後の自分に大きな変化をもたらしたと考えます。まず、子どもたちの現状を生活面からみると特に不満のないように思えました。不満はないが、満足しているようには見えませんでした。時々見える、寂しそうな顔が本当の感情だと考えました。やはり、本当の家族とういうものはかえることのできないものであると考えました。今アスラマで生活している子どもたちが、成人して家族を作るとき自分たちの子どもを自分たちと同じ状況にならないようにするために、わたしたちが少しでもサポートできることがあるなら進んで参加していきたいと決意しました。

#### 感想・感謝（インドネシア語）

Hiroo Nishimura

Saya telah belajar banyak hal dalam program ini.

Yang pertama adalah bahwa senyum anak-anak itu penting.

Saya pikir dari sekarang untuk menjaga senyum anak-anak, juga untuk dapat meningkatkannya, kita harus melanjutkan program ini.

Yang kedua adalah bahwa keluarga yang penting. Kami dapat waktu yang seperti ini dan kalian menyadari bahwa yang selalu berada disisi kalian adalah keluarga, adalah merupakan suatu kesempatan yang baik.

Yang ketiga adalah ukuran keberadaan sekolah. Hal ini karena kita memiliki kekuatan untuk mengubah keadaan anak-anak, mereka belajar dengan anak-anak sekolah. Sekolah tidak biasa bagi saya. Saya pikir kita perlu memodifikasi.

Yang keempat, adalah kenyamanan hidup kita.



Sebagai contoh, saya bisa merasakan air ditangan saya. Lokasi konstruksi, yang kebanyakan rendahnya proporsi pekerjaan manual oleh mesin. Di mana saja terdapat kertas toilet. Anda dapat mendinginkannya dengan pendingin jika Anda merasa panas. Tidak ada jalan Anda memulai. Saya pikir kita tidak perlu berpikir apa yang harus diberikan di kehidupan sekarang, tapi bagaimana memiliki rasa syukur.

Dan juga, saya ingin memberikan mereka kehidupan tanpa melupakan keluarga saya yang sekarang.

Dan saya berpikir apabila anak-anak memiliki keluarga, maka kebutuhan mereka dapat terpenuhi dan mereka tidak akan berada dalam situasi yang sama.

## 暑い暑い夏

社会学部 1回生 貴田 薫 (きだちゃん)



### <IWCとの出会い>

わたしがこのプロジェクトを知ったのは入学前のことだった。

学校のFACEBOOKを見てこのプログラムがあることを知った。

わたしは高校時代を、部活もせずに毎日遊んで無駄に過ごしてしまったため大学では色々な活動に参加し海外に行くことを初めから心に決めていた。

説明会のときの前年度のスライドショーを見て参加したい気持ちが強まった。わたしの志望理由は将来児童指導員になりたかったため日本の児童養護施設と外国の児童養護施設を比較したいとい

うわりと明確な理由があり、1回生のうちに参加した方が良いと言った母親の勧めもありこのプログラムに参加した。

### <IWC28結成から出発まで>

事前研修では色々なことをした。結成日には懇親会もありメンバーと親睦を深めることができ、これから頑張ろうという強い気持ちが生まれた。5月の始めのころの木曜日は由比先生にインドネシア語のレッスンを受けたり月曜日は色々な先生方にインドネシアについて教えていただいたりもした。6月には日本食パーティーのための事前調理実習や交流会のための歌やダンスを昼休みや5限後を使ったりして練習した。7月には各ワーク班に分かれてチャペル前で募金活動を行なった。募金活動は具体的な使用目的が定まっていなかったこともあって入れてくれる人も限られていたが何度も入れてくれた方々には本当に感謝している。8月には合宿もして1日ダンスや歌を通して本番に備えた。本当に必死だった。日が近づくにつれてわたしは不安になるばかりだった。インドネシア語の勉強を投げ出してしまったまま当日を迎えてしまった。

### <出発>

インドネシアのバリ島にボランティアをしに行くというと人は「観光?」「発展途上国?」と聞いてくる。実際わたしもそのようなことしか知らなかった。そんないい加減なままインドネシアに行くと思うととても不安になった。

前日では眠れないほど緊張していた。なぜなら心の準備がいつになってもできなかったからである。だがしかし当日はもう「なるようになるでしょ」と開き直っていた自分がいた。それぞれが色々な思いを抱きながら日本を出てインドネシアに飛び立った。

6時間半のフライトを終えホテルに向かいインドネシア学生と対面した。

わたしは消極的な性格のため1日目の夜はほとんど会話ができなかった。

その時わたしは、言葉の壁は大きいなと実感し

た。しかし、先輩たちは楽しそうに話していたので自分のコミュニケーション能力の問題かと反省した。

1日目はいろんなことが初めてだったのでとても疲れていたことを覚えている。

#### <ブリンビンサリ村とアスラマの子どもたち>

プリサロンホテルで1泊し次の日朝早くにバスでブリンビンサリ村に行く予定であった。だがしかし渋滞によりバスが予定より一時間ほど遅れていた。その時わたしは、時間に正確すぎるぐらい正確なのは日本ぐらいなのかなとカルチャーショックを受けたのであった。

ブリンビンサリ村には途中休憩を挟んで4時間弱ほどで着いた。着いた途端第2アスラマの子どもたちはお花を首にかけてくれたり楽器を演奏してくれたりしてとても華やかにお出迎えをしてくれた。それらは本当に感動したとしても嬉しかったので今でも鮮明に覚えている。お出迎えをしてくれた時に頂いた、果物がたくさん入っているフルーツジュースは甘くて美味しかった。子どもたちの何人かがバリの伝統的な踊りを披露してくれた。

アスラマには親と一緒に暮らしていない子どもがたくさんいた。事前研修でわたしたちは岸和田にある2つの養護施設に訪問していたが外国と日本の養護施設に入る理由は真逆であると考えた。日本では親から虐待を受けて施設に入る子どもがほとんどであるがアスラマの子どもたちはもちろん例外もたくさんあるが、ほとんどは親と一緒に暮らしてもお金がなくご飯も食べられず学校にも行けずといった問題が起ってしまうといった理由がほとんどであった。親に会いたくて泣いていた子どもも見受けられた。

#### <ワーカー日目>

バリ島に着いて3日後にはワークがあった。作業した場所は第5アスラマのムラヤで行ないその護岸工事をした。初めての作業はバケツリレーの砂運びと石運びであった。

単純作業ではあるが非常に速いペースで回すた

め30分間隔で休憩を挟み、休み休み作業をした。ムラヤの子どもたちも手伝ってくれたおかげもあり、1日目のワークは滞りなく作業が進んだのではないかと思う。

#### <日本語プロジェクト>

わたしは日本語班のメンバーである。日本語班はきっと一番多く集まったのではないか。

毎週火曜日の昼休みにチャペルの会議室を借りてみんなで何をするか案を出し合った。本当に未知のことなのでインドネシアの学生はどこまで日本語を知っているのかなど本当に何もわからないところから始まった。かるたの案では自分の案も採用されてそれが形となって出来ていくところを目の前で見ている、とてもやりがいを感じた。

8月21日よいよ日本語プロジェクトが始動した。教室に入ったときは自分が先生になるという現実味のない出来事に一人で戸惑っていたことを鮮明に覚えている。名札作りの時には高校生のほとんどは自分の名前を平仮名で書けていたことには本当に驚いた。

前年度や前々年度の報告書を読むとインドネシアの学生は授業内で日本語の授業があり日本語の理解度が非常に高いことは記されていたがまさかここまで書ける生徒がいるとは思わなかったのである。日本語プロジェクトでは高校生はみんな話を聞いてくれるしルールも守ってくれるので非常にやりやすかった。

別の日にわたしは中学校と看護学校を訪問して日本語を教えた。中学校は本当に大変であった。日本語の理解度が高校より少し低かったのは問題ないのだが日本語の理解を深めるためのゲームでは好き放題であった。かるたゲームではカードが踏みつけられたりして揉みくちやになって本当に悲惨な状態だった。看護学校では中学校同様かるたゲームは悲惨だったがその他のゲームはやはり女の子の割合が圧倒的なため平穩に終えたのではないかと思う。中学校は本当に悲惨なものだったが看護学校も中学校もみんな楽しんでくれたので結果オーライなのではないかと考えた。

わたしは日本語班の一員なのに特にこれといっ

たことは何もしていないのがとても心残りである。これは自分の積極性に欠ける問題なので深く反省したいと思う。

初日から大成功したのは全ての段取りを仕切ってくれた日本語班のリーダー怜美さんのおかげであると思う。怜美さん本当にありがとう。

#### <バニユポ村>

8月22日はバニユポ村を訪問した。わたしの想像力では計り知れない事実が目の前にあった。

まず驚いたことは内か外か区別がつかなかったことである。「え？ここ家？」と思わず口走りそうになったほどであった。誰の家なのか誰が家族なのかどの牛が誰の物なのか全くわからなかった。もし自分が逆の立場だったら日本のように恵まれた国から来た知りもしない相手から自分の家を物色されて写真をパシャパシャ撮られたら堪ったもんじゃないなと思った。

バニユポ村の現状を詳しく説明すると、マンデューをする場所なのに苔が生えていたり川の水も枯れていたり生計を立てる上で必要なブドウ畑も枯れかかっていたりした。三宅先生がどうして作物がブドウなのかというと水が少なくても育つからだと教えてくれた。

バニユポ村に実際訪問していない人は必ず抱く感情は「可哀想」といった感情だと思う。なぜならわたしも訪問する前はそうであったからである。可哀想だと思うのは自分の置かれている状況がいかに幸せかを漠然としていても把握しているのだと思う。日本人は幸せの価値観は人それぞれではあるが自分が幸か不幸かが少なくともわかる。だがバニユポ村の人々は自分の置かれている状況が不幸なのか幸せなのかもきっと知らないのではないだろうかと思った。

わたしは貧困という漠然とした言葉を漠然とそのまま解釈してはいけないのだと思った。

日本にいるとあたりまえを幸せと感じることがあってもそれをわざわざ口にすることは少ない。だが今回の訪問を踏まえて小さなことからでもたくさんのごことに感謝して生きていこうと思った。

#### <これから…>

わたしはこの夏本当に貴重な体験をさせていただいた。どんなに月日が経っても決して忘れることのない夏休みになった。普段考えもしないようなことをたくさん考え、悩んだりもした。

わたしが今回このプログラムに参加して一番考えたことはアスラマの子どもたちの将来についてである。エヴァリユエーションでも問題となったことはいくつかあるが、その中で意見として出た職員の指導はできる限り早く進めてほしい。他のことは多額のコストがかかってしまい、どうしてもすぐにという訳にはいかないが職員指導は解決できるのではないかと考えた。アスラマの子どもたちに輝かしい未来があるようにIWCの活動はこれからも続けていってほしいし続けるべきだと考えた。わたしたち28期の活動は終わってしまうが29期に続くような活動をしてきたつもりなので29期は28期以上の活動をしてほしいと思う。そして29期には事前研修からちゃんと全員で参加してほしいと強く思う。

インドネシアは、昼間は空気が澄んでいて夜は満天の星空といった、この言葉通りの場所だった。もし、このプロジェクトの参加を迷っている人がいたら必ず参加すべきだと思う。「人生が変わる18日間」であるといっても過言ではない。

長々と語ったが最後に…IWC28期のメンバー15人を始め、引率教職員、看護師の美和さん、現地の方々、本当にどうもありがとう。

## Terima kasih

Kaoru kida

Musim panas ini, saya adalah pengalaman yang baik.

Yang pertama, ia mampu bermain dengan banyak anak-anak. Ini adalah pengalaman yang benar-benar berharga.

Saya pikir benar-benar senang bahwa itu aku jinak dari awal kami datang dari tempat di

mana Anda tidak tahu sama sekali.  
Terima kasih yang tempat untuk pekerjaan yang telah peran mereka sendiri berkat bimbingan staf Asurama bahkan bermain.  
Yang kedua adalah kunjungan dari kemiskinan desa. Pengalaman ini akan memberikan pengaruh yang besar pada kehidupan ini dari kami. Terima kasih untuk membiarkan saya tahu fakta-fakta tidak bisa membayangkan.  
Terima kasih telah mengingatkan saya untuk tidak masalah tentu saja jelas.  
Ketiga, Terima kasih untuk bahwa ia telah membiarkan aku hidup di lingkungan yang bersih.  
Disambut dengan senyum cerah bahkan pulang terlambat, tidak peduli seberapa Eve homestay. Terima kasih untuk yang saya perhatikan saya paling dalam bentuk fisik yang buruk.  
Desa Burinbinsari sangat berterima kasih langit berbintang, dalam lingkungan langit malam tidak jelas.  
18 hari, terima kasih atas persahabatan dan pengalaman kencan dan pengalaman banyak.

## 光と影

国際教養学部 1 回生 黒岩 三沙樹  
(みーちゃん)



今までの夏休みの中で、こんなにも暑い夏を過ごしたことはなかった。  
わたしが国際ワークキャンプへ参加したきっかけは、大学の合格通知と一緒に入っていた一枚のIWC27期生のパンフレットを見た時のことであ

る。その時、たった一枚の紙に何か惹かれるものを感じた。しかし、その時は日本人が旅行や観光でよく訪れる「インドネシア」という国に対して、わたしには「観光が盛んな国」という先入観があり、なぜそのような国へボランティアをしに行くのか、その貧困状態を信じるができなかった。しかし、その後、実際にIWC27期生の報告会へ行き、ビデオに映る貧困状態を目にした時、やはりこれが現実なのだと知った。そして、その生活の中で生きている子どもたちの輝いている笑顔を見て、なぜ彼らは貧困・片方の親がないなどの悲しみを抱えながらも前向きで、どのような気持ちで今を生きているのだろうか、自分の境遇について何を思っているのかを知りたいと思い、この国際ワークキャンプへ参加しようと決断した。

事前研修では、インドネシアの言語、歴史や文化、宗教や習慣などを学んだ。そして、遂にわたしたちは期待と不安を胸に抱きながらインドネシアへ飛び立った。

現地では、日本とは違う異国の香りがした。わたしたちはインドネシア語でアスラマと呼ばれる児童養護施設を訪れた。児童養護施設については、日本での事前研修でも実際に足を運んで学んだことがあった。その内容は、子どもたちの半数が、虐待が原因で児童養護施設へ来ており、その中でも最も多いのが身体的虐待である。日本における児童養護施設の目的は、子どもたちを教育し、自立のための援助を行うことである。インドネシアでは、子どもたちが児童養護施設へ来る理由は片方の親がないなどが原因で起こる貧困である。今思えばとても未熟であったが、わたしは現地へ行くまでこの程度の事しか知らなかった。現地で知ったことは、子どもたちには8人程の多くの兄弟がいるが、片方の親がいなくなることや親が病気にかかることでその一家は貧困になる。そこで、児童養護施設は子どもを預かるが、その人数は一人である。インドネシアの児童養護施設の目的はその子どもを教育し、高校を卒業させて自立させることによってその一家の収入を増やし、貧困から脱出させるというものであった。そのため、子どもたちは家族と離れて施設で暮らしてい

る。わたしはそのことを知ったとき、親と離れて過ごす子どもたちのことを心の中で「かわいそう」だと思ってしまった。後になってこの考えは未熟で間違っているということに気づいたが、その時のわたしは児童養護施設がいう教育の大切さを本質まで理解していなかったのである。わたしはただ目先の事しか見ていなかった。そのことを気付かせてくれたのは、衝撃を受けたバニュポ村の訪問であった。

バニュポ村はバリ島の北西部に位置している。その地域は雨が少ないため、人々は少量の水で育つブドウを栽培して生活している。しかし、収入の7割を地主に取り上げられるため、とても貧しい生活を強いられている。わたしは今までに、学校の授業で「貧困」についてインターネットや本で調べたことがあり、貧困を分かったつもりになっていた。しかし、村に広がっていた光景にわたしは衝撃を受けた。壁のない住居、屋根のないマンディー場、ゴミの散乱、食料の少なさ、その光景は今までわたしの想像にあった「貧困」とはかけ離れた、想像もつかない程貧しい姿だった。わたしはその時、貧困を分かったつもりになっていた過去の自分に情けなさを感じ、なぜわたしたちは地球上で同じ時間を過ごしているのに、こんなにも生活状況が違うのだろうかと考えた。

加えて、わたしが衝撃を受けたのはアスラムの子どもたちとはどこか違う、子どもたちの態度や様子であった。村の子どもたちは、歯が虫歯だらけで、社会性が薄く、名前を聞いても答えようとしなかった。わたしはきっとこの子どもたちは文字を読んだり書いたりすることが出来ないのだろうと考えた。そして、文字を駆使できないことや、衛星面などの教育不足によって仕事に就くことが難しく、それは直接、貧困のスパイラルを引き起こす原因へ繋がるのだろうと強く実感した。

その時、わたしの頭の中にふとよぎる光景があった。それはアスラムで、子どもたちがわたしのしおりに自分たちの名前を書いてくれた姿であった。アスラムの子どもたちは字を書くことができる。その事を思い出した時、今まで自分の中で深い意味をなさなかった「教育が大切である。」と

いう言葉にとつともない深みを感じ、意味を知った。子どもたちにとって教育を受けることは、自分の未来を切り開いていくための手段であり、生死にも関わる必要不可欠なものである。そしてその事を知った時、わたしは以前アスラムで、親と離れて暮らす子どもたちの事を「かわいそう」だと思っていたことが間違いだったことにも気づいた。確かに、親と離れて過ごすことはとても悲しいことである。実際、わたしも、お母さんに会いたいと涙を流す子どもを見た。しかし、それは物事の表面であり、その最も深いところには貧困からの脱出のための教育の必要性があった。子どもたちはきちんと教育を受け、自分の手でお金を稼いでいけるようにならなければならない。わたしは、児童養護施設が子どもたちを預かり、教育する理由や意味を明確に知ることが出来た。

ワークキャンプ最期のエバリュエーションでは、わたしたちがアスラムの子どもたちと触れ合い、生活した中で得た改善点を提案するため、わたしたちIWC28の学生それぞれが子どもたちと真剣に向き合うことが出来た。

わたしはこの18日間を通して、日本とインドネシアでは、文化や習慣、児童養護施設の形や目的に相違はあったが、ただ一つ、子どもたちの笑顔や子どもらしさは変わらないことを実感した。運動会や交流会での楽しそうな笑顔、名前を呼んで近づいてくれる姿、わたしたちは子どもたちのためにワークや交流会などをしたが、毎日の濃い活動の中でわたしたちを癒してくれたのは子どもたちであった。わたしが国際ワークキャンプへ参加する前に知りたいと思った、「なぜ彼らは貧困・片方の親がいないなどの悲しみを抱えながらも前向きで、どのような気持ちで今を生活しているのだろうか、自分の境遇について何を思っているのかということ」に対して実際にワークキャンプへ参加して出す答えは、子どもたちは、確かに心に悲しさを持っているが、それ以上に子どもは子どもらしいままで勉強や、人間関係、衛生面について学びながら必死に毎日を生きている、ということである。「自分の境遇について何を思っているのか」というわたしの問いは、そもそもの間違いで

あった。なぜなら、子どもたちは蔑み、悲しまれるような対象ではないからである。日本の暮らしからすれば生活状態は悪いが、それを比べることは出来ない。条件が違うのである。

加えて、同じ目的を持った仲間はわたしにとってかけがえのないものであった。仲間がいたからこそ、わたしはどんな活動にも取り組むことが出来た。しかし、仲間といえども他人、自分とは考え方や感じ方、果たすべき役割の違いがよくあった。そんな時、自分はその人に対してどう対処すればよいのか、この18日間で多くのことを考えた。今までは、少々突き放していた所があったが、それらはその人ときちんと向き合っていなかったのだと知った。その人の意見を否定したり、すべてその人の意見に染まるのではなく、このような考え方や感じ方もあるのだと捉えたり、その人がそのように感じる理由や経験、役割について考えを巡らせることが大切だと感じた。そして、自分自身、他人からの視線が気になって意見を言うことが出来ない点や、自分が出来ることがあっても上手く発揮することが出来ない点など、これからの課題もはっきりと見え、克服しようと悩んだ日々だった。インドネシアへ帰ってきてからは、今までよりも、視線を気にして言えなかった事が言えるようになった。そして何より、感謝することの大切さを知った。わたしたちは、日本で何不自由ない生活を送っている。そして、家族や友達がいる。子どもたちは、今、児童養護施設で親と離れて暮らしているが、将来子どもたちが大人になった時、自分でお金を稼ぎ、子どもを養い、家族と共に暮らしていけるような未来が訪れることを願っている。国際ワークキャンプは、学生だけでなく、事前研修でインドネシアの事を教えてくれた教職員、引率教職員、ホームステイ先の家族、その他大勢の人たちがいてくれたからこそ実施することが出来、本当に感謝している。

わたしたちがこの18日間で行った護岸工事や子どもたちとの触れ合いは本当にちっぽけなものだったかもしれない。しかし、そんな小さな積み重ねがきっと未来を変えていくものになる。レジの隣に置いてある小さな募金箱さえ世界や世界中の

子どもたちと繋がる事が出来る。

インドネシアには、観光で盛んという「光」があれば、貧困格差で苦しんでいる人がいるという「影」もある。わたしはこの事実を経験から学んだ。そして、どんなものにも「光」と「影」はあり、わたしたちはその姿をしっかりと見なければならぬと思う。今回の国際ワークキャンプで、わたしたちはその「影」の中に灯る小さな「光」を増やすことができたと確信している。

## Terima kasih untuk senyum

Misaki Kuroiwa

Dia mulai orang-orang dari Yayasan yang terlibat dalam kamp kerja internasional, anak-anak staf bagaimana Asurama, dan keluarga, homestay, terima kasih banyak untuk 18 hari. Saya berpikir dan hal-hal seperti tidak mengerti, ada perjuangan dan upaya bayangan yang tidak tahu kita kepada kita bahwa Anda memiliki budaya dan Indonesia berbeda. Namun, itu mungkin bahwa kita mengirim kehidupan kasual dengan aman, penuh rasa syukur benar-benar. Ketika saya mengunjungi untuk pertama kalinya Asurama, Anda dapat berinteraksi dengan anak-anak yang tidak melalui kata-kata sangat cemas aku. Namun, anak-anak menyapa saya dengan hangat kami, saya ingat bahwa itu panas karena gembira. Tentu saja, saya bisa menyadari sekali lagi pentingnya pendidikan dan keluarga tak tergantikan kurangnya bahwa dalam interaksi dengan anak-anak, untuk belajar tentang ketidaksetaraan dan kemiskinan di Indonesia sekarang. Saya berpikir bahwa itu adalah melihat anak-anak hidup dengan serius setiap hari, saya juga memeriksa kembali lagi sendiri sekarang, dan harus ditangani keras dalam semua kegiatan seperti pertemuan pertukaran dan kerja. Setelah itu, saya bisa

mengatasi kegiatan serius dari sebelumnya. Juga, menyapa saya dengan hangat setiap hari kita pulang, keluarga homestay memberi saya kontak dengan satu sama lain seperti yang ditunjukkan pada anak-anak mereka seperti. Gambar dari keluarga sangat hangat, dan mengingat keluarganya yang berada di Jepang, saya menyadari pentingnya keluarga. Dan, itu benar-benar pendek sementara aku kuat dan aku ingin kau merasakan kehangatan keluarga ketika mereka menjadi dewasa dan anak-anak yang berada di Asurama, tapi aku punya banyak cinta, kita sebagai terbiasa keluarga nyata pikiran Anda.

18 hari, kami mampu mengatasi kamp kerja dan didukung oleh banyak orang. Apa yang kita punya adalah harta seumur hidup. Terima kasih banyak.

## ワークキャンプを通して感じた出来事

社会学部 1 回生 福島 弘大 (こうだい)



今回、わたしはこのプログラムに参加させて頂き本当にたくさんの事を体験していろいろな事に気づかされ、そして改めていかに自分が今生活している環境に不自由がなく、豊かな生活を送っているかを実感した。

その中でもわたしは次の出来事が印象に残っている。

### 《アスラマでの生活》

アスラマで暮らす子どもたちの背景には何らかの事情を抱えたことにより施設へと預けられてい

るようで、一人一人事情が異なっているようだ。

金銭上育てていける見込みがなく預けられた子どももいれば、わたしたちが訪れるつい数日前にジャングルの中で発見され言葉も喋れない状態で保護されたという子どももいた。

そのきっかけは様々であるが、アスラマで暮らしている子どもたちはみんな両親と一緒に暮らせないという環境での暮らしであった。今のわたしからすればそれはとても辛いことであり、ましてやまだ幼稚園児ほどの子どもから考えてみると自分だけが安心して甘えられる人間という存在が周りにいない、という一生のトラウマになってもおかしくない現実だった。

しかし、アスラマで子どもたちと触れ合い生活を覗いていく中でわたしが思っていたようなひどいことはなく、むしろ感動を受ける出来事ばかりであった。

アスラマで働くイヴさんは一人も欠けずに子どもたちの世話を明るく元気にしていて、子どもたちの決まった時間に食事を全員分作り食べ終わると洗うように分担し指示を出したり、怪我をして泣いた子がいれば、付きっきりで看病しその子のいる部屋まで送り届けていた。

事前研修で日本の児童養護施設へと行き、ある程度知っていたつもりでいたが、実際に子どもと大人が家族のように接しているのを見たのは初めてであった。

ある日、アスラマでの食事が終わり次の日の為に図書室を借りて長時間ミーティングを行い、既に施設の子どもたちは寝ている時間まで続いた時があった。

そして、無事にミーティングが終わった頃早くホームステイ先に帰ったわたしが一足先に帰ろうと子どもが寝ている部屋の前を通りかかった時、電気がついており、まだ眠れない子がいたのかイヴさんがベッドに腰掛けその子が眠れるようにあやしていた。

その姿は母親そのものであった。

その光景を見て事前研修でチャブレンが言っていた「無償の愛」という言葉の意味を理解できた気がした。



普段食事や勉強など全員に指導しているだけでも非常に疲れがあり、自分一人の時間も欲しいはずで一人の面倒なんてあまり気にかけていけないはずなのに、アスラマで働いていたイヴさんは子どもたちが寝静まった後も施設を巡回してそういった子がいなに見回りをしている。このことにわたしは自分自身の幼い頃を思い出して重ねていた。

気分が優れずなかなか寝付けない夜も、病気にかかり寝れない夜もわたしが眠るまでずっとそばにいてくれた。その記憶とこの光景が重なったのか、わたしは少し泣いていたのを未だに覚えている。そしてこの時「ここにいる子どもたちは母親の愛情を知って暮らしていけるのだな」と確信出来た。

#### 《ムラヤでのワーク》

基本アスラマでは交流・食事・ミーティングを行う場所でありわたしたちがインドネシアにボランティア活動として来た目的は、「ムラヤ」という中学生たちが暮らしている施設の護岸を作っていくというものだった。

ワーク初日、アスラマからトラックの後ろの荷台に28期生と引率教員の方々を乗せムラヤに向かった。すると、アスラマでもあったのだが歓迎の演奏で迎えてくれた。

ワークの具体的な作業はトラックで運ばれてきた大きな岩と砂を下した地点から外壁を作る作業地点まで運ぶという、サポートのような内容だった。

毎回すごく大きな岩が運ばれてきては、向こうの腕の太い人がハンマーで運べるサイズに割ってくれてそれをわたしたち日本の学生がリレー形式で運ぶのだが、想像していたのとは違い、かなり体力を消耗する作業であった。

暑い日差しを受けながら力仕事をしたのは初めてであり、長袖だったので尚更だった。

二・三日行き作業にも慣れた頃、ムラヤの子どもたちがわたしたちの作業を手伝ってくれて、話しながらの楽しいワークへと変わった。

もちろん会話も交わすが互いに母国語があまり伝わらないため英語でコミュニケーションをとっ

ている時、わたしがこれまで学び話していた英語とは比べものにならないほどムラヤの子どもたちが話す英語は発音も良く、より多くの単語や言葉を知っていた。

わたしはそのことにすごく恥ずかしくなり、今までの勉強では対話する知識に大いに不足していることが分かった。18歳の大学生よりも14歳の中学生の方が英語を話せるなんてとても悔しかった。これからはもっと英語を含めいろいろな学業に真面目に取り組もうと思えた。

2週間ほどのワークでは外壁は完成できず、途中段階を見てムラヤを去った。

わたしは未だに完成した状態を見たくてならないが、後日無事に完成したとの報告を受けた時は少しの達成感と大きな喜びがこみあげてきた。

#### 《バニユボ村への訪問》

インドネシアに滞在してちょうど中頃にわたしたちはアスラマにいる1人の子どもの出身地となる村を訪れることとなり、バスで1時間もしなかったと思うが移動時間はとても長く感じた。到着とともにマスクと水が手渡され、それほど酷いところに行くのかと思った。

そこには広大なブドウ園があって頭を少し下げ、獣道のような悪い足場の中を数分歩くと、レンガ造りの住宅が見えた。遠くから見ると何ら問題の無さそうに見えたが、進むに連れて足数とともに想像を超える光景がそこにあった。

どんな言葉にすればいいのか分からなかったが、「悲惨」ということが1番に頭に浮かんだ。

家はレンガの薄い家でほとんどが吹き抜けとなっており、各自の部屋にあたる所なんかはわたしの中学時代に使っていた陸上部の狭い物置と同じ見た目だった。

そして、その後に見たキッチンの光景だけは2度と忘れることはないだろう。

飲み水は錆びたドラム缶の中で白っぽく変色し虫と一緒に入っていて、鍋やコンロなんかは日本ではもう使えないほど汚れてまみれていた。

すごく失礼なのは分かっていたが数回の吐き気がした。

さらにそこではアスラマにいた子どもの兄弟姉妹がまだ78人もいて、とても多くの子どもたちがこんなところで日々をすごしていると、わたしにとって地獄のような毎日だと感じた。

しかし、そこに住んでいた子どもたちはみんな元気でカメラを向けると何の不自由も無さそうな無邪気な笑顔でピースサインをしまくるのにどうリアクションをとれば良いのか分からなかった。いくら親や兄弟、家族と共に暮らせると言えどもその生活は貧しすぎ、とても笑う余裕なんてないはずだと思う。

なぜあんなにも楽しそうに暮らせているのかまだにわたしには理解できないままである。

自転車もタイヤが曲がりポロポロ、サンダルを履いている子もいれば裸足の子どももいて、わたしたちが村を出てバスに乗るまで笑顔を絶やさず見送ってもらった。

1人の子どもの出身地に78人の兄弟がいると考えるとアスラマにいる子どもたちの兄弟は約千人を予想され、その施設が7つもあると思うと言葉が出なかった。

団長やチャブレン、向こうの偉い方々大人の人は教育が1番大切といていた。

確かに教育で立派な大人になれば収入も安定し家庭を築き貧困化は徐々になくなるだろう。

しかしそれは数年後の先のことであって、今解決できる策ではないと考える。1日でも早く貧困化を解決するには他国に状況を知ってもらい理解した上で募金活動を続けていかないと救えないと考える。その為にわたしはできる限りの人にこれを話し伝え共感を得て行動に発展してもらえればと思う。

もちろんわたし自身もこの経験を一生忘れずに生きていければと思う。

今回このワークキャンプに参加し、大きく変われることができたことに感謝します。

## Pertama terima kasih

Koudai Fukushima

Saya bisa menghargai situasi yang akan berpartisipasi dalam program ini, sadar akan banyak hal untuk mengalami berbagai hal, sekarang dia hidup lagi adalah tampaknya menghargai bagaimana saat ini.

Kehidupan di Asurama adalah sesuatu yang hangat menyenangkan.

Saya pikir ketika Anda menganggap bahwa itu tidak mungkin bahwa anak-anak tinggal bersama orang tua mereka sejak kecil begitu banyak, dan sesuatu yang tanpa imajinasi sangat bagi saya.

Tapi, anak-anak Asurama menerima cinta yang besar dan telah sangat penting bagi Hawa kami, anak-anak dari kedua sekitar sangat menyenangkan jika Anda bermain sangat baik. Lihatlah gambar, aku berharap kau dan aku ingin kau hidup untuk menjadi keluarga terhormat di masa depan.

Bekerja di Murraya adalah pekerjaan yang membawa pasir dan batu untuk membuat dinding luar.

Itu ditutupi dengan vegetasi subur pada awalnya, tetapi telah selesai secara bertahap dengan peningkatan susun hari.

Karya sore, menjadi bekerja olok berbicara anak-anak Murraya juga membantu saya.

Ini adalah dengan menggunakan bahasa Inggris ketika berbicara dengan anak-anak, tetapi lebih dari anak laki-laki 14 tahun telah berbicara tentang lebih baik dari saya 18 tahun, saya merasa malu kurangnya studi mereka sendiri serta terkejut.

Ketika saya mengunjungi desa Banyupo datang dari mengunjungi anak salah satu Asurama, tampak seperti Anda memiliki kehidupan miskin tidak berlebihan untuk mengatakan

bahwa neraka daripada dari lingkungan mereka sekarang pemandangan menyedihkan yang jujur.

Ada bersama dengan serangga di drum minum air berkarat, panci dan kompor di dapur adalah apa yang Anda tidak cukup lagi tersedia di Jepang.

Bahkan anak-anak dari rumah itu menyambut kami dengan senyum, seperti tidak merasa ketidaknyamanan.

Cacat bahwa ia merasa biasanya Nante sangat sangat kecil.

Saya berpikir bahwa itu adalah mengambil keuntungan dengan mari kita hidup dalam kehidupan masa depan pengalaman saya di kamp kerja saat ini.

Ini akan menjadi pengalaman berharga, terima kasih banyak.

## ワークキャンプを終えて

国際教養学部 1 回生 中川 翔太  
(しょうちゃん)



### <キッカケ>

このワークキャンプへの参加は海外に行きたいという単純な思いであった。正直わたしはこのワークキャンプに参加するまでインドネシアという国にはあまり興味がなくインドネシアに対する知識も全くなかった。しかし、参加したことによりわたしのインドネシアに対する思いは行く前とは正反対のものとなった。

### <事前研修>

4月の後半にIWCの選考に受かり、5月の中旬から事前研修がスタートした。わたしは記録班の班長を任されました。戸惑いはあったが、頑張ろうという気持ちの方が大きかった。

記録班と言っても最初は何をしていいかわからず、記録班という仕事が出来ていたかどうか分らなかったが去年の記録をしていた27期の人話を聞いたことにより次第に記録班として何をすればいいのかわかってきた。

合宿が始まると、交流会のためのダンスであったり、日本語の授業で必要なかるた、あいうえお表などを作る作業や日本食のミーティングなど行い、自分に足りないものやみんなで何をすべきかということをも改めて感じられる機会となった。

事前研修は短い期間ではあったが、普段よりメンバーと話す機会が増えたことにより反省点やこれから何をすべきかということなど多くのことを学ぶことが出来た。

### <アスラマ>

始めにアスラマの施設の子どもたちと触れ合った体験について述べたいと思う。アスラマの子どもたちはわたしが思っていた以上にフレンドリー精神が高く、うまく触れ合えるかどうか悩んでいたことが不思議なくらい親しむことが出来た。出会った瞬間から名前を聞かれ次に会った時には名前(しょうた)と呼んでくれた。その他にも子どもたちから積極的に手をつないでくれることや、コミュニケーションをとってくれることなどが、ありがたみを感じさせられたとともに、少しでもこの子どもたちの力になることは出来ないかと感じる良い機会となった。

### <ワーク>

次にボランティア活動のワークについて述べたいと思う。ワークキャンプでのプログラムにおいて取り組んだ内容はたくさんあったが、その中でも砂や石を運んで土手を守るための壁づくりが中心となった。このワークで感じたことはたくさん

ある。それは、一つ一つのワーク内の作業において今自分が出来ること、例えばワーク活動時に自らの意志で手伝ってくれた子どもたちとより多く接しその中で子どもたちに笑顔が届けられるようにすることや今、自分が教えられることを伝えることなど身近なことかもしれないが、それにより多くの希望を持ってもらい、今後の未来をより明るいものにするための少しでも力になれるようにしていきたいと感じるようになった。また、ワークは小刻みな休憩を挟まないといけなほどしんどいものであったが、みんなで協力し合っ一つのを完成させたことはしんどさよりもみんなで最後まで一緒に取り組めたという達成感の方が大きなものとなった。

#### <バニユボ村>

バニユボ村は他の村とは少し異なり、経済的に貧困な状態で生活していた。入浴、洗濯に使われる水は屋外に置かれ、とても清潔とは言えない。川は干上がり水がない状況であったり、ブドウの実りが乏しいのにそれを生活の資金としていたり、正直すごく悲惨な状況下で住んでいるように感じた。しかし、僕自身の考えとは逆にそこで過ごしている子どもたちからは笑顔が見られ、改めて自分の生活を見直そうと思えるきっかけが出来たとともに今後こう言った子どもたちに少しでも何か役に立てることをしたいと強く思った。

#### <交流会>

子どもたちと桃山大学生が主体となる交流会では、歌やダンスを披露し、現地の方々や子どもたちに楽しんでもらった。その他にも、ホームステイの方々やアスラマの子どもたち、現地の方々にカレーを振るまった。日本の運動会のようなイベントも行い、現地の子と交流を深めた。運動会では、日本の伝統的な遊びを数多く子どもたちに知ってほしいというスィクラマさんの要望から、鬼ごっこ、徒競走、しっぽとり、二人三脚、綱引き、むかで競走、フットサルなど様々なプログラムを行った。どれも子どもたちにはとても好評で企画したわたしたちも企画してよかったと思

えるようなくらい喜んでくれたので大変うれしく思った。

#### <日本語授業>

日本語の授業では、小学校、中学校、高校に訪問し、日本語の授業を通して学生たちと交流を深めあった。日本語を知ってもらい、そのうえで日本語を使って楽しんでもらえるようにたくさんのことを行った。まず始めは、インドネシアに行くまでにIWCのメンバー皆で作成した、あいうえお表を使って日本語を発音してもらい、それを行った上で自分の名前をひらがなで書けるようにしてもらった。次に学生たちに盛り上がりてもらえるようにかるた、フルーツバスケット、告白ゲームなど今までに行かれたIWCのメンバーの情報を参考に日本の伝統的なゲームをいくつか行った。日本語班と同じグループとなったインドネシア学生には、前日のミーティングで日本の学生が英語で言ったことをインドネシア語に訳す作業してもらい、子どもたちに、より分かりやすく理解してもらうための手伝いをしてもらった。みんなの協力もあり、学生たちには楽しみながら日本語を覚えてもらい、わたし自身にとっても携わってくれた方々にとってもすごく良いプログラムになったと思う。

#### <エヴァリュエーション>

報告会では、現地の子と18歳になって以降、自立して生活出来るようにするために、それまでにすべき点や現在の生活水準（クオリティ）を落とさないためにすべき点、改善点を報告しあった。現地での経験を元にしたことや現地のために出来ることをインドネシアの学生、日本の学生が互いに意見を出し合いその中で発表し合った。これらの問題は他人事ではなく、まるで自分たちが置かれている状況のように考えたことにより、現地の職員たちが納得してもらえるような案を出すことが出来た。

#### <進路への影響と今後>

進路への影響はかなり大きなものとなった。今

までは、欧米に強く興味があり、アジア圏のことはそれほど考えていなかった。しかし、今回のプログラムを通して、実際に現地の人々と触れ合ったことにより、今後もアジア圏に携わってきたいと思えるようになった。また、コミュニケーションを図る中で、現地言葉はもちろん英語の重要性を改めて感じた。仕事においても、今までは海外勤務には消極的な気持ちの方が強かったが、このワークキャンプを終えてみて、海外での仕事もやってみたいと思えるようになった。これらのことから、進路を決める上で、経験をするのとはしないのでは、方向性が大きく異なるので、出来るだけたくさん経験をして進路を決めることがとても大切であると感じた。

このワークキャンプで学ぶことは非常に多く、自らの人生を一転させるような大きな体験となった。日本の学生はもちろん、インドネシアの学生とも仲良くなり、日本だけでなく世界中の人々ともっと関係を深めたいと思う良いきっかけとなった。何かを取り組むというのにはそれだけの覚悟や勇気があるが、達成した時の喜びや取り組んだことに対する経験は忘れられないものとなる。何事にも失敗を恐れず、果敢に取り組むことの重要性を改めて感じた。この経験を忘れることなく、これからの人生において役立てるようにしていきたいと思う。

## Terimakasih

Syota Nakagawa

Saya bersyukur jadi bisa belajar banyak bahwa Anda tidak belajar di Jepang dan juga, saya berpikir bahwa itu senang dapat berpartisipasi dalam sebuah kamp kerja di Indonesia karena memiliki IWC28 lulus kelas saat ini. Itu tidak mungkin untuk tidak pernah mengalami waktu tersebut jika dimasukkan ke dalam Jepang. Aku diizinkan untuk berpartisipasi dalam tema kegiatan sukarela, tetapi untuk mendapatkan

saya sendiri itu sangat besar. Dan saya merasa terhormat untuk memiliki sangat saya bahwa adalah mungkin untuk bekerja sama dengan Indonesia melalui relawan. Hal ini dianggap sangat Na aku bisa bekerja sama dengan Indonesia dalam beberapa bentuk dan juga, bukannya berakhir dengan hanya kegiatan ini. Terima kasih dan memiliki kesempatan.

Memiliki kontak dengan lembut sangat penuh perhatian dari hari pertama kepada orang-orang dari homestay, aku merasa kehangatan, seperti orang tua seperti. Anda dapat memberikan kami dengan minuman dan sarapan pagi setiap hari, Anda dapat saya mencuci cucian dari kita, itu sangat membantu.

Kami juga merasa menghadapi dengan anak-anak Asurama dan bisa menemukan yang lebih baik itu pengalaman yang saya tidak bisa dilupakan seumur hidup. Aku merasa waktu untuk berinteraksi dengan anak-anak tidak lama, tetapi tidak pernah telah mampu untuk menghabiskan waktu sangat banyak.

Kami berharap untuk melihat semua orang dan juga sosok yang sedikit lebih besar pada saat yang sama saya pikir mahasiswa Indonesia, saya ingin menghargai seumur hidup pertemuan ini juga orang-orang yang terlibat melalui kamp kerja ini untuk bertahan. Saya sangat berterima kasih kepada orang-orang yang memberi saya terlibat. Terima kasih banyak.

## 忘れられない体験

法学部 1回生 丸茂 太暉 (マルモ)



### <はじめに>

わたしがこの国際ワークキャンプ(以下IWC)に参加しようと思ったのは、大学に入ったのだから今しか体験できないことをしておかないと後悔すると思ったのと、どこか海外に行って世界を見てみたいと思いIWCに参加しました。

### <バリ島に行くまで>

五月の初めから活動が始まりました。週2回月曜日と木曜日の5限にインドネシア語やインドネシアの文化や歴史などを学びました。わたしは文化や歴史の話の聞いたり学んだりするのは好きなのですが、言語の勉強は好きではなくあまりインドネシア語の勉強は熱心にしなかったのもう少し真剣にやれば良かったなと思っています。出発が近くなるとインドネシアで行う交流会のダンスや募金活動を昼休みに行き、夏休みには合宿をしました。わたしはあまりダンスが上手ではなく、もっと練習を頑張っておけば良かったなと思っています。募金活動は今までしたことがなくてとても緊張し、目立ったりして恥ずかしかったけれど募金活動の難しさを知ることが出来、今までは募金箱にお金を入れたことがなかったのですが、これからは入れていこうと思いました。夏休みの合宿では交流会の歌やダンスの練習をしたり、現地の学校を訪問して行う、日本語の授業のプログラムの流れを確認したりしました。合宿を行うと、もうすぐ出発するのかと実感しました。

出発が近くなるにつれてホームステイ先でやってくれるのか、インドネシア語が話せないのでは話出来るのか、自分はバリ島に行って何が出来る

のか、不安に思いつつも出発しました。

### <バリ島>

いざ空港に到着すると、日本と比較して涼しく、匂いも違っていました。バスに乗って移動する時も景色に驚いたり、バイクの3人、4人乗りをしているのを見たりして、日本ではありえないことだと思い海外に来たと感じました。インドネシアの人々はみんなフレンドリーで手を振ると振りかえてくれて日本との違いを感じる事が出来ました。

わたしは、辛い物が苦手なインドネシアでたくさんご飯を食べていけるのか心配でしたが、辛くはなく、とても美味しかったです。一番辛かったのは風呂でした。

インドネシアでは風呂のことをマンディと呼んでお湯がでない中、水で体を洗うのはお湯に慣れているわたしにとってはとてもつらかったです。

初日はホテルでインドネシア学生と顔合わせをしました。実際に会ってみるとあまり話すことが出来ませんでした。インドネシア学生はとても英語が出来て日本語を話せる子もいて大変驚きました。

翌日の朝にプリンビンサリ村にむけて出発し、バスで4時間かけて向かいました。プリンビンサリ村は田舎で、店が少なく、道がガタガタだったり、犬や鶏を放し飼いでいたり、子どもがバイクを乗っていたりして、日本とは全然違うショックを受けました。アスラマに着くと、子どもたちが伝統的な民族衣装で楽器を演奏してくれました。そして、子どもたちにホームステイ先に連れてってもらいました。はじめはホームステイ先がどんなのか全然分からないので不安があったが、想像以上に綺麗で、設備も整っていて、部屋も住みやすそうな所で安心しました。ホームステイ先に行って話そうと思っていた言葉はいざ話そうとすると全く話すことが出来ませんでした。わたしのホームステイ先の人はあまり家に居なかったりして話す機会が少なかったのですが、いつも出かける時に笑顔で手を振ってくれたり、毎朝紅茶を飲む準備をしてくれたり、わたしたちが

持っていったお土産を食べて感想を言ってくれたり、お菓子などをくれてこれはインドネシア語では何と言うのか日本語ではどう言うのか、を聞いてくれたりして言葉が分からないわたしたちに分かるように簡単な言葉で話してくれてとてもありがたく、暖かさを感じました。特に印象に残っているのがわたしはインドネシアにいる間に誕生日を迎え、イブ達が歌を歌って祝ってくれたのがとても嬉しかったです。だからこそ話せる時にもう少しいろんな話をしてあげれば良かったなと思います。

翌日からワークが始まりました。ワークの内容は第5アスラマのあるムラヤで、護岸工事のための石や土を運ぶことでした。日差しがあり暑く、石が重く辛いものでしたが、IWCのメンバーと話しながらしたり、ムラヤの子どもたちが手伝ってくれたりしてくれたおかげで楽しく働くことができました。わたしたちが行ったワークがムラヤの子どもたちの役に立ってくれたらうれしいです。

インドネシアに着いてすぐに日本語の授業がありました。前日にミーティングを行い、インドネシア学生にゲームの内容説明などをしました。

日本語の授業はインドネシアにいる間に3回しました。最初の高校の授業では初めての授業をするので不安でいっぱいでした。

高校生はわたしたちが思っていた以上に日本語が出来て、時間が余りそうになったが、ゲームの時間を延長したりして乗り切ることが出来ました。わたしは英語をあまり話せませんでした。インドネシア学生のセムが通訳をして助けてくれたおかげでうまくいったと感じています。

次に中学校と小学校に分かれて訪問しました。わたしは中学校に訪問しました。そこでは最初に校長先生と話す時間があり、中学校についての話を聞くことが出来、中学校はまだまだ設備が整っていなかったり、インドネシアでは本は高く図書館も本が少なくまだまだ改善するべきことがたくさんあることを聞くことが出来ました。授業ではわたしたちの班はインドネシア学生がいないという不安がある中始まりましたが、わたしたちが

授業したのは中学3年生だったため英語が上手で隊長が英語で話したことが通じて楽しくゲームが出来、無事進行することが出来ました。

最後は看護学校を訪問しました。看護学校はほとんどが女の子であったのでゲームの内容を変えたりしましたが、3回目の授業だったのでスムーズに授業をすることが出来ました。どこの学校に行っても子どもたちは予想以上に熱心に授業に参加してくれてとても楽しそうにしていました。そして授業が終わると子どもたちはわたしたちのところに来て写真を撮ってくれたりしてわたしたちを楽しませてくれました。

インドネシアではいくつかのアスラマを訪れ、ほとんどをプリンビンサリのアスラマで過ごしました。アスラマに滞在しているとイメージと違って驚かされるところがたくさんあったり、改善したほうが良いと思うところもいろいろとありました。アスラマの子どもたちは人見知りなどせず笑顔でたくさん話しかけてくれました。わたしが理解出来るようにゆっくり話してくれたりして、とても優しく子どもたちのおかげで楽しく過ごすことが出来ました。

一番印象に残っているのはわたしは交流班だったので交流会は気合いを入れて臨みました。わたしたちは力を出し切って頑張りました。子どもたちがとても楽しそうにしているのを見て今まで頑張ってきて良かったと思ひ達成感でいっぱいになりました。この交流会でアスラマの子どもたちともっと仲良くなれたと思います。

#### <最後に>

この18日間は、行く前は長いなと思っていましたが、実際に行ってみるとすぐ過ぎてしまい、帰る頃にはもっといたいと思いました。初めて体験することや見るものなど、日本では体験することが出来ないことでいっぱいの18日間でした。わたしはこのIWC28のメンバーとして参加することができて良かったと思います。そして日本での自分がどんなに恵まれた生活を送っているのかを知ることができ、このIWCで体験したことを友達など周りの人たちに伝え、自分にできることを探

していきたいです。最後にこのIWCを支えてくださったスタッフの方々、そして5月から一緒に頑張ってきたIWC28のメンバーに感謝でいっぱいです。みなさん本当にありがとうございました。

## Terima kasih

Taiki Marumo

Saya sangat senang untuk berpartisipasi dalam IWC. Aku penuh cemas Sebelum memulai. Tapi kecemasan tidak lagi jika Mire kunjungan. Masyarakat Indonesia yang sangat baik ramah. Segala sesuatu yang segar dan apa yang Anda lihat. Tapi ada juga terkejut dengan perbedaan budaya. Dan saya menyadari bahwa itu berbeda dari Jepang.

Anak-anak Asurama memberi saya lembut sangat mudah. Anda mengatakan kepada kami perlahan-lahan ketika Anda berbicara kepada kita Anda tidak tahu banyak bahasa Inggris, juga. Saya pikir saya harus belajar bahasa Inggris lebih pada waktu itu. Itu sangat menyenangkan waktu masuk dan anak-anak. Orang homestay memberi saya sangat baik. Anda mengatakan kepada kami dalam kata-kata yang kita dapat dengan mudah memahami memahami. Anda dapat me mengeluarkan air panas untuk minum teh setiap pagi, Anda dapat memberitahu dia tayangan Anda permen yang kami pergi dengan, ini Jepang atau memberitahu saya bagaimana saya harus mengatakan itu dalam bahasa Indonesia dengan mengeluarkan permen dalam itu saya dan mendengar bagaimana mereka katakan. Itu sangat bersyukur bagi kita yang tidak tahu apa yang harus dilakukan pembicaraan. Saya bisa merasakan kehangatan dari masyarakat Indonesia.

Pengalaman di IWC ini menjadi apa yang

tidak bisa dilupakan hidup. Saya menyadari ia hidup diberkati bagaimana. Itu adalah perjalanan yang pemikiran apa yang bisa menjadi diriku sendiri. Aku akan pergi terlalu cepat 18 hari yang saya habiskan di Indonesia. Saya berpikir bahwa itu adalah keinginan Mottoi Pada saat Anda pulang. Itu juga sekarang sebuah perjalanan yang saya pikir saya ingin pergi. Kami ingin mengucapkan terima kasih semua orang yang membantu saya.

Terima kasih semua!

## インドネシアで変わったもの

経営学部 1 回生 村上 大地 (むー)



今回、わたしは桃山学院大学の短期海外研修プログラムである「インターナショナルワークキャンプ (IWC)」に参加しました。

この報告書ではワークキャンプの体験について書いていきます。

### <初めに>

報告書を書くにあたってまずわたしがこのワークキャンプに参加した理由を書きたいです。わたしは入学して最初の1か月特にすることもなく時間を浪費していました。そんな時にこのキャンプのパワーポイントを見せてもらい今の退屈で無駄な日常を変えたいという軽い気持ちで、しかも募集の締め切りギリギリだったので迷う暇もなくこのキャンプに参加しました。

### <インドネシア学生との交流>

ワークキャンプ初日に合流し最終日、インドネ



シアから出国するまでインドネシア学生にはたくさんお世話になりました。日本語の授業をする際にもインドネシア学生に英語で伝え、それをインドネシア学生が子どもたちに翻訳してくれるという形でした。運動会を運営した時も現地のスタッフの方にギリギリで決めたプランを説明してくれていました。間違いなくこのワークキャンプはインドネシア学生無しでは行うことが出来なかったと思いました。同時に自分の言語に関しての未熟さもよく見えてきました。事前準備でインドネシア語の授業を受けていたが、準備不足で現地では全く役に立たず、つたない英語とジェスチャーでなんとかコミュニケーションを取っているのが現状でした。インドネシア語はともかくとして英語くらいはまともに話せるようになりたいとこのワークキャンプで思い始めました。

#### <アスラマについて>

インドネシアに行く前の事前研修などで子どもたちを見てかわいそうと思うことは間違っていると先生方に言われ思わないようにしていました。でも実際に見たら不便だとか、かわいそうだとかそういう感情が溢れてきました。違いを探したらたくさん出てきました。日本にないものばかりを見て子どもたちの幸せ、不幸せを勝手に心の中で決めつけていました。ワークキャンプ期間中、子どもたちを見てその考えが間違っていると実感出来ました。子どもたちはみんなたくましかったので僕も対等な形で支援していきたい、そのためにもこの報告書でアスラマのことについて伝えたいと思いました。

わたしたちはプリンピンサリにいる間の半分をアスラマ（日本で言うところの児童養護施設）で過ごしていました。アスラマはバりに全部で7か所建てられていてアスラマの子どもたちは親のいない子もいれば、経済的に学校に通わせてあげられない家庭の子、兄弟別々のアスラマに入っているなど多様な子どもたちが暮らしていました。

アスラマ内の子ども部屋は男子棟と女子棟に分かれ、一部屋に4人～6人程度で共同生活を行っていました。食事は広間で食べ、また広間で勉強

スペースとして兼用していました。その他に図書館やバスケットコートなどの遊技場がありました。

日本もインドネシアも同じだと思うのだが、児童養護施設は共同生活という形で生活しなければいけなく、そのため1人になる時間を作ることは難しく、そのための空間もほとんど用意されていませんでした。

勉強環境で言えば広間で小学生～高校生まで80人以上が一緒に勉強していました。個人または少人数で勉強するためのスペースはなく、増設も難しいと思いました。図書館にある本はインドネシア語で書かれていなく、ほとんどが英語で書かれている本で子どもたちが完璧に読むことは出来ませんでした。衛生面、安全面でいえばアスラマ内にはゴミが多く散らばっていました。普段は子どもたちが掃除し、目につくような大きなゴミは掃除され、あるのは目を凝らさなければ見れないような小さなゴミしかありませんでした。しかし、問題なのはその小さなゴミに紛れて画鋲やガラスの破片などが落ちていることでした。さらに、煙草の吸殻も至る所に捨てられていました。子どもたちが生活していく上で環境が良いとは言えません。以上の問題はこれからのアスラマで改善されていく必要があると考えました。

#### <バニユポ村について>

ワークキャンプ期間中に一度バニユポ村に訪問しました。

アスラマにはバニユポ村の出身の子も何人か暮らしていました。

バニユポ村へ行くまでの道は道と呼べるようなものではなく、ブドウ畑の間を突っ切るだけという整備もされていない道でした。

バニユポ村では水道設備が乏しく、マンディは屋外で行っていました。マンディや洗濯に使われている水は屋根も無い所に溜められているので雨水やゴミが入り、川も濁水し、水はとても貴重とされていました。そのためか子どもたちをみても服の汚れが目立ちました。パリで見えてきた地域の中でもゴミが多く、家のすぐそばに牛や豚などの

家畜が飼われ、衛生環境は良くありませんでした。

アスラマに子どもを預けているバニユポ村の家庭は経済的に豊かでなく、かつつんさん（隊長）は国を良くするためにはどうしても教育に力を入れる必要があると教えてくれました。それはバニユポ村でも言えることでした。貧困家庭では子どもの教育に力を入れ、子どもが成長し良い職に就く、そしてその子どもにも同じように教育に力を入れ、このサイクルを続けることにより貧困から抜け出そうとしていました。

これが今のバニユポ村の状況であり、おそらくこのことは世界の貧困地域にも当てはまることだといえます。

#### <IWCでの恩恵>

IWCに参加し得られたものが二つあり、それはわたしにとってとても大きなものとなりました。

一つ目は入学当初の自分からは想像できないくらいに積極的になれていたことです。しおりの作業も最初は興味本位の軽い気持ちでやり始め、めっちゃくちゃキツイと思い始めたころには数週間前の自分にイライラしてしまったりとうまくいかない時がありました。でもみんなのおかげでしおりが完成し、終わったあたりから考え方が変わってきました。もっといろんなことにチャレンジしたいという考え方が自分の中で膨らんできました。「迷ってやらなかった時の後悔は一生残る」というある先輩のアドバイスのおかげで今のところは後悔をすることが減っています。

二つ目は視野が広がったことです。事前研修で募金活動を行ったのだが、ほとんどの人が素通りしていくため中々精神的に辛い仕事ではあったが、それでも募金してくれる人、頑張ると声をかけてくれる人が中にはいたので最後まで続けることが出来ました。今までは募金に関心なんて全くなく、駅前でもやっても素通りしていました。自分が募金してもらおう立場になってみると募金活動をする側の気持ちがよく分かりました。インドネシアに行ってからでは運動会の運営や日本語

の授業、交流会、日本食の会食などいろんなことをやって経験することで理解し、人の立場になって発言することが出来るようになりました。そう思うといろんなことを経験している人は否定から決して入っていないことに気づきました。だからこれからもワークキャンプのような経験したことのないものにチャレンジして視野を広げたいです。

こんな風に思えるようになっただけでもIWCに参加出来て本当に良かったと思います。

僕がこんなに自由に学ぶことが出来たのも教職員の方々、隊長、副隊長含めたメンバーの方々のおかげでした。

ありがとうございました。

## Jangan lupa

Daichi Murakami

Semua orang mahasiswa Indonesia, itu sorakan untuk kebaikan kamp kerja kerja untuk saat ini.

Itu tidak berjalan seperti yang direncanakan sebentar di Indonesia. Ada banyak perubahan mendadak dan kesulitan. Tapi saya bisa melakukan semua halus. Saya pikir itu lebih besar daripada apa yang interpretasi mahasiswa Indonesia. Aku berjalan baik berkat saya memiliki mahasiswa dan pengoperasian bertemu atletik dan pelajaran Jepang Indonesia. Dan diterjemahkan ke dalam bahasa Indonesia sampai hari itu mahasiswa Jepang dilaporkan dalam bahasa Inggris pada pertemuan akhir dalam perubahan menit terakhir, kami mampu sukses kamp kerja ini berkat saya memberitahu orang-orang staf dan lokal anak. Mari kita mengobrol di Warung sambil melihat kamp kerja junior tahun

Anggota staf Alama, menyambut kami dengan

senang hati dalam pertemuan pertukaran dan ekspresi Irimura, dan beras lezat untuk itu yang terbaik. Itu sangat membantu saya bergerak lebih dari orang lain dalam acara-acara seperti rapat pertukaran dan atletik bertemu. Anggota keluarga tuan rumah, Terima kasih untuk saya disambut asing kami. Itu sangat bagus untuk saya berbicara setiap malam tanpa bahkan sangat baik untuk kita yang tidak berbicara sama sekali Indonesia. Cuisine of Eve memberi saya sebelum pergi ke Asurama, maka buah di kebun, lezat benar-benar semua. Seperti binatang juga membantu untuk meminta mereka untuk melakukan menit hari kami. Saya terima kasih lagi pada saat itu karena saya pikir saya pergi setahun. Itu terbaik untuk bertemu dengan Anda pada orang-orang kamp kerja Indonesia di akhir. Terima kasih banyak.

## インドネシアで学び、感じ、考えたこと

社会学部 1 回生 森 健 (もりけん)



インドネシアのワークキャンプでわたしはたくさんさんのことを学び、様々なことを感じ、悩み、助けられた。今回インドネシアに行かせていただいたことが非常に貴重な経験として、わたしの中で残っていくと思った。インドネシアのさまざまな経験の中で報告したいことを五つ考えた。それは、アスラマ（活動場所の名称）で感じたこと・ワークで思ったこと・ホームステイ先で生活したこと・子どもたちの出身村に行ったこと・エヴァリュエーション（現地の生活改善策）だ。

## アスラマについて

わたしたちはインドネシアに着いてから二日目にブリピンサリ村にあるアスラマを訪れた。入村式では子どもたちや職員さんたちが盛大に迎えてくれた。インドネシアの民族舞踊や演奏を聞かせていただいた。わたしたちは子どもたちに囲まれるように座り、わたしたちをにこやかな笑顔で見つめていた。しかし、わたしは緊張しており話しかけることが出来なかったが勇気を出し話しかけると、明るい笑顔で反応してくれた。その後は仲良く接するまで時間は必要なかった。インドネシアの子どもたちは大変元気で、笑顔が多く年齢の割に、しっかりした顔立ちが多いように思えた。しかし、子どもたちには各々抱えている悩みがあった。子どもたちから言葉に出して伝える子もいれば、黙っている子もいた。子どもたち全員のアスラマに来た理由を聞いたわけではないが、職員さんや先生から来た理由を聞いた時は驚いた。日本とインドネシアは文化や経済面で違う面があるためか、日本では考えにくい理由だった。表情や感情に出してはいなかったが、あの年齢で現実を受け止め、向き合っている子どもたちに驚いた。また、子どもたちに何を言えば良いのか分からない自分がいた。わたしたちは、子どもたちに少しでも明るく過ごしてほしいという気持ちから運動会をすることを企画した。今までは種目を行う側だったが、初めて企画する側となった。今までこのような経験がなかったため、どのようにすれば良いのか分からなかったが、メンバー同士が運動会でどのような種目をするのか、時間の割り振りを何度も話し合い、シミュレーションをした。今まで運営や企画をしたことはなく、こんなにも大変な仕事だとは知らなかった。運動会当日、予定通りの時間に始まり最初は不安があったが、上手く臨機応変に対応することが出来た。日本の運動会種目では有名な競技（二人三脚、綱引き等）だがインドネシアでは珍しかったようで、子どもたちは興味津々であり大変喜んでいった。企画と運営するのは大変であったが、わたしたちが考え、計画し運営することが出来、良い経験となった。

## ワークショップについて

国際ワークボランティアとして第二アスラマで護岸工事をした。雨期の季節の雨により、土地が削れ、崩れるため対策として壁を作った。現地には、日本にあるような機械がないため、壁作りには必要な砂と岩の運搬をわたしたちは手作業で運んだ。手作業であったため最初は男子が岩を持ち運び、女子は砂運びをした。しかし、効率の良さを求め男女混合のパケツリレーで取り組み始めた。また現地の人々や中学生も手伝ってくださり、よりスムーズに取り組むことが出来た。機械を使わず手作業で取り組むことが、こんなにも大変だとは知らなかった。細かく休憩を取り、ワークを取り組んでいたが、わたしは、慣れない気候のせいか体調を崩してしまった。自己管理不足により教職員の方々、メンバーに心配や負担をかけてしまい申し訳なく思った。行動を共にし、同じ取り組みをすることで、日に日にメンバー同士の距離感が縮まっていった。他のメンバーが体調を崩した際にも気にかけることが出来るようになった。みんなで協力し支え合いながらワークに取り組むことが出来たが、壁を全て完成することが出来なかった。日本に帰国してわたしの中で一番悔やむことであった。もっと動けて取り組むことが出来たのではないかと、もう少し休憩時間を短縮をし取り組むことが出来たのではないかと、何度も思い返し悔やんだ。

## ホームステイについて

インドネシアでホームステイをした。今まで海外に行ったことがなかったため、当然ホームステイ先も初めてだった。わたしは日本人と二人でホームステイすることになった。ホームステイの家族では、優しい母とたくましい父がおり、わたしたちを歓迎してくれた。残念ながらわたしたちはほとんどインドネシア語を話すことが出来なかったため、うまくコミュニケーションを取ることが出来なかった。しかし、ジェスチャーやぎこちない英語で何とかやり取りをしながらの会話を成立させた。現地の生活は日本と違う所がたくさんあり戸惑う所がいくつかあった。日本のようなお風

呂はなく水浴びで体を洗ったり、トイレも和式で便を終えた後、勺を使い水を注ぐような所であった。生活リズムも日本と違い、インドネシアでは早寝早起きであった。わたしたちは日本での生活リズムに慣れ親しんでいるため、なかなか慣れなかった。毎朝六時から母が紅茶とバナナをくださった。毎日の反省会が終わり、ホームステイ先に帰宅すると両親は寝ていたが、わざわざ起きてわたしたちの容体を気にかけてくれた。生活面で特にトラブルもなく過ごすことが出来たのは、ホームステイ先の両親が親切で気を使ってくれたからだ。ホームステイ先を出発する日は大変名残り惜しく悲しいものであった。わたしたちは日本に帰国してからもホームステイ先の両親に対する想いは変わらず、忘れることはない。何年先かは分からないが、もう一度訪れたいと思う。その時には今よりもインドネシア語や英語が堪能に話せるようになりたいと思う。ホームステイ先でのコミュニケーションに関わらず、インドネシアにいる間コミュニケーションを取りたくても取れず、言語の大切さを痛感した。

## 子どもたちの出身村について

わたしたちはある子どもの出身地であるパニユポ村という所に行った。その村に行く前に写真を見たり話を聞いてイメージをしていたが、実際に行ってみると自分が想像していた景色とは違い、パニユポ村ではブドウ畑が広がっており、ブドウ畑の下には牛・豚・鳥が放牧されていた。村の人々の生活状態はホームステイ先の家とは一風違った生活風景であった。なぜ、ブドウ畑があるのか聞いてみると、水が少なくても育つからであるそうだ。その村のお風呂やトイレは野外にあり、決して衛生的に良いとは言えない部分があった。カメラで写真を取めるのに抵抗した自分がいた。このようなことを思うことが間違っているのかもしれない。しかし、この現実をしっかりと受け止めて自分たちが手伝えること、現地の人々の負担をどのように軽減できることを長く継続するべきだと感じた。

## エヴァリュエーションについて

エヴァリュエーションをするために、アスラマで自分たちが感じ、思ったことでアスラマの生活水準を変えずに改善出来る方法と子どもたちが自立するための支援の方法をメンバー各々で考え、案を出し合いまとめた。多くの案が出て発表されたが、費用の関係上実現が難しくなかなか採用されなかった。いくつか採用された案をスイクラマさんたち（ウィディア・アシ財団）に伝えるためにメンバー同士で割り振りをし、英語の翻訳をした。スムーズに作業が終わることが出来なかったが、この時もメンバー同士で協力し合うことが出来た。わたしたちが出した案が未来のアスラマや子どもたちにとって何らかのきっかけや良い方向に繋がっていけば嬉しく思う。

日本にいる間インドネシア18日間の滞在が長いように感じていた。インドネシアに行ってから、一日一日が短く過ぎていくように感じ、想像以上に早く18日間の過ぎた。インドネシアを訪れたことにより、日本では経験出来ないことをたくさんすることができた。わたしの中で今まで海外に行くことに興味関心はほとんどなかったが、インドネシアに行ったことにより、よりインドネシアの風俗・習慣を知りたいと思う気持ちが芽生えた。また、コミュニケーションを取るために英語の重要性を痛感した。インドネシアに行ったことによりわたしの中で新たな目標が生まれた。もし機会があれば別の国に行き、新たな発見をしたいと思う。このIWC (International work camp) のメンバーはわたしにとって、かけがえのないメンバーとなった。困難な時に支え合い、協力し合い乗り越えることもでき、お互いが尊重することのできるメンバーである。インドネシアの報告会が終えても交流をし、互いに刺激し合って人間性を高めていきたい。海外に行くことにより、今まで凝り固まっていた価値観や考え方、物事のとらえ方が少し変わったと思う。このインドネシアでの体験は貴重な思い出であり、今後の大きな糧となるであろう。インドネシアに行かせていただいたことに感謝する。

## Membuat saya tembul

Takeshi Mori

Pengalaman di Indonesia yang tidak dapat mengalami, pengalaman di Japan. Tetap ini 18 hari, mengajakaan saya banyak hal. Anak-anak dan masyarakat local dibanjiri dengan senyum, memberi saya kontak yang sangat raman. kami Jepang atau meminta bersedia untuk anak-anak, seperti yang diberikan sehat bahkan sedikit, saya memiliki berbagai perencanaan. Tapi anak-anak telah dilakukan selama senyum sehat kita benar-benar. Senyum Murni, mata yang indah anak-anak bersinar.

Keluarga Homestay adalah seorang ayah kekar dan ibu lembut. Orang tua telah menggunakan pikiran Anda kepada kami selalu. Aku punya saya sangat khawatir ketika aku putus kondisi fisik. Setiap, yang sudah menyiapkan pisang dan the untuk kami. Aku bahkan tidak bisa Bahasa Indonesia Bahasa Inggris percakapan hamper. Itu tidak dapat berkomunikasi dengan anak-anak dan orang tua untuk mereka. Saya sangat menyadari pentingnya Bahasa.

Perasaan untuk orang tua tidak berubah bahkan ketika ia kembali ke Itu adalah keluarga jenis lembut benar-benar. Jangan tersenyum dan ekspresi wajah anak-anak juga lupa. Saya tidak tahu kapan, tapi aku ingin melihat orang tua dan anak-anak untuk pergi ke Indonesia lagi. Dan komengambil komunikasi dengan benar, Anda ingin menghubungi dengan apa selanjutnya. Itu mungkin bahwa anggota Jepang usaha yang sama setiap hari, untuk memperdalm Naka. Anggota ini juga menjadi tak tergantikan bagi saya.

Terima kasih untuk membiarkan saya pergi ke Indonesia. !

## 《参加学生のレポート》

Nonelry rossya ndriani



Moshi moshi! I was so glad because I have met you all Japanese Students in IWC 28th. I had many experience when I was there. And I felt lucky because I could joined in this Work Camp twice. You all were so kind and worked so hard. Met the new friends are my happiness and you made my days was very happy there. I was not felt sad everyday. Because you all always amused me with your own way. I learned many things, for example care each other, how to help everyone when they had a difficult thing, how to adapted myself and more friendly with everyone. Now I still remember the time when you came and met us for the first time, the time we started to talked with Japanese students with our poor Japanese language, and the time when we started to worked hard together everyday.

When we prepared for Japanese class at night, I saw your face like afraid that tomorrow will be failed. But we still tried and worked hard. And finally all Japanese class had succeeded. Also work time in Melaya. We tried the best thing we had, like energy, mind, and our time. Although I felt tired, but when I was with you all, my tired has gone away. The children in Melaya also helped us cheerfully. So it made us happy and had more spirit too. I also love when we made Japanese meal. It was very interested and I was very excited about that,

because we could cooked together. All of that still on my mind. I am grateful because I joined this Work Camp, I have a kind couple Bapak and Ibu who always helped and gave the best service ever for me and Mio when we stayed there, also I have you all Japanese friends. From you, I could learned new Japanese language and you always taught me how to spoke Japanese language well.

Everyday in Blimbingsari were so precious for me. Because everyday I had many lessons and more happiness from you. I guess I will never forget everything happened there with you, even the small things. May be I cannot tell all of my feelings here, because words are not enough to describe every precious things in my heart and my mind. I was very excited and really want to go back to our first met. Actually I don't want to finish this Work Camp. Because I still want to be with you and spend many time with you all. Time goes so fast. But good things will never go.

Special thanks to Bapak and Ibu, in our weakness Bapak and Ibu always understand us. When we did something wrong, Bapak and Ibu give us an adviced. Bapak and Ibu always worried us when everything happened with us. They are our second parents until now. I and Mio will never forget you, Bapak and Ibu. And second, thanks to Mio, my best partner ever and my sister. I never felt so closed with my partner like in this IWC 28th. We just needed one day to matched ourself and became so closed like this. Mio were so friendly and lovable. Even now, she is still friendly and love me, nothing is changing from her. Although our first met was worried about how we communicated each others because of our different language. Everyday we spent together,

even it was a bad things or good things, but we always smile and cheerful. Thanks to you all my family.

This is my best experience and I never regret to joined this IWC 28th. I really miss you Mio, Hiroo, Takeshi, Kodai, Tomoya, Kouta, Misaki, Katsuya, Daichi, Remi, Shouta, Taiki, Kanako, Shuhei, and Kaoru. I hope we will never lost contact each others. And also I hope we could meet again someday. I still wait the right time we could meet again. Thank you for your kindness, thank you for your hard worked, thank you for your helped, and thank you for many things you had given. I believe, our last day is not the last time we meet. May God always bless you all. Minna san ganbarimasho! Sayounara!

#### Corsellia Alpha Victoria Tentua



Watashi wa Lia desu. I'm 21 years old. I am representative of DhyanaPura University. Such a great experience to join in The International Work Camp 28th. First of all, I would like to say thank you to St.Andrew University Japan and Widhya Asih Foundation who gave me an opportunity to join in this work camp.

I was so glad to meet some friends from another country. First time I met them all at Puri Saron Hotel. Some of them introduce their

self in English. Then I tried to introduce myself in Japanese. I was so nervous because my Japanese was not good enough. I just speak in English but I didn't want to be selfish. I guess, I have to speak in Japanese too. So I studied hard at night. And sometimes my room mate (Remi Sugiyama) help me too. Day by day, I could talk with them. I've tried to talk with everyone. And all Japanese students were so friendly and funny. We can understand each other. If I made a mistakes in my sentences, they tried to recorrect patiently.

In Blimbingsari I stayed at Mr.Kornelius's home with Remi Sugiyama. MrKornelius and family are very kind. Bapak ,Ibu and Kak Made are my new family from now on. My homestay is near from Asrama. It takes 3 minutes from homestay to asrama. And there is 'Warung' at my homestay. Remi was so happy too.

I got a great experience when we worked at Melaya and gave some Japanese Lesson for High School, Junior High School, Elementary School and Vocational High School. That was my first time to teaching in front of the class. I have never been before. I was so happy because we can make a good team work. That was awesome! I can learn anything from this program. We were dance, sing, went to Church, played together with children and laugh. Such a lovely time. I can learn about some Japanese culture too. Another moment that I'll never forget is when we cooked together. You know, I really love Japanese food, so I was very excited when we cooked together.

The moment that still stucked on my mind, when we visited Banyu Poh village. I saw

their condition. I saw a smile from the children but I guess, behind that smile there was a problem. It was so touched. I cannot imagine if I was in their shoes. Well, I'm so thankful.

We spent 2 weeks with love. Because we are not just a friends but we are best friend. I was so sad because we have to separate. I would like to say thank you to Remi. I love her so much. She was always helped me. Thank you to my besties Kouta, Shuhei, Shouta, Mio, Taiki, Daichi, Katsuya, Takeshi, Tomoya, Misaki, Kanako, Kaoru, Hiroo, Kodai. I miss them all. "Good job guys!" I hope this friendship will be last forever. Thank you to all children at Asrama for fill my day with smile. Also thank you to Professor Miyake, Isao Chaplain, Matsumoto-san, Pak Swikrama, Kak Forman and Ibu Miwa. I am very happy to meet you all and had a great time together. I hope this program can be held every year. Because it is good to make a relationship between Indonesia and Japan. That is all about my experience in IWC 28th. God bless. Love you all.

Sem Fredrix Lesnussa



I introduce myself with Japanese language "watashi wa sem desu"

Firstly, I would like to say thank you very

much to Jesus Christ for His blessing as till this moments I am blessed to live and able to finish the IWC 28 joy fully. Before I discuss further about the IWC 28 topic, I would like to say thank you to GKPB, Dhyna Pura University, St Andrew University and Widhya Asih Foundation.

There are many experiences that I gained in IWC 28 like I found friendship from Japan. They are very respect full that we became family. We laugh and joke together. We share both sadness and happiness as well as other unexplained moments we gone through together that can't be forgotten Even though. I can't speak Japanese but they have been very understanding.

At first I was nervous when I realized that I can't speak Japanese. I only introduced myself in Japanese language " hehehehe, I was only study Japanese language only for 2 weeks.

Moreover, something that I can't forgot is when I see their eagerness in learning is very great. Before they start working they said in choir "Ganbate". Then after they finish their work they said "otsukare samadeshita" and I can play with all children in asrama is fun for me. I have learned their culture, dances, culinary and study methods. The prime thing that impressed me is their spirit.

When I was in homestay, I stayed in the family of Mr.Murti who was very polite to us. I stayed with Tomoya Fukugawa, he spoke in English very well. Mr.Murti family often made us breakfast before we go to house boarding. We always talk on our way back from boarding house or before, about Indonesia culture, Japanese culture, television program, comedy and many more. Thanks a lot Mr. Murti



For me, IWC 28 is very incredible experience. Dear friends, you are very great team. When we were coming to schools to teach the student Japanese language, Hiragana, fruit basket game, karuta game, purpose game, I was in group with Kanako, Shuei, kaoru, and Taiki. We are not the only my group that is teamed greatly but other groups did the same. All students of St.Andrew was very incredible for have accepted us. I wish one day we can be together again. My deepest apologies If were done something that made you upset during the program. And I thanks to Mrs miwa, Mr.Matsumoto, Chaplin, Mr miyake from St Andrew. Lasts, Bli forman, Pak Nengah Swikrama From Widhya Asih foundation

Warm regards  
Sem Fredrix Lesnussa

#### Forman Suprandata



Time goes so fast without I realised, IWC has reached the age of 28 years. As long as the age, it's also has established a close relationship between Widhya Asih and St. Andrew's University. For me, every year it's precious and feels very happy to see the enthusiasm of the students of St. Andrew's University who came to Bali joined this work camp. There were always new faces and of course also with new spirit. Likewise the children in Blimbingsari

and Melaya are so cheerful and enjoyed to come in any activities organized by their brothers and sisters from Japan.

For me, myself, this is the 5th time I've been involved in the IWC. It was great when I always be given the opportunity every year to join it. Since from it, I can learn a lot of things that I probably could not achived anywhere else. One of them, that I could learn was Japanese culture which is very different from our culture in Indonesia. The first important lesson was about time management. Here I learned a lot and was always taught to appreciate the importance of time. Every single second is precious and it was proven when all of the activities run well. So it feels very sad and embarrassed when I see our people (Indonesian/Balinese) still do not understand the importance of managing time.

Compactness and indefatigable spirit of Japanese students also triggers myself to be always excited in every activity, every day. This is something that very rarely seen in the daily life of Balinese people. In Bali, people normally use the words "Koh ati or Ngekoh" which means shy / lazy to get participated in an activity and let other people (in charge) do it. Unfortunately, this case also found each year during the camp activities among us Balinese people. This happens because this mentality has flourished among Balinese and very difficult to remove. Therefore, the presence of such a work camp like this help us a lot to change the mindset.

This year International Work Camp which endorsing a theme "Solidarity in different country" would actually grow in our hearts. With solidarity we may learn from each other, hand in hand and support each other.

Hopefully from this activity, the mindset of the people who get involved, especially the staff,

children and communities in the environment can be changed though it's not easy and I believe this work camp have a positive impact for everyone in the future.

第28回 国際ワークキャンプ(インドネシア) 学生預り金精算書

単位: 円

収入の部		支出の部			
<b>参加徴収金</b>		<b>¥2,700,000</b>	<b>旅費 (JTB西日本支払分)</b>	<b>@122,860 × 15</b>	<b>¥1,842,900</b>
(内 訳)			(内 訳)		
学生負担	@ ¥ 150,000 × 15 ¥2,250,000		航空運賃86,500円	内訳' @86,500 × 15	
			関空施設使用料 3,040円		
			渡航手続代金 4,320円	内訳' @36,360 × 15	
			燃料サーチャージ 29,000円		
			<b>インドネシア入国審査(機内)料金を円貨支払</b>	<b>@3,630 × 15</b>	<b>¥54,450</b>
			<b>インドネシア出国時空港使用料</b>	<b>@1,802 × 15</b>	<b>¥27,030</b>
(内 訳)			<b>現地での宿泊、食費、交通費その他 (YAYASAN WIDHYA ASHIIH 支払 学生負担分)</b>		
参加補助金	@ ¥ 30,000 × 15 ¥450,000		<b>プリンピンサリ村支出分</b>	<b>約@13,774 × 15</b>	<b>¥206,610</b>
対学生補助54万円のうち20万円は社会貢献基金(IWC)、34万円は課外活動等補助費			食事代8/19~8/31)		
			交通費		
			8/20~8/29・ムラヤへ向かうトラック、8/22・バニユボ村訪問時、8/31・市場へ買い出し時		
			その他		
			日本食用食材等		
			バケツ6、ワーク用麦藁帽子20、歓迎用垂れ幕2枚、ワーク用軍手6、日本語授業教材作成消耗品(画用紙、シール、マジック)、運動会用消耗品(ビニール紐、テープリボン4、石灰、染粉、線紐)		
			<b>デンパサール支出分</b>	<b>約@6,902 × 15</b>	<b>¥103,530</b>
			空港駐車場代(8/18)、昼食代(8/21、9/1.9/2)、日本食パーティー用調理器具等(8/21)、日本語授業料備品等、ワーク用軍手、清涼飲料水等(8/22)、パロンダンス鑑賞(9/3)、バス・トラックレンタル代(8/18~9/3)		
			<b>ディアナブラ・ホテル支出分</b>	<b>約@20,515 × 15</b>	<b>¥307,725</b>
			(3泊宿泊費、朝食3、夕食2含む)		
			(消耗品)ユニフォーム(ホーム入り)	@2,835 × 15	¥42,525
			(消耗品)速乾Tシャツ(オリジナルプリント入り)	@1,400 × 15	¥21,000
			(損害保険料)特別プログラム(飯盒炊爨)時の保険(6/9 学生負担)	@27 × 15	¥405
			<b>剰余金(返却予定)</b>		<b>¥93,825</b>
<b>合 計</b>		<b>¥2,700,000</b>	<b>合 計</b>		<b>¥2,700,000</b>

# 第29回国際ワークキャンプ (インドネシア)参加のお勧め

第29回国際ワークキャンプ(インドネシア)の参加者を募集する予定です。

## 【このキャンプの特色】

国際ワークキャンプは、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以来実施している「アジアの人々の協働から学ぶ」プログラムです。

このプログラムの意義は、本学学生と現地学生で編成するキャンプ隊を、関係者の支援を基に、これまでの実践を継承しつつ、学生たちが協力し合って立案、計画、練習、実行して、バリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設の建設・設備整備・運営に参加することにあります。

また、このプログラムは、事前の学習と準備から始まります。現地では、児童養護施設の子どもたち、インドネシアの学生、施設・教会関係者、村の人々、ホームステイ先の方々との労働・交流などの様々な活動をしていきます。そして帰国後では、事後研修・報告書作成・報告会の開催などを行い、このプログラムを通して、学生たちは多くの経験を経ています。観光客がほとんど行くことのないプリンピンサリという村において、現地の人々と触れ合いながら実生活の中で、本当の意味でのバリの歴史や文化に触れることのできる、総合的な体験型学習です。

## 【期間】2015年8月19日～9月5日の18日間(予定)

※国際情勢等の変化によっては中止・延期・期間の変更・期間の短縮もあり得ることを踏まえておいてください。

【キャンプ地】インドネシア・バリ州ジュンブラナ県ムラヤ郡プリンピンサリ村、ウディア・アシ(意味:愛と知恵の家)第2アスラマ(意味:児童養護施設)

【ワーク内容】プリンピンサリ村の児童養護施設整備工事等

【主催】桃山学院大学、バリ・プロテスタント・キリスト教会

【共催】ディアナ・ブラ大学

【注意事項】月・木にインドネシア語クラス・インドネシア文化クラスを開講します(必修)。履修登録の必要はありません。時間割は5限か6限を予定(詳細決定は3月)

【単位認定】4単位認定されます。(共通自由科目「海外研修-国際ワークキャンプ」)

## 【参加自己負担金】【約140,000円～150,000円の予定】

〈上記は、教育後援会からの援助金3万円を含む額です。その他に日本学生支援機構より、奨学金支給の可能性(7万円)があります。(前年度支給実績は15人中13人)なお、為替レート、燃油サーチャージの変動等により参加自己負担金額が変更される場合があります。〉

※パスポート取得、予防接種等に関する費用、海外旅行保険代金は自己負担です。

キリスト教センター集会室で行われる事前説明会にお越し下さい(4月中旬頃を予定しています)。

ご質問等は……キリスト教センター内 チャペル事務室まで

## 編集後記

IWCとは日本ではなかなか経験することができない事に挑戦させてもらえる機会である。イメージではなく、実際に異文化を見て・触れ合い・感じるにより得れるものがある。

この報告書は滞在IWC28のメンバーが体験し、感じたことを日本に帰国してから振り返りまとめられた報告書である。報告書内容は、事前研修から現地に行ったまでの内容となっている。

IWCでの経験により、新たな目標を見つけることができた者・価値観が変わった者がいる。全員がかけがいのない物を得ることをでき、人生を変える小さなきっかけがここにあった。

報告書を見てもらい様々な人々にIWCが取り組んだことを知ってもらい、今回の経験を未来に活かしてもらいたくつくられたことを理解してもらいたい。

これまでの活動を報告書という形で残し、積み上げられた成果をこれからも崩すことなく継続してほしい。

### 国際ワークキャンプ報告編集委員

古城	克哉
深川	智哉
小塚	未央
新	歌奈子
黒田	柗平
下地	皓太
森	健
貴田	薫
黒岩	三沙樹
福島	弘大
中川	翔太
丸茂	太暉
村上	大地
杉山	怜美
西村	寛生

第28回 国際ワークキャンプ(インドネシア) 報告書

発行日：2014年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131 (代)

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360 (代)







# Persahabatan Kesetiakawanan tidak berbatas negara



桃山学院大学  
St. Andrew's University